

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ

用言寺遺跡Ⅰ

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ

## ようごんじ 用言寺遺跡Ⅰ

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 序

北陸新幹線は、東京都を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪府に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成17年度に実施した用言寺遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、高田平野の河岸段丘上に営まれた鎌倉時代から室町時代に至る集落跡であることが明らかになりました。居住域が、水田と考えられる生産域と並ぶように検出され、集落の景観を考える上で貴重な事例となるものと期待されます。また、井戸からまとまって出土した白磁は、当時の食器の組み合わせを知るうえで極めて重要な資料となります。

今回の調査結果が地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜りました上越市教育委員会、並びに地元住民の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の御配慮をいただいた独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備機構北陸新幹線建設局、同上越鉄道建設所の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教 育 長 武藤 克己

## 例 言

- 1 本報告書は、新潟県上越市大字今泉字用言寺586番地ほかに所在する用言寺遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。
- 4 埋文事業団は掘削作業等を株式会社古田組に委託して発掘調査を実施した。
- 5 出土遺物および調査に係る各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「05用ゴン」とし、出土地点や層位などを統けて記した。
- 6 本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。なお、作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。
- 7 引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第Ⅵ章の文献については章末に掲載した。
- 8 調査成果の一部は、現地説明会（平成17年8月6日）等で公開しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。
- 9 自然科学分析は、株式会社 古環境研究所に委託して実施し、結果を編集の上、第Ⅵ章に掲載した。このうち、火山灰分析の結果は、結論のみを第Ⅳ章に示すこととした。
- 10 遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は株式会社 セビアスに委託した。
- 11 本書の執筆は、加藤 学（埋文事業団 班長）、杉田和宏（同主任調査員）、近藤慎子（同文化財調査員）、相羽重徳（株式会社 古田組 調査員）、松永篤知（同 調査員）があたり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。  
第Ⅱ章2BC・第Ⅶ章1・2：相羽 第Ⅱ章2A・第Ⅳ章2：相羽・加藤 第Ⅴ章2B・3B：松永  
第Ⅳ章1B1)2)：加藤・近藤 第Ⅳ章1B4)・1C1)：加藤・杉田 その他…加藤
- 12 発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げます。（敬称略、五十音順）  
伊藤 啓雄 大島 政義 大平 理恵 岡村 道雄 岡本 郁栄 金子 拓男 草間 敬子  
小島 幸雄 笹沢 正史 高島 喜榮 高島たき子 高島 信雄 高野 裕子 鶴巻 康志  
野村 忠司 平川 南 水澤 幸一 山本 信夫  
上越市都市整備部新幹線対策課 上越市教育委員会

# 目 次

## 第I章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業の経過	3
A 確認調査	3
1) 調査の体制	3
2) 調査の結果と取扱い	3
B 本発掘調査	5
1) 調査・整理の体制	5
2) 調査・整理の経過	5

## 第II章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境	6
2 歴史的環境	8
A 高田平野における遺跡の分布	8
B 「今泉村」と北国街道	12
C 文書に記された「今泉村」	13

## 第III章 調査の概要

1 グリッドと調査区の設定	14
2 基本層序	14
A 基本層序	14
B 遺物包含層	15
C 遺構確認面	15
D 遺構の切り合い関係と時期区分	17
3 調査の基本方針	17
A 遺構名の付し方	17
B 土層観察の記載方法	17
C 遺構の記載方法	18

## 第IV章 上層の調査

1 遺 構	19
A 概 要	19
1) 古 代	19
2) 中 世	19
3) 近世以降	20
B 中世(Ⅲ期～Ⅳ期)の遺構	20
1) 井 戸	20
2) 土 坑	27
3) 掘立柱建物	27
4) 溝	31
C 古代(Ⅱ期)の遺構	33
1) 溝	33
2) 性格不明遺構	40

2	遺物	40
A	中世の遺物	40
1)	概要	40
2)	中世前期	41
3)	中世後期	44
4)	中世前期～後期	45
5)	遺構外出土の遺物	46
B	古代の遺物	47
1)	遺構内出土の遺物	47
2)	遺構外出土の遺物	48
C	年代の詳細が明らかでない遺物	49

## 第V章 中層・下層の調査

1	調査の方法	50
2	中層の調査	50
A	遺構・遺物の検出状況	50
B	遺物	51
3	下層の調査	52
A	遺構・遺物の検出状況	52
B	遺物	52

## 第VI章 自然科学分析

1	植物珪酸体分析	53
2	花粉分析	55
3	寄生虫卵分析	59
4	樹種同定	59

## 第VII章 まとめ

1	SE183井戸一括出土遺物の編年的検討—至徳寺編年との比較—	63
2	用言寺遺跡で使用された土器・陶磁器の組み合わせ	66
3	用言寺遺跡における中世の集落構成	68
	〈要約〉	71
	〈引用・参考文献〉	72

## 挿図目次

第1図	北陸新幹線の路線と遺跡の位置	2	第18図	Ⅱ期の溝における主軸方向	36
第2図	試掘確認調査の結果	4	第19図	Ⅱ期の溝における勾配	36
第3図	調査・整理の経過	5	第20図	Ⅱ期の溝における主軸方向別分布図と遺物出土地点	38
第4図	高田平野の地形と遺跡の立地	7	第21図	Ⅱ期の溝における新旧関係	38
第5図	高田平野における遺跡分布	9	第22図	中層・下層の調査風景	50
第6図	基本層序模式図	16	第23図	植物珪酸体分析結果	54
第7図	基本層序	16	第24図	植物珪酸体の顕微鏡写真	54
第8図	混入物の含有率	18	第25図	花粉・胞子の顕微鏡写真	57
第9図	遺構の平面形態と断面形態の分類	18	第26図	花粉ダイアグラム	57
第10図	井戸・土坑の規模	21	第27図	出土土製品切片の顕微鏡写真	61
第11図	井戸の形状・掘削深度と透水層	22	第28図	SE183出土土師器・白磁の口径分布	64
第12図	井戸における遺物の出土状況	24	第29図	土師器の口径/器高分布	64
第13図	掘立柱建物の構造と主軸方向	28	第30図	至徳寺遺跡・用言寺遺跡 編年表	65
第14図	仲田遺跡における掘立柱建物の構造と主軸方向	29	第31図	用言寺遺跡における土器・陶磁器の組み合わせ	67
第15図	Ⅲ期・Ⅳ期の溝の分布と主軸方向	32	第32図	用言寺遺跡における中世の集落構成	69
第16図	Ⅱ期の溝における断面形態の分類	34			
第17図	Ⅱ期の溝における深さと幅	36			

## 表目次

第1表	高田平野における遺跡分布	8	第3表	花粉分析・寄生虫卵分析結果	57
第2表	植物珪酸体分析結果	54	第4表	樹種同定結果	61

## 図版目次

図版 1	遺構全体図 (1) (Ⅰ期～Ⅴ期)	
図版 2	遺構全体図 (2) (中世～近世、Ⅲ期～Ⅴ期)	
図版 3	遺構全体図 (3) (古代、Ⅱ期)	
図版 4	遺構分割図 (1) 遺構個別図 (1) (SD402・403)	
図版 5	遺構分割図 (2) 遺構個別図 (2) (SK3・4・17, SD2・5～10・12・13・15)	
図版 6	遺構分割図 (3)	
図版 7	遺構個別図 (3) (SD11・18・19・21・22・75・126・202・209・215)	
図版 8	遺構分割図 (4)	
図版 9	遺構個別図 (4) (SB1, SE61, SK55, SD18・19・21・22・27・28・31・33・62・68・75・209)	
図版 10	遺構分割図 (5)	
図版 11	遺構個別図 (5) (SK156・213, SD21・31・132・139・176・201・209・219)	
図版 12	遺構分割図 (6)	
図版 13	遺構個別図 (6) (SE183, SK175, SD18・39・75・139・161・163・168・181・182・232・233・236・251)	
図版 14	遺構分割図 (7)	
図版 15	遺構個別図 (7) (SB2, SE154, SK135・220, SD131)	
図版 16	遺構個別図 (8) (SD128・130・138・172・184・253・255～257・259～264)	
図版 17	遺構分割図 (8)	

- 図版 18 遺構個別図 (9) (SB3・4)  
図版 19 遺構個別図 (10) (SB8・10)  
図版 20 遺構個別図 (11) (SE150・151・153・155・167・169・170)  
図版 21 遺構個別図 (12) (SE171・173・174・180, SK148・149, SD189・289, P185・186)  
図版 22 遺構分割図 (9)  
図版 23 遺構個別図 (13) (SB5・6)  
図版 24 遺構個別図 (14) (SE157～159・248, SK140・250, SD101・133・276, SX103)  
図版 25 遺構分割図 (10) 遺構個別図 (15) (SD401・404)  
図版 26 中世の遺物 (1)  
図版 27 中世の遺物 (2)  
図版 28 中世の遺物 (3)  
図版 29 中世の遺物 (4)  
図版 30 古代の遺物 (1)  
図版 31 古代の遺物 (2) ・その他の遺物  
図版 32 遺跡近景  
図版 33 上層完掘 (1)  
図版 34 上層完掘 (2)、白磁一括資料  
図版 35 遺跡近景・遠景、上層完掘 (3)  
図版 36 上層完掘 (4)  
図版 37 古代の溝 (1)、中世の井戸 (1)、基本層序  
図版 38 遺跡近景、上層完掘 (5)  
図版 39 上層完掘 (6)  
図版 40 中世の井戸 (2)  
図版 41 中世の井戸 (3)  
図版 42 中世の井戸 (4)  
図版 43 中世の井戸 (5)  
図版 44 中世の井戸 (6)  
図版 45 中世の井戸 (7)、土坑 (1)  
図版 46 中世の土坑 (2)、ビット、溝 (1)  
図版 47 中世の溝 (2)、古代の溝 (2)  
図版 48 中世の溝 (3)、古代の溝 (3)  
図版 49 古代の溝 (4)  
図版 50 古代の溝 (5)  
図版 51 古代の溝 (6)  
図版 52 古代の溝 (7)、中層の調査 (1)  
図版 53 中層の調査 (2)  
図版 54 中層・下層の調査、調査風景  
図版 55 中世の遺物 (1)  
図版 56 中世の遺物 (2)  
図版 57 中世の遺物 (3) ・古代の遺物 (1)  
図版 58 古代の遺物 (2) ・その他の遺物



# 第1章 序 説

## 1 調査に至る経緯

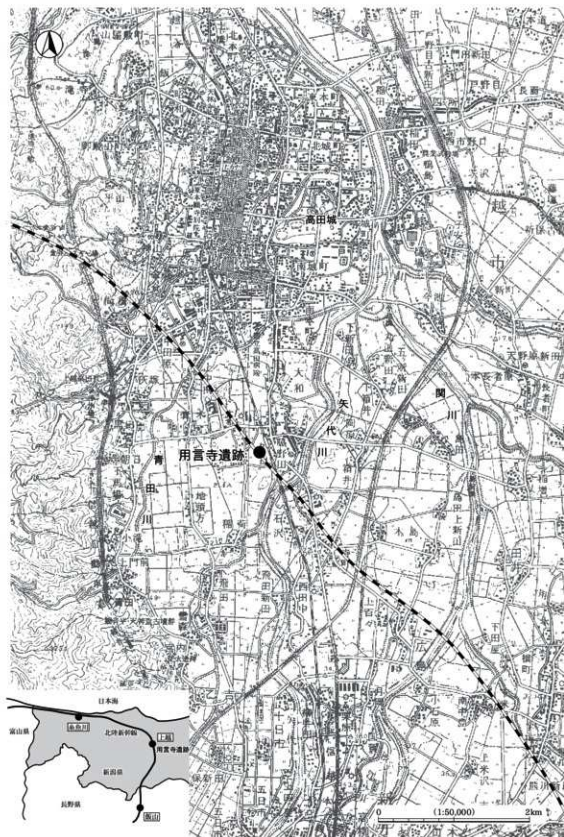
北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。東京を起点とし、上越新幹線高崎駅で分岐して、長野市、上越市、富山市、金沢市、福井市等の主要都市を經由し、新大阪に至る延長約700km（うち東京・高崎間105kmは上越新幹線と共用）の路線である。このうち、高崎・長野間は、平成9年10月から営業運転している。

長野市を起点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長60kmは、昭和47年に基本計画が、昭和48年に整備計画が決定され、平成10年3月に長野・上越間の工事実施計画が許可された。これを受けて、鉄道・運輸機構と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成10年9月、鉄道建設公団（現 鉄道・運輸機構）から分布調査の依頼を受けた県教委は、同年11月に調査を実施した。その結果、今回の調査対象地周辺で古代の遺物が採集されたため、新潟県遺跡台帳に「用言寺遺跡」として記載した。鉄道建設公団へ遺跡が新たに発見されたことを報告するとともに、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であるため、今後、確認調査を実施して取扱いを判断する必要があるとした。

平成16年度には鉄道・運輸機構から確認調査実施の依頼を受け、県教委は埋文事業団に調査を委託した。平成16年11月15日～11月18日に確認調査を実施した結果、河岸段丘上に平安時代・古墳時代・縄文時代の遺跡の存在が明らかになり、遺構・遺物が検出された5,890m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要であると報告した。さらに遺跡が南東側に延伸することが明らかになったため、平成17年4月6日～8日・27日に確認調査を行い、3,700m<sup>2</sup>についても本発掘調査が必要と報告した。これにより、用言寺遺跡の本発掘調査必要範囲は、あわせて9,590m<sup>2</sup>となった。

その後、鉄道・運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で取扱い協議を行い、平成17年度は仮称・上越駅の駅舎にあたる5,890m<sup>2</sup>を本発掘調査することとなった。鉄道・運輸機構から依頼を受け、県教委は埋文事業団に本発掘調査を委託し、平成17年4月に着手した。その後、本発掘調査着手後に用地買収が進展した3,000m<sup>2</sup>についても追加調査することになり、平成17年度の本発掘調査対象面積は合計8,890m<sup>2</sup>となった。



第1図 北陸新幹線の路線と遺跡の位置  
〔国土地理院発行「高田東部」「高田西部」1:50,000原図〕

## 2 調査と整理作業の経過

### A 確認調査

#### 1) 調査の体制

平成16年度

調査期間	平成16年11月15日～11月18日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 板屋越麟一）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	黒井 幸一（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川二三夫（	同	総務課長）
庶務	高野 正可（	同	総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（	同	調査課長）
調査指導	山本 肇（	同	調査課担当課長代理）
調査担当	滝沢 規朗（	同	調査課班長）
職員	片岡 千恵（	同	調査課嘱託員）

平成17年度

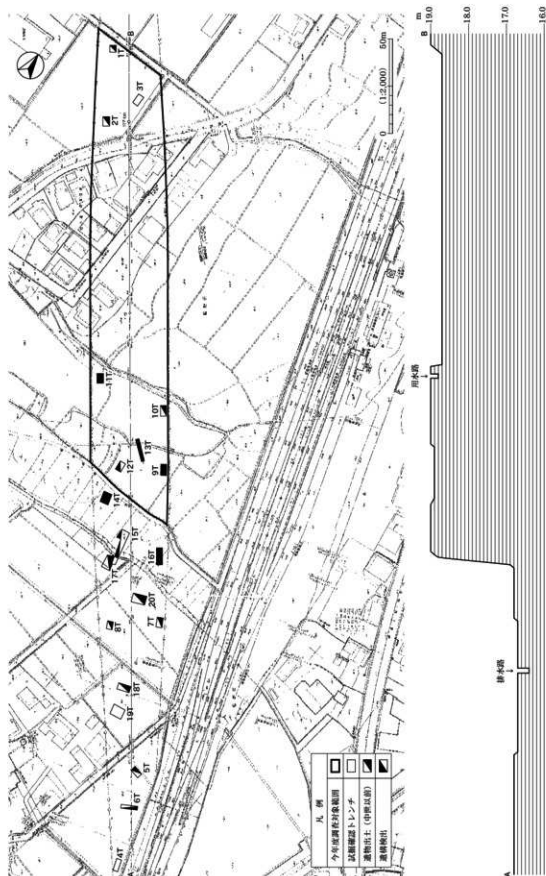
調査期間	平成17年4月6日～4月8日・4月27日		
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）		
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団		
総括	波多 俊二（財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長）		
管理	長谷川二三夫（	同	総務課長）
庶務	長谷川 靖（	同	総務課班長）
調査総括	藤巻 正信（	同	調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（	同	調査課担当課長代理）
調査担当	滝沢 規朗（	同	調査課班長）
職員	斉藤 肇（	同	調査課嘱託員）

#### 2) 調査の結果と取扱い

用言寺遺跡の確認調査は、地形により河岸段丘上と河岸段丘下の低地に区分される14,300m<sup>2</sup>を対象に実施された。2度にわたる確認調査の面積は、20か所、430m<sup>2</sup>になる（第2図）。

河岸段丘上の調査は平成16年度に実施された。その結果、3面の遺跡の存在が確認された。この3面を、上位から上層（平安時代）、中層（古墳時代?）、下層（縄文時代後期）とした。このうち上層からは遺構（ピット・土坑）が検出され、平安時代の土器が出土することが確認された。これにより河岸段丘上に平安時代の遺跡が存在することが確認されたため、平成16年度調査範囲の上層5,890m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と判断した。一方、中層からは古墳時代の土器片が、下層からは縄文時代後期の土器片が出土したものの遺構は検出されなかったため、上層の本発掘調査終了後に遺跡の広がりと内容を把握するための確認調査を再度実施することが必要とされた。

河岸段丘崖から低地の調査は、平成17年度に実施された。段丘崖に近い段丘上からは、上層に対応する遺構（溝・ピット）が検出された。低地からは、古代・中世を中心とする遺物が出土し、段丘上の上層に対応する資料と判断される。遺構は検出されなかったが、段丘崖から多量の遺物が集中する等の状況があったため、3,700m<sup>2</sup>について本発掘調査が必要と判断された。



第2図 試掘調査調査の結果

## B 本発掘調査

## 1) 調査・整理の体制

調査期間	平成17年4月25日～平成17年8月26日
整理期間	平成17年12月1日～平成18年2月28日
調査主体	新潟県教育委員会(教育長 武藤 克己)
調査	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(理事長 武藤 克己)
総括	波多 俊二(財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 事務局長)
管理	長谷川 二三夫( 同 総務課長)
庶務	長谷川 靖( 同 総務課班長)
調査総括	藤巻 正信( 同 調査課長)
調査指導	田海 義正( 同 調査課担当課長代理)
調査担当	加藤 学( 同 調査課班長)
職員	杉田 和宏( 同 調査課主任調査員)
	石藤 慎子( 同 調査課文化財調査員)
支援組織	株式会社 古田組
現場代理人	竹内 一喜(株式会社 古田組)
調査員	相羽 重徳(株式会社 古田組 調査員)

## 2) 調査・整理の経過

本発掘調査は、平成17年4月から着手することで調整が進められた。まずは進入路の確保が必要となり、地域の協力を得て借地し仮設道路を敷設することとなった。その後、4月下旬までに事務所設置等の準備を行い、これと併行して表土掘削を開始した。表土掘削の目処がついた5月9日からは、作業員を本格的に投入した。遺物包含層の掘削は残存状況が良好でなかったため、遺物の稀薄な部分については重機を併用して掘削を進めた。遺物包含層掘削後に開始した遺構精査においては、遺構の分布に顕著な濃淡があることが明らかになった。また、地山と遺構覆土が酷似しており、その判別は困難であった。適宜、サブトレンチを設定して遺構の形状を把握しながら掘削を進めたため、一般的な調査より時間を要することとなったが、遺構の形状や堆積状況のパターンを把握できた後は順調に作業が進んだ。しかし、6月28日の集中豪雨で現場が水没し、その復旧等でおよそ2週間作業を遅延したこともあり、当初の予定より1週間遅れて、8月26日に調査を終了した。その後、事務所撤収、埋め戻し等の作業を行い、9月8日に現場を旧状に復して鉄道・運輸機構に引き渡した。なお、6月4日には上越市和田地区への公開(参加者150名)、8月6日には一般公開(参加者222名)を実施した。

整理作業は、現地調査と併行して開始した。出土品については、順次、水洗・注記を完了させ、選別後、実測図化を行い、現地調査終了時には9割の遺物実測を完了させた。遺構図面の整理についても、現地では6割を完了させた。その後、調査班が糸魚川市大角地遺跡の調査を担当したため整理作業を一時中断し、12月から作業を再開した。12月中に遺構図面の整理、遺物実測図のトレースを完了させ、1月上旬にすべての原稿を入稿した。その後、2月末までに編集・校正を行い、3月に印刷し刊行した。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
本発掘調査												
準備工												
調査												
現場撤収												
整理作業												
図面整理												
遺物水洗・注記												
遺物実測												
遺物トレース												
原稿執筆												
編集・校正												
印刷												

第3図 調査・整理の経過

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

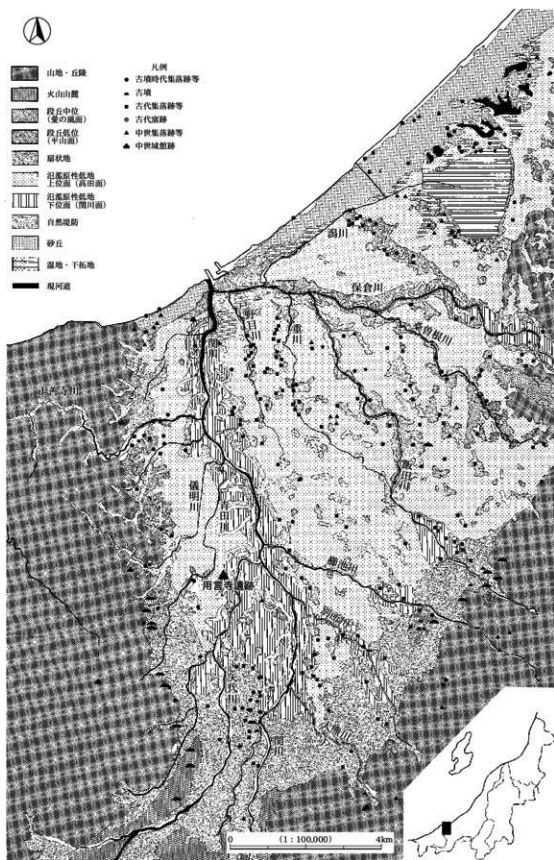
用言寺遺跡が所在する高田平野は、新潟県の南西部に位置する沖積平野である。背後には、米山(993m)や尾神岳(757m)をはじめとする米山山地、菱ヶ岳(1,129m)や鍋倉山(1,289m)等からなる関田山脈、火打山(2,462m)や南葉山(949m)等からなる西頸城山地が連なる。平野の南西部には、標高2,454mの妙高山等からなる妙高火山がそびえる。周囲の山地や山脈の麓には丘陵や台地状の地形が発達し、高田平野と接する。

これらの山々や丘陵からは、数多くの河川が流れ出している。平野の北東部には、黒川や吉川を合流する柿崎川が、柿崎で日本海に注いでいる。平野の中央部から西部にかけては、長野県境に源流をもつ関川が、樺池川・別所川・大熊川・矢代川・青田川等を合流しながら平野を北流する。さらに河口域で保倉川・飯田川を合流し、直江津で日本海に注いでいる。また、平野南東～南西の山麓には、関川・矢代川・大熊川・別所川・樺池川等によって形成された扇状地形が発達している。

平野には沖積段丘が発達し、これらは上位から高田面と関川面の2面に区分されている〔高田平野地盤沈下団体研究会1973、高田平野団体研究グループ1981〕。このうち用言寺遺跡が立地する高田面は、主に礫・砂・シルトの互層によって形成された堆積面であり、その分布は平野の大部分を占める。なお、平野の中央部において高田面の表層地質やその珪藻遺骸について検討した結果、この地域にはかつて沼沢地のような環境が広がっていたことが明らかにされている〔高田平原団体グループ1962〕。一方、関川面は、関川とその支流に沿って分布する氾濫原堆積物である関川層からなる。平野に分布する遺跡の年代が検討された結果、高田面は古墳時代初頭から段丘化しはじめ、数回におよぶ洪水性堆積物によって覆われながら平安時代には完全に段丘化したものと考えられている。しかしながら、高田面に立地する弧宮遺跡(52)からは、縄文時代草創期の石器、後期の土器が出土しており、その年代については検討が必要である。関川面には遺跡数が少ないものの、段丘化の時期は中世以降と考えられている〔高田平野団体研究グループ1981、岡本1999〕。

平野の前面には、海岸線に沿うように潟町砂丘が分布している〔高田平原団体研究グループ1965〕。砂丘の規模は、延長約20kmで最大幅約2.5kmにおよび、その形は中央部で内陸側に広くなり両端で狭くなっている。潟町砂丘は「古砂丘型砂丘」と呼ばれ、下末吉期末の海退にともなって形成された古砂丘の潟町砂層と、現世の砂丘を構成する新期砂丘砂層に区分されている〔新潟古砂丘研究グループ1976〕。また、砂丘の内側には、朝日池・鶴ノ池・天ヶ池・蜘蛛池等、多数の湖沼(後背湿地)がみられる。

用言寺遺跡は、矢代川の旧氾濫原左岸の段丘上(高田面)に立地する。段丘上の標高はおおよそ19mを測り、段丘下の低地とは2mの比高差がある。低地からも古代・中世の遺物が出土しており、この比高差は当時と大差ないものと考えられる。遺跡の東方500mを北流する矢代川は、氾濫を繰り返してきたといわれている。大きく蛇行しながら関川と垂直に合流するため、関川の水位が上昇すると矢代川の水が流れ込めなくなり、越堤して周辺に洪水被害をもたらした。今回の発掘調査においても土層が砂質シルトと粘質シルトの互層から構成されることが確認されており、そのことを裏付けている。特に、平安時代の遺構



第4図 高田平野の地形と遺跡の立地

〔北陸地方建設局北陸技術事務所1981 新潟県農地部農村総合整備課1980,1981を改変〕

が洪水性の堆積物で短期間のうちに埋没した様子が確認されており、段丘上にまで洪水被害がおよんだことが窺えた。なお、段丘上の基盤層は硬化した粗砂層であり、漸移層を挟んだ上位の黒色砂質シルト層から縄文時代後期の遺物が出土している（第6図）。これにより、基盤層は縄文時代後期以前に形成されたものと考えられる。一方、粗砂層は段丘上のみならずフラットに堆積しており、段丘崖で途切れるものとみられる。平成18年度調査を待って最終的に判断する必要があるが、今回の発掘調査が河岸段丘の形成時期を考える上で重要な情報をもたらすものと期待される。また、縄文土器が出土した土層は黒色化が著しく進行しており、縄文時代に土壌化が進行していた可能性が考えられる。

## 2 歴史的環境

### A 高田平野における遺跡の分布

高田平野とその周辺に広がる古墳時代・古代・中世の遺跡分布は、第5図・第1表に示すとおりである。当該地の遺跡は、上越市教育委員会が実施した詳細分布調査〔上越市教育委員会1981〕や開発に伴う発掘調査により、遺跡の存在、範囲や内容が次第に明らかになってきた。しかし、ここに示したものがすべてではなく、多くの遺跡が未だ発見されず地中に埋没していると考えられる。

**古墳時代** 高田平野は県内最大の古墳集中地域であり、平野周縁の丘陵上を中心に中期・後期の群集墳が密集している。高田平野の西部丘陵には天神堂古墳群(2)・観音平古墳群(3)・青田古墳群(4)・稲荷山古墳群(5)・南山古墳群(6)・黒田古墳群(7)・灰塚古墳(8)が、矢代川流域には小丸山古墳群(9)・梨ノ木古墳群(10)・谷地林1号墳(11)が、南東部飯田川・柳池川の流域には菅原古墳群(12)・高士古墳群(13)・宮口古墳群(14)・水科古墳群(15)・水吉古墳群(16)等が存在する。

古墳時代の集落遺跡の確認例は、平野部・丘陵部ともに少ない。前期の遺跡としては、一之口遺跡東地区(17)・北割遺跡(18)・子安遺跡(19)・中島廻り遺跡(20)・津倉田遺跡(21)等、多数の遺跡が発見されている。中期になると遺跡数は激減し、その代表例は月岡遺跡(22)や北割遺跡(18)である。後期になると再び遺跡数が増加し、旧板倉町の五反田遺跡(23)・仲田遺跡(24)、妙高市(新井)の杉明遺跡(25)・倉田遺跡(26)・栗原遺跡(27)・宮ノ本遺跡(28)等、平野の南東部の扇状地上に集中する傾向にある。また、平野東側では菅原古墳群と同一段丘上に立地する岡嶺遺跡(29)は造墓集団の集落である可能性が指摘されている。なお、用言寺遺跡の北方100mに隣接する釜蓋遺跡は、弥生時代終末の大規模な遺跡であることが明らかにされつつある。用言寺遺跡からも同時期の資料が確認されているが2点と極

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	用言寺	12	菅原古墳群	23	五反田	34	大貫	45	春日山城跡
2	天神堂古墳群	13	高士古墳群	24	仲田	35	向横	46	十日市館
3	観音平古墳群	14	宮口古墳群	25	杉明	36	末野古堂跡	47	乙古館
4	青田古墳群	15	水科古墳群	26	倉田	37	今熊古堂跡	48	数ヶ尾城跡
5	稲荷山古墳群	16	水吉古墳群	27	栗原	38	横曾根田	49	御館
6	南山古墳群	17	一之口	28	宮ノ本	39	高柳遺跡群	50	箕冠城跡
7	黒田古墳群	18	北割	29	岡嶺	40	旧得法寺跡	51	黒田城跡
8	灰塚古墳	19	子安	30	今池	41	寺町I	52	狐宮
9	小丸山古墳群	20	中島廻り	31	本長者原庵寺	42	御館跡		
10	梨ノ木古墳群	21	津倉田	32	下馬場	43	安国寺跡		
11	谷地林1号墳	22	月岡	33	滝寺	44	至徳寺		

第1表 高田平野における遺跡分布





第5図 高田平野における遺跡分布

〔国土地理院発行「高田東部」「高田西部」「輪崎」1:50,000原図〕

めて少なく、釜蓋遺跡との直接的な関係を積極的に評価することはできない。

古代 古代には、新潟県一帯は越国の一部であった。「日本書紀」持統六(692)年九月の条に「越前国司」の記述があることから、7世紀末の越国は越前・越中・越後に分割されたと考えられる。この頃の越後国は阿賀野川以北を指しており、頸城郡は越中国に属していた。「続日本紀」大宝二(702)年の三月の条に越中国の4郡を越後国に分割したことが記され、その4郡とは、頸城郡・古志郡・蒲原郡・魚沼郡と考えられている。さらに、和銅元(708)年、越後国に新しく設置した出羽郡を和銅五(712)年に出羽国として分立したことにより、佐渡を除く現在の新潟県の領域が定まったと考えられている。「和妙類聚抄」には「国府在頸城郡」とあり、頸城郡内に越後国府があったと考えられる。

また、頸城郡は10郷が記され、このうち沼川が現在の西頸城で、ほか9郷は高田平野にあったと推定される。郷名記載の順序と高田平野の遺跡分布の傾向からは、宇津郷は関川・戸野目川下流域、栗原郷は栗原遺跡を含む矢代川と関川中流の左岸、荒木郷は大熊川流域、板倉郷は別所川流域、高津郷は飯田川中流域、物部郷は樺田川中流域、五十公郷は保倉川上流域、夷守郷は旧保倉川の自然堤防上の遺跡集中域、佐味郷は柿崎川流域を含む旧大湊以北に比定され〔山田1986、相沢2004など〕、用言寺遺跡は栗原郷に含まれる。

この時期の遺跡は、他の時代と比べて爆発的に増加する。遺物包含地・集落跡の多くは、高田面に立地する。中でも関川右岸の沖積段丘高田面縁辺に位置する今池遺跡(30)・子安遺跡(19)周辺は、県内有数の遺跡密集地である。今池遺跡は、8世紀前半～9世紀後半の地方官衙ないしは地方官人層の住宅と考えられている。しかし、国府の政庁城とは断定できず、隣接する長者原廃寺遺跡と有機的な関係を持つと考えられている〔坂井<sup>1984</sup>〕。近接する子安遺跡は、古墳時代～近世の大遺跡であるが、今池遺跡の衰退後遺構が爆発的に増加し、当地域における中核的な遺跡とみられる〔笹澤2003〕。今池遺跡の東には本長者原廃寺(31)があり、基壇跡と思われる遺構が検出され、瓦が出土しており、古代寺院とみられる〔小島<sup>1984</sup>〕。

国府および国分尼寺の位置は今日まで先学によって論じられおり、上越市善光寺浜・長者原・法花寺・田井・国川、妙高市堂庭・国賀・栗原・今府等、諸説があるが決着を見ていない。近年、考古学的には今池遺跡、本長者原廃寺の周辺に国府と国分寺が存在した可能性が高いとされている〔坂井<sup>1984</sup>〕。用言寺遺跡は、これら古代の大規模遺跡が集中する地域から南西方向4kmに位置する。

また、高田平野周縁の丘陵には古代の須恵器窯跡が存在する。西頸城丘陵では下馬場(32)・滝寺(33)・大貫(34)・向橋(35)等の窯跡群が確認されている。向橋窯跡は8世紀前葉の瓦陶兼業窯跡で、本長者原廃寺出土瓦の産地と推定されている。東頸城丘陵裾部は高田平野周辺部最大の窯業産地であり、旧三和村末野(36)から旧浦川原村今熊(37)にかけて窯跡群が展開する〔笹澤2002〕。用言寺遺跡出土の須恵器には、胎土状況等から西頸城丘陵産・東頸城丘陵産双方が認められる。西頸城丘陵の窯跡群は、用言寺遺跡の北西方向約5km、東頸城丘陵の窯跡群は北東方向約6.5kmに位置する。

中世 中世に至っても、頸城地方は国府を置く越後の中心地として繁栄した。城館跡を除く中世遺跡は、高田面や自然堤防・扇状地に立地する。この傾向は、古代の遺跡分布にほぼ一致する〔戸根2003〕が、古代より遺跡数は少ない。

用言寺遺跡の立地する矢代川左岸においては、該期の遺跡はあまり知られていない。ただし、石塔を中心とする石造物は多数存在し、その多くが中世後期に属するもの〔加藤1973〕といわれている。現在の位置が造立された位置とは限らないが、ことさら遠く離れた場所に運ぶことは考え難いことから、石塔の

広汎な分布は該期には広く集落が分布していたことを示すものと考えられる。

周辺の鎌倉時代の主な遺跡は、飯田川、重川、関川の自然堤防上に位置する。「横曽根保」の可能性が指摘〔水澤2003〕されている横曽根田遺跡(38)、互いに同じ建物軸を共有〔坂井ほか1984〕する子安遺跡(19)と今池遺跡(30)がある。平野の南東部にも遺跡が多く分布する。該期から中世後期に至る集落跡が調査され村落構造が把握されつつある高柳遺跡群(39)〔高橋1999〕や、該期から中世後期に至る集落の変遷が具体的に捉えられた仲田遺跡(24)の調査事例〔加藤ほか2003〕等が注目される。

南北朝・室町期になっても、遺跡の立地にさほどの変化はみられない。前代に引き続き、重川沿いの横曽根遺跡、関川沿いの子安遺跡・木田遺跡が営まれている。横曽根遺跡では、15世紀代の青磁酒海壺や瓦器風が、石塔類が出土している〔小島ほか1994・1996〕。該地は応永十八(1411)年に居多神社の社領となっており関連性が注目されている〔水澤2003〕。正善寺川上流の中正善寺地区には経塚や墳墓、埋納銭地が築かれており、同じ南葉山系の舌状台地上には火葬墓が検出された旧得法寺跡(40)〔石川ほか1998〕がある。また、関川と矢代川に挟まれた氾濫原性低地面に位置する寺町1遺跡(41)では14世紀に比定される珠洲焼壺が完形で2点採集されており、経筒外容器あるいは蔵骨器、埋蔵銭容器として使用された可能性が指摘〔鶴巻1998〕されている。

中世都市として発展した直江津には、上杉氏の居館である御館跡(42)・安国寺跡(43)・至徳寺遺跡(44)等、越後府中の中心的機能を果たしたものと考えられる遺跡が存在する。御館は、弘治年間に謙信によって造営されたが、謙信の跡目を養子の景勝と景虎が争った「御館の乱」で景虎側の拠点となり、天正七(1578)年に落城したことが知られている〔井上・奥田ほか1966、金子・戸根2003〕。至徳寺遺跡では、発掘調査により11世紀～13世紀前半と14世紀末～16世紀初頭の遺構群が検出されている。中世後期には、幅6～8m・方250mの堀が構築されており、守護所に比定する説が有力であるが、至徳寺との関係等、不明瞭な部分が多い。また、質量とも卓越した中国製陶磁器が出土も注目されており〔小島1983、笹澤・水澤2001、水澤・鶴巻2003〕、用言寺遺跡出土資料を評価するうえで重要な比較資料となる。

応仁の乱(1467年)に始まる戦国時代の争乱期に突入すると、越後でも「永正の乱」(1507年～)を経て守護代長尾景虎(後の謙信)が戦国大名化するが、その構造から該期に築城・改修されたと考えられる多くの中世城館が確認されている。中でも春日山城跡(45)は、西頸城丘陵北端の標高180mの山頂に築かれた主郭部を中心に東西約2.5km・南北約2.5kmの範囲に屋敷地群が展開する。春日山城跡は謙信の時代に整備され、地域支配の拠点として機能した城館であるが、最近の発掘調査や城郭調査の結果、上杉景勝もしくは慶長三(1598)年の上杉氏の会津転封後に入部した堀秀治により最終的な姿が形成されたことが判明している〔河西2003〕。周囲にある沖見砦跡等は砦的性格を持ち、春日山城跡と一体となって機能していたと考えられている〔花ヶ前1986〕。春日山城が整備されると、政治的中心は府中から春日山に移り、林泉寺やその周辺の広範囲に城下集落が形成された。中世集落遺跡があまり知られていない高田平野南部にも、この頃から城館が築かれ始め、矢代川左岸には十日市館(46)・乙吉館(47)・坪ノ内館・鯉ヶ尾城(48)等が、関川左岸には小出雲館・御館(49)・堀之内館・鳥坂城等が知られる。大熊川沿いの丘陵地には箕冠城(50)がある。なお、用言寺遺跡の近隣では西方3.5kmに黒田城(51)があり、天文十四(1545)年に反乱を企てたため長尾景虎に成敗された黒田秀忠の祖先黒田氏が居住したと指摘〔斎藤ほか1941〕されている。

## B 「今泉村」と北国街道

用言寺遺跡の所在する旧「今泉村」は、北陸道から直江津付近で分岐する北国街道沿いに位置する。北陸道および北国街道については、県教委刊行の新高梨歴史の道調査報告書『北国街道Ⅰ』[山本1991]、『北国街道Ⅱ』[山本1993]、『加賀街道・松本街道』[亀井1991]に詳しい。以下、主にこの報告に基づき今泉村と街道の位置を概観する。

北陸道越後国西部には澁海、鶴石、名立、水門、佐味に駅を制定しており、水門が現在の直江津付近と考えられている。直江津は、関川河口の西岸に発達した港町で、南北朝以降は国府・守護所がこの地に置かれ、多くの文化人が訪れた。また、物資の移入口として重要な役割を果たしている。「甄牧令」によると、北陸道と東山道の連絡のために「越後国府より南行、信濃国府に通ずる一街道」を整備したとあり、この道が北国街道の始まりと考えられる。ただし、該期における越後国内のルートは諸説あり、いまだ定説をみていない。

中世になると、物資の往来とともに善光寺・戸隠・妙高山への参詣に向かう信仰の道ともなった。16世紀には上杉氏により道の造作・伝馬の確保、宿場の設置と整備され、近世北国街道の原型が整えられた。江戸幕府は慶長九(1604)年、五街道に一里塚を築かせ整備したが、このとき信濃国内の北国街道にも設置していることから、同時期に越後国内にも築かれている。一里塚は旧妙高村や旧中郷村にあり、北国街道が五街道に準じて重視されていたことがわかる。正保年間(1644～1647年)に作成・改訂された「正保国絵図」では、北国街道をとりわけ太い朱線で描き、「高田町札辻より関川通、此信州境目迄八里拾六町」と記している。高田城下から次の宿である新井宿に至るまでは、「高田新田村」「新町」(荒町村)「脇野田村」「今泉村」を通り、ここで今泉川(現矢代川)を渡るが、「舟渡川幅30間 歩渡舟モアリ」と記され、水深の浅い渡河点であることがわかる。天保年間に描かれた「東都道中分間絵図」(高田図書館蔵)には「瀬端ノ橋長三十余間」とあり、「貞享元禄」期に架橋されたと記されている。「改正越後国頸城郡細見絵図」(文政三(1820)年)によれば、瀬端橋(現瀬端橋)付近に「茶や町」と記され、現在の茶屋町に比定できる。対岸には「石沢村」があり、「中川村」「石塚村」を通り、「新井村」(宿)にたどり着く。新井以南には二本木・松崎・関山・二俣・田切・上原・関川に宿場町が整備され、新井も含めて「中山八宿」と呼ばれた。越後と信濃国境には高田藩の直接管理である関川関所が設けられ、「おもき関所」に位置付けられた。

さて、用言寺遺跡の発掘調査においては、およそ200点の近世陶磁器が耕作土中から出土した。遺物は細片が多く、また、それぞれの出土位置にはまとまりがなく、調査範囲全域に散在する。年代にもまとまりがなく、最大比率(74%)を占める肥前系陶磁器においては大橋Ⅰ期～Ⅴ期(近世全期)[大橋1993]まで内包して検出された。一方、産地別組成には地域性がみられる。近世全期の組成比率であるが、肥前系陶磁器41%、肥前系陶器33%、京信系陶器9%、越中瀬戸系陶器7%、関西系陶器4%、不明陶磁器6%となる。肥前系陶磁器が圧倒的比率を占め、越中瀬戸系陶器と京信系陶器が一定量を占める様相は上越地域に通用である。若干、京信系陶器の占有率が高いようであるが、北国街道の信越国境に位置する関川関所では、京信系陶器の占有率が27.5%の高率を示す[岡田ほか2000]。陶磁器組成が報告されている例が僅少であるため、詳細は不明であるが、北国街道沿いの近世遺跡では比較的京信系陶器の出土率が高い傾向が認められ、該地の近世流通の一端を垣間見ることができる。

### C 文書に記された「今泉村」

今泉村は、中世には「今泉郷」と呼ばれ、頸城郡に含まれる。建武二（1335）年に南朝方の村山弥次郎隆義は「今泉郷松岡第三部、同四部入道跡半分」とあり、今泉を所領していたことがわかる。用言寺遺跡より北東450mに位置する現大和神社周辺は、土塁や堀等が現存しており、東西南北を軸とした方80mの単郭を有する「今泉館」と推定されている。今泉館は、南北朝期には村山氏の館であり、後に御館の乱に登場する「今泉城」になったと考えられている〔稲荷ほか1986〕。一方、金子拓男氏は、今泉集落と先述の黒田城との地理的關係に注目し、今泉館は「守護上杉氏の被官黒田氏の居館」で今泉郷は「本貫地であった可能性」を指摘している。さらに今泉集落が、現在でも本跡の西方4kmに位置する大字灰塚に飛地の山林を保有しており、その地は黒田要害直下の「灰塚の城山」と呼ばれる黒田要害の出城であったと指摘〔金子2003〕している。なお、大和神社境内には、現社遷宮以前に「用言寺」があったとの伝承があり、そのため遷宮当初は「用言寺稲荷」と称していた〔金子2003〕という。

今泉館の北東に隣接する願清寺は東本願寺の末寺であるが、正安三（1301）年創立と伝えられる。願清寺の裏手（南西）には土塁が遺存している。「井波園瑞泉寺由緒書」には「永正三寅八月十三日 磯部勝願寺門下 越後頸城今泉村 願主 昭善」とあり、善照寺（瑞泉寺塔頭）の開基である昭善が永正三（1506）年に今泉村に道場を営んでいた〔大場1973〕ことが知られる。

## 第三章 調査の概要

### 1 グリッドと調査区の設定

グリッドは、国家座標Ⅲ系に沿って10mの方眼を組み、これを大グリッドとした(図版1)。また、段丘崖がほぼ東西方向に位置することから、国家座標を採用することで地形に沿うグリッド設定ともなる。大グリッドの呼称は、西から東へアラビア数字で1・2・3…、南から北へアルファベットの大文字でA・B・C…とした記号を組み合わせ、1A・2A…、1B・2B…、1C・2C…のように呼称した。さらに大グリッド内を25分割し、北西隅を1、北東隅を5、南西隅を21、南東隅を25となるように番号を付し、大グリッド番号との組み合わせで「15K8」等と表した。調査範囲のほぼ中央に位置する13Mグリッド北西隅の杭の座標は、X=119650.000、Y=-22070.000である。なお、大グリッドの呼称を変則的に付したのは、確認調査が未了の南側に調査範囲が拡張した場合に対応するためである。

なお、本調査対象範囲は、道路や水路によって分断される状況にあったため、図版1のように便宜的に調査区を設定した。当初の本調査対象範囲はA区・B区・C区であり、後に用地買収が進展したために追加で調査対象となったのがD区・E区である。

### 2 基本層序

#### A 基本層序

今年度の本発掘調査対象範囲においては、ほぼ平坦に土層が堆積しており、基本層序をおおむね対応できる状況にあった(第7図)。なお、確認調査において検出された3面の遺物包含層は、上層がⅡ層、中層がⅣa層、下層がⅤb層に相当する。

I 層 耕作土。

I' 層 床土。調査範囲のほぼ全域に薄く(厚さ1~2cm)分布し、鉄分の沈着が著しく硬化している。色調・しまり具合は、上層の地山であるⅢa層と酷似するが、より粘性が強く容易に区別できる。古代・中世の遺物も出土するが、近世以降の陶磁器が混在する状況にある。

Ⅱ 層 暗灰色シルト。古代・中世の遺物包含層。表土直下に薄く分布するが、耕作等により攪乱を受けている範囲が広く、残存状況は不良である。層厚が薄いこともあり、古代・中世の土師器・陶磁器等が出土するがごくわずかである。

Ⅲa層 黄褐色砂質シルト。遺物は出土しておらず、上層(古代・中世)の遺構確認面となる。Ⅲa層は、古代の遺構覆土とよく似る土層であるが、Ⅲa層のほうがより粘性が強く、また覆土とⅢa層の間に不整合が認められることから区分できた。色調においても、遺構覆土のほうがやや明るい傾向にある。また、8世紀末頃の長胴甕(179)が伴う焼土遺構SX103がⅢa層の上面から検出されている。すなわち、Ⅲa層の形成年代は、8世紀代以前と判断することが適当と考えた。両者の区別は難しいが、これらの観察から慎重に判断した。なお、部分的にマーブル状の斑紋が認められるが、昆虫(ケラ等)の巣穴と考えられる。

**Ⅲb層** 暗褐色シルト。似た土質のⅢa層とⅢc層の間に部分的（15I～15L、16J～16Kグリッド周辺）に介在する。炭化物粒子をごくわずかに含む。Ⅲb層に相当する深さからは、1個体の須恵器（217）が出土したが、上部から掘り込まれた遺構の覆土からの出土の可能性がある。

**Ⅲc層** 黄褐色砂質シルト。Ⅲa層より均質で、混入物がほとんどみられない。

**Ⅳa層** 暗褐色粘質シルト。古墳時代の遺物包含層。粘性が極めて強く、炭化物粒子（直径5mm以下）をまばらに含む。古墳時代前期～後期の遺物を散発的に含む遺物包含層。古墳時代の遺構は、Ⅳa層が落ち込むように検出されている。

**Ⅳb層** ぶい黄褐色粘質シルト。Ⅳa層と極めてよく似た土質だが、より色調が明るい。

**Ⅳc層** 暗褐色粘質シルト。Ⅳa層と極めてよく似た土質で、Ⅳb層より暗い。

**Va層** 黒褐色粘質シルト。Ⅳc層とVb層との漸移層。

**Vb層** 黒色砂質シルト。確認調査において縄文時代後期の遺物が出土した土層に相当する。礫（直径2cm以下）、白色粒子（直径3mmほど）を多量に含み、しまりが強い。

**Vc層** 黒褐色細砂層。Vb層とVI層の漸移層。土質はVI層に近いが、色調はVb層に近い。

**VI層** ぶい黄褐色粗砂層。河岸段丘上に存在する基盤層と考えられ、部分的に著しく硬化している。

## B 遺物包含層

上層の遺物の多くは、表土掘削時に近世陶磁器等と混在する状態で出土したものである。攪乱を受けていない遺物包含層はⅡ層であるが、その広がりには限られており層厚も薄かった。したがって、Ⅱ層から出土した遺物はごくわずかである。しかし、Ⅱ層からの出土品は、古代・中世の遺物に限られており、後世の攪乱は受けていないと考えられる。

中層の遺物は、Ⅳa層から出土した。遺物の年代は、古墳時代前期～後期に限られる。甕の底部である236は、1個体がまとまって出土したが、その周辺に分布の広がりは認められなかった。出土資料の大半は、破片資料であり、散発的に出土したのみであり、遺物の集中域等は認められなかった。

なお、確認調査で縄文時代後期の遺物包含層とされた下層（Vb層）からの遺物の出土は認められなかった。

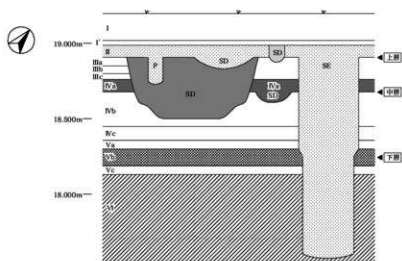
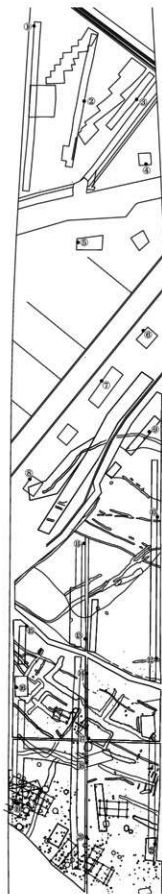
## C 遺構確認面

今回の調査では、上層と中層の遺構が検出された（第7図）。

上層では、古代・中世・近世の遺構が検出された。このうち近世の遺構は表土層を基調とするものであり、覆土中からは18世紀後半以降の陶磁器が出土している。現代に近い遺構であるが、現水田面の床土であるI'層の下から掘り込まれており、ほ場整備以前の遺構と考えられる。近世遺構が多数検出された付近は、「越中田」の地名にあたり、過去の水田耕作にかかわる遺構と考えられる。

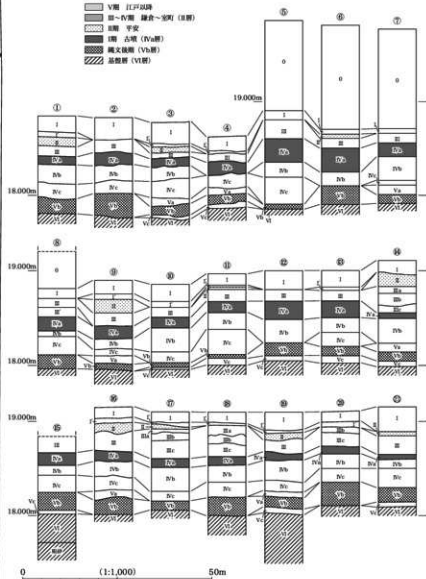
古代と中世の遺構は、ともにⅢa層が確認面となるが、切り合い関係から両者の新旧関係を明瞭に捉えることができた。また、中世の遺構はⅡ層が落ち込むように検出され、古代の遺構はⅢa層から掘り込まれていることが把握された。すなわち、両者は同じ確認面で検出されているものの、覆土の由来は異なり、その質も異なる。古代の遺構は黄褐色砂質シルト、中世の遺構は上層の遺物包含層である暗褐色シルト（Ⅱ層）で覆われていることがわかった。

なお、両者の遺構確認面となるⅢa層の堆積は薄く、Ⅲb層が露出するまで掘削を進めてしまう場合が



第6圖 基本層序模式圖

- 凡例
- V層 江戸砂利
  - ▨ III~IV層 鎌倉~河町 (埋積)
  - ▤ 埋積 平安
  - ▥ 埋積 古墳 (IVa層)
  - ▧ 縄文後期 (Vb層)
  - ▩ 原始層 (V1層)



第7圖 基本層序



あった。このとき、中世の遺構を把握することは困難となった。一方、古代の遺構の把握は容易となった。しかし、覆土がⅢa層と酷似する反面、Ⅲb層は部分的に介在する土層であり、遺構覆土と地山を誤認するケースがあった。これらの問題を解消するため、最も安定的に分布し、覆土と地山を判別しやすいⅢc層まで掘削して最終的に遺構の有無を確認することとした。ただし、より上位で遺構を確認するよう努めることとした。

中層では、溝2条が検出されたのみであった。いずれもⅣb層上面が確認面となり、遺物包含層であるⅣa層が落ち込むように検出された。Ⅳa層とⅣb層は、似た土質であるがわずかな色調の差で判別することができた。

#### D 遺構の切り合い関係と時期区分

遺構の調査にあたっては、切り合い関係を把握しながら進めることに留意した。その積み重ねから検出遺構を「Ⅰ期：古墳時代、Ⅱ期：平安時代、Ⅲ期：鎌倉時代、Ⅳ期：室町時代、Ⅴ期：江戸時代以降」の5時期に区分することができた。このうちⅠ期が中層、Ⅱ期～Ⅴ期が上層の遺構に相当する。上層の遺構は、同一の確認面（Ⅲa層）において検出されるが、遺構覆土の特徴がそれぞれで異なり判別可能であった。ただし、実際はⅢ期とⅣ期の区分は遺構の切り合い関係の把握は難しく、出土物の年代に依存したところが大きい。調査時からこの時期区分を念頭に記録作業を進めることとした。

### 3 調査の基本方針

#### A 遺構名の付し方

遺構名は、遺構種別の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構番号の略号は、溝＝SD、掘立柱建物＝SB、ピット＝P、井戸＝SE、土坑＝SK、性格不明遺構＝SXとした。通し番号は、遺構種別・検出層位にかかわらず通し付した。調査後に欠番が生じた場合でも、その後の混乱を避けるため、番号の付け直しは行っていない。したがって、遺構番号の数が、遺構の数を示しているわけではない。また、多数検出された溝は、ベルト等をまたいでいるケースが多く、調査過程で対応関係が明らかでないものがあった。このような場合については、調査後に遺構番号を統一することとした。なお、複数のピットの集合体である掘立柱建物については、別個に番号を付した。

#### B 土層観察の記載方法

土層注記にあたっては客観性を確保するため、次の共通認識の下、記載することとした。調査中も試行錯誤を繰り返しながら客観性の確保に努めたが、4名の調査員が記載しており必ずしも十分でない面もある。そのような状況にあっても、上下の土層との相対的な相違を表現することに留意することに努めることとした。

**色調** 農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』(2003年度版)を使用した。色調は乾燥の度合い、空気に触れた後の酸化の進行等によって著しく変化する。できるだけ水分を含んだ新鮮な状態で色調を判断するよう留意した。また、『標準土色帖』の分類上、同じ色調である場合、上下の土層と比べて相対的に「より明るい」または「より暗い」と併記することとした。

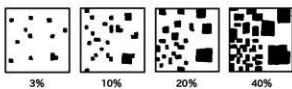
**土質** 本遺跡の土質は、基本的には「シルト」であり、粘性の強い部分と弱い部分がある。より粘

性の強いシルトを「粘質シルト」とし、相対的に粒子がより細かく粘性の強い土層を「粘土層」と区別した。一方、より砂質の土層を「砂質シルト」とし、より粒子が粗い砂層を「細砂層」、粒子が1mmを超えるものを「粗砂層」として区別した。また、植物遺体を主体とする腐蝕層については、「ガツボ層」と呼称した。

**しまり** しまりについては、極めて感覚的要素が多い記載である。特に、乾燥の度合いによって記述内容が左右されることがあるため、上下の土層との相対差を示す場合に記述することとした。

**混入物** 混入物には、炭化物、地山ブロック、礫、植物遺体等が認められた。混入物の含有率（第8図）について10～20％程度を基準とし、これより多い場合は「多量」、40％を超える場合は「極めて多量」とした。一方、基準より少ない場合は「まばら」、3％を下回る場合は「極めてまばら」と区別した。また、混入の状態は、ブロック状、粒子等の状態や、粒径も併記することとした。

**鉄分の沈着** 本遺跡では、鉄分の沈着が顕著な土層が認められた。鉄分を多く含む地下水であるがための必然であるが、特定の土層や層面に沈着する傾向が認められたため記載することとした。



第8図 混入物の含有率（『新版標準土色帳』から作成）

### C 遺構の記載方法

遺構の説明には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。

本文は、遺構の種類ごとに提示することとする。ここでは、個別の記載は行わず、観察表で示しきれない情報を盛り込むことを基本とした。したがって、個別遺構の情報については、観察表を参照されたい。

観察表は、遺構種類ごとに提示した。遺構の内容を等質的かつ的確に示すべく工夫した。平面形態及び断面形態の分類は、『和泉A遺跡』の分類（第9図）[荒川・加藤1999]にしたがった。遺構の切り合い関係については、不等記号を用いて「新>旧」のように示した。また、観察表には検索という側面からの情報も付加することとし、各種観察項目のほかに、図面図版番号、報告遺物番号を加えることで対照しやすくした。

図面図版は、1/800の全体図、1/100・1/150の分割平面図、1/40のセクション図・エレベーション図を基本とし、状況に応じて1/50・1/60を採用したものもある（細立柱建物等）。図版中に添付してあるスケールを確認されたい。遺構の個別平面図は、分割平面図をもって提示することとしたため、分割平面図とセクション図とを対照する構成となっている。ただし、分割平面図で示すことが難しい図面については、1/20の個別平面図・断面図で示した。

写真図版は、特に重要な遺構、遺存状態の良い遺構、特徴をよく捉えられるカットを選択して掲載したため、すべての遺構を網羅していない。また、図面図版に反映できなかった情報を補完する観点からも選択した。なお、写真図版については、おおむね時代・遺構種類ごとに遺構番号順に掲載することとした。



第9図 遺構の平面形態と断面形態の分類

## 第IV章 上層の調査

### 1 遺 構

#### A 概 要

上層の遺構は、同一の確認面において、複数時期の遺構が検出された。これらは、遺構の切り合い関係の把握から、大きく古代・中世・近世以降の3時期に区分して理解することができる。

また、遺構の分布は、各時期をととしてA区の南半に偏って分布することが明らかになった。一方、A区の北半とC区においては溝数条が検出されたのみであった。この所見を踏まえ、D・E区については先行して部分的な調査を行った(図版25)。その結果、遺構・遺物の密度が極めて稀薄であることが明らかになったため、D・E区については部分的な調査を行うことで本発掘調査を終了するものとした。

#### 1) 古 代(Ⅱ期、平安時代)

A区において、溝37条が検出された。これらの断面形態はV字状や階段状をなし、規模は幅1.5m、深さ1mほどと大きい。あたかも弥生時代の環濠のようにもみえるが、古墳時代の遺物包含層であるⅣa層を切るように掘り込まれていること、覆土から平安時代の遺物のみが出土していること、直線的な溝が多数並列することから、環濠と考えることはできない。遺構の年代は、9世紀から10世紀に埋没したことは明らかであるが、構築年代については明らかでない。しかし、検出層位の検討等から、古代の遺構であることは確実とみられる。稀有な形態の遺構であるため、性格については明らかでないところもあるが排水路とみられる。なお、調査範囲南東隅の東側(段丘縁の信越本線より)に該期の遺物を表面採集できる範囲が存在する。居住域は、その周辺に存在する可能性がある。

C区においては、これらの溝と異なる軸、断面形態をもつ溝2条(SD402・403)が、14.5mの間隔をおき平行するように検出された。これは、ほぼ南北方向を指しており、条里に関する地割の可能性があり、周囲から他の遺構は検出されておらず詳細は不明である。

#### 2) 中 世(Ⅲ～Ⅳ期、鎌倉～室町時代)

掘立柱建物8棟、井戸18基、土坑13基、ピット419基、溝32条が検出された。一部の溝がE区にまで延伸するものの、それ以外の遺構はすべてA区から検出されている。A区でも、用水路より北側は遺構の稀薄域で、並列する溝が検出されたのみである。大半の遺構は、A区の用水路より南側で検出されている。その中でも、北側には方形に廻る浅い溝、南側には掘立柱建物や井戸が検出された。北側の方形に廻る溝は、その形状から水田耕作に関わる遺構とみられ、生産域が広がっていたものとみられる。一方、南側は建物や井戸から構成される居住に関わる施設が集中する。このように、中世においては生産域と居住域から構成される可能性が高い。なお、中世はⅢ期とⅣ期の2時期に細分できるが、その根拠と年代観については、次項において記載する。

## 3) 近世以降 (V期、江戸時代以降)

V期(江戸時代以降)の遺構は、溝と土坑が検出された。調査の結果、江戸時代後期(18世紀後半)以降、耕地整理以前の遺構であることが確認されたが、具体的な年代は明らかでない。土地更正図からは、調査範囲周辺が水田であったとみられ、水田耕作に関する遺構とみられる。近世以降の遺構については、実測図と観察表の呈示に留めることとする。なお、SD12からは中世の遺物が比較的多く出土している(96~100)が、近世の遺物が1点混在すること、V期に特徴的な覆土であることを踏まえ、遺構の年代をV期に位置付けた。

## B 中 世(Ⅲ~Ⅳ期)の遺構

## 1) 井 戸(図版9・13・15・20・21・24・37・40~45)

## 中世遺構の時期区分

18基の井戸が検出されたが、出土遺物の年代から12世紀~15世紀にわたって構築されたものとみられる。素掘りの井戸が数百年にわたって継続利用された可能性は低く、18基が並存したものとは考えられない。したがって、まずはこれらの時間軸を整理する必要がある。中世の遺構と切り合い関係にある井戸はSE150とSE151、SE167とSD168の2組のみであるが、これを頼りに時期の細分を試みたい。

SE150・SE151は、切り合い関係からSE151→SE150の新旧関係を把握することができる。この切り合い関係は、遺物の年代からも裏付けることができ、SE151からは中世前期(12世紀末)(51~54)、SE150からは中世後期(14世紀後半~15世紀初頭)(85~88)の資料が出土している。

SE167・SD168は、切り合い関係からSD168→SE167の新旧関係を把握することができる。この切り合い関係は、出土遺物の年代からも裏付けることができ、SD168からは中世前期(13世紀)(76・77・214)、SE167からは中世後期(15世紀前半)(92・93・94・95)の資料が出土している。

これらの状況を整理すると、中世の井戸(遺構)はSE151→SD168→SE150・SE167という3時期の変遷をたどることができる。しかし、SE151とSD168の新旧関係は、出土遺物の年代のみを根拠にしており、実際の遺構の年代はこれと逆転する可能性もある。したがって、SE151・SD168→SE150・SE167の2時期として理解するのが現段階では適当と考えられる。したがって、まずは中世前期(Ⅲ期)→中世後期(Ⅳ期)への変遷を把握することに留めたい。

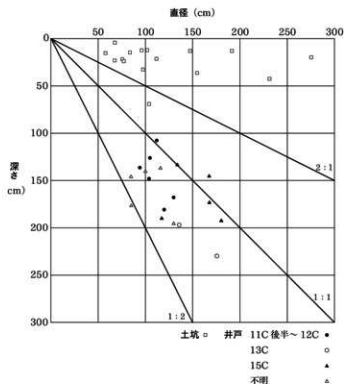
また、出土遺物の年代と覆土最上層の色調を対比すると、相対的に暗いほど古く、明るいほど新しい傾向にあることがわかった。すなわち、Ⅲ期は黒色~暗褐色、Ⅳ期は褐色~灰白色等の色調である傾向が強い。同様の傾向は、仲田遺跡の調査でも確認されており[加藤<sup>2003</sup>]、当地域における傾向といえるかもしれない。ただし、用言寺遺跡においては明確に区分できないものも多く存在する。

## 構造と規模

井戸は、いずれも素掘りで、平面形は円形であるが、SE61のみは円形に近い隅円方形である。断面形はU字状が最も多く9基、次いで箱状5基、階段状が4基存在する。いずれも開口部がやや広がるが、垂直に近い壁面が築かれているが崩落は認められない。崩落しにくい地盤であるため、素掘りの構造が選択されたものと理解される。また、SE183の底面には凹みが設けられているが、これは水溜の施設であった可能性がある。なお、SE155の底部付近は下影れになっている部分は、湧水による壁面の崩落によ

るものと考えられる。

規模は、直径85cm～180cm、深さ108cm～232cmと多様であるが、直径・深さともに1mから2mの間にほぼ収まり、平均値は直径125cm・深さ163cmである。直径と深さの関係(第10図)は、比率1:1～1:2の間に収まる。箱状は1:1～1:2の間に広く前後し、階段状は1:1付近に、U字状は1:1.5～1:2の間に集中している。極端な事例として、直径85cm・深さ177cmという直径に比して深い井戸(SE171)や、直径168cm・深さ175cmと直径と深度が近い値を示す井戸(SE154)を挙げることができる。これらの状況から、深さに応じて直径が拡張されているわけではないことがわかる。



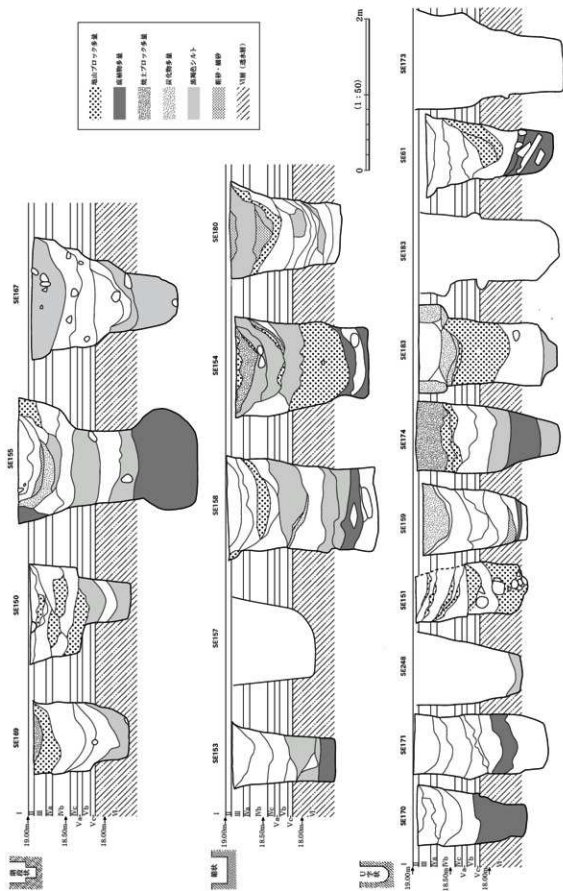
第10図 井戸・土坑の規模

このように様々な形態の素掘りの井戸が輸出されたが、当遺跡において特徴的なのは階段状をなすものである。段差は、必ずV層付近に設けられており(第11図)、SE150・SE155はVa層付近に、SE167・SE169はVb層付近に段差が設けられている。V層はしまりの強い砂質シルトであるため、掘削が困難であった可能性がある。一方、この段差は機能上の利点もある。段差を作出することにより、垂直に近い壁面の崩落を防ぐことができたであろうし、掘削・管理における昇降時に足を掛ける段差として利用された可能性もある。なお、断面U字形のSE183においては、垂直の壁面に足掛けのためとみられる小さな横穴が掘られている。形状は異なるが、昇降時に必要な施設として設置された可能性を指摘できる。

また、井戸の年代と断面形態との相関関係をみると、一定の規則を認めることができる。まずは、時期区分の指標としたSE150・SE151・SE167の形態を比較してみたい。Ⅲ期のSE151は無段、Ⅳ期のSE150・SE167は有段であることがわかる。また、12世紀代に位置付けられるSE61・SE151・SE183は、直径が小さく無段のU字形に近い断面形を呈する。詳細な時期が明らかでない井戸が多く不確定な要素もあるが、相対的に直径が小さく断面U字形をなすものは古く、直径が大きく階段状をなすものが新しい傾向にあるとみられる。

### 深さと透水層

第11図に示したとおり、井戸はすべて基盤層である粗砂層(VI層)にまで達するように掘り込まれていることがわかる。VI層は、段丘上にほぼ水平に堆積する基盤層(第7図)で、透水層となることから必ずこの地層が掘り抜かれている。実際、遺構を完掘すると良質な水が湧き出る状況にあり、地下水の利用を目的として掘削された穴であることを窺い知ることができる。なお、「井戸」とされる遺構についてはトイレとの関係も想定されたが、寄生虫卵は検出されなかった(第VI章3)。



第11図 井戸の形状・掘削深度と湧水層

また、隣接するSE157とSE158をめぐっては、調査中に興味深い所見が得られた。より浅いSE157を先行して調査したが、この時点では湧水が著しかった。その後、隣接するより深い井戸SE158の調査を進めるにしたがってSE157の水位は低下し、やがて湧水が認められなくなった。すなわち、井戸として機能した遺構であるならば、この2つが並存した可能性は極めて低いといえる。さらに、掘り直しが行われたとすれば、新しい井戸をより深く掘削することが予想される。したがって、SE157→SE158という変遷を想定することができる。出土遺物の年代から両者はⅢ期に位置付けられるが、SE157は中世の遺構としては最も古い12世紀前半に相当することから、SE158に先行する可能性が高いといえる。このように、隣接する井戸は並存しない可能性を指摘できる。

#### 覆土の堆積状況からみる埋め戻し

井戸覆土の堆積は、レンズ状堆積が多く認められるが、特に覆土の上半には地山ブロックを多量に含むことがしばしばあり、掘り直した井戸の掘削土で埋め戻された可能性がある(第11図)。また、SE151において認められた斜方向の堆積状況は、一方向から連続的に埋め戻した痕跡といえる。なお、埋め戻し土の供給源については、ことさらに遠い地点から運搬したとは考え難く、近接する新しい井戸の掘削土が最も有力な候補といえる。この点からも、近接する井戸が並存した可能性は、より低いものと考えられよう。

また、SE154・SE169・SE174からは、焼土や炭化材が多量に検出された。火災により集落を再構築する際に埋め戻された可能性があり、一段階を示す重要な指標になる可能性がある。焼土や炭化材が多量に検出された井戸のうち、SE174からは14世紀後半～15世紀初頭の遺物が出土している。Ⅳ期に集落が火災に見舞われ、再興する際に埋め戻された可能性が考えられる。

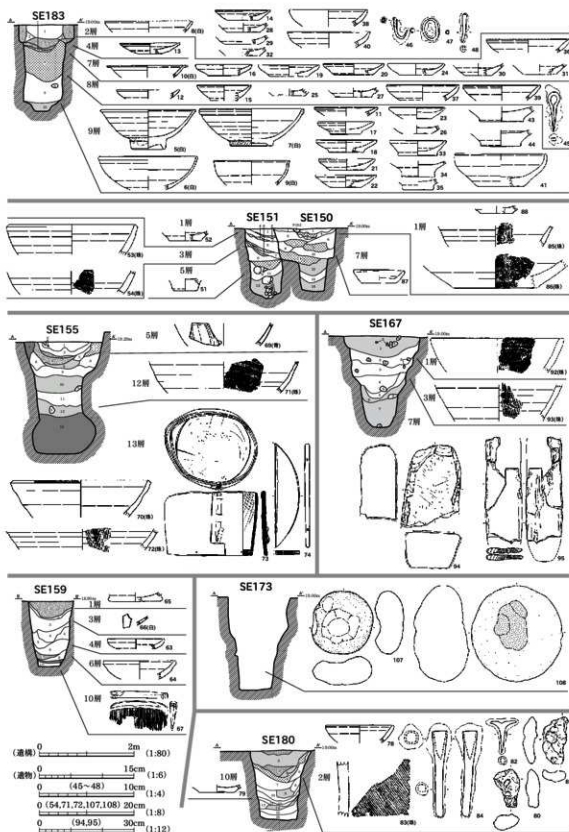
#### 遺物の出土状況と廃棄儀礼の可能性

当遺跡の調査において、大半の遺物は井戸から出土した。しかも、その内容は実に多様であるが、破片資料が多く、不要になったゴミ等を使われなくなった井戸に捨て埋め立てた可能性もある[水野2005]。火災に由来する可能性のある覆土や遺物が出土しない井戸の存在は、遺物の出土が偶発的な混入による可能性を示唆している。一方、埋め戻し時の偶発的な混入という説明だけでは理解できない、特異な遺物出土状況が認められる場合もある。第12図を参照しながら遺物の出土状況について特徴的な6つのケースを記載し、廃棄儀礼の可能性を検討することとしたい。なお、遺物の出土深度が重要な意味をもつため、覆土を上位(確認面～1/3)、中位(1/3～2/3)、下位(2/3～底面)に区分して記載することとする。

##### 【土器・陶磁器の破片が覆土上位から出土するケース】

本遺跡における最も普遍的なケースである。多くの井戸において、このような要素を認めることができる。土師器皿の小片が出土することが最も多い(SE150・151・159・180)が、白磁や青磁の小片が伴うこと(SE155・159)もある。この傾向は覆土中位にも共通するが、遺物の出土数は確認面に近いほど多く、中位に近づくにつれて減少する傾向にある。また、SE150・151・155・167・174において、覆土の上位から珠洲焼の片口鉢が出土している。特定の層位から特定の形態が出土することは、何らかの意図を反映しているのかもしれない。しかし、珠洲焼の片口鉢は、井戸以外からも土師器に次ぐ数が出土しており、もともと遺物量が多い。すなわち、遺物包含層の遺物が混入したものと考えられる。

鉄製品等の混在も、これらと同様に偶発的な混入である可能性が考えられよう。例えば、焼土や炭化材が多量に検出される場合、火災により集落を再構築する際の埋め戻し土である可能性が考えられる。この



第12図 井戸における遺物の出土状況



ような覆土から鉄製品が出土した場合、建築材に打ち込まれていた鉄釘等が混入した可能性を想定すべきであろう。しかし、SE180については特異な状況が看取される。2層からは、用途不明の鉄製品2点と鉄滓2点のみが出土している。特定の層位から、特定の遺物が出土したことは、何らかの意図を反映している可能性がある。

#### 【完形の土師器皿が覆土上位から出土するケース】

SE150の7層から、完形の土師器皿（口縁内面～外面にタールが厚く付着しており灯明皿とみられる）が正位の状態ですべて出土した。7層は上位と中位のちょうど境付近にあたる。完形の土師器皿が覆土上位から正位の状態ですべて出土するケースは、仲田遺跡SE208〔加藤ほか2003〕等でも認められる。井戸の廃絶時に土師器皿等の食器を埋める事例が知られており〔岩本2005など〕、このケースは廃棄儀礼のひとつである可能性が高い。

#### 【残存状況が良好な土器類が、覆土の上位から下位まで満遍なく出土するケース】

SE183からは、白磁6個体と土師器皿34個体以上が出土した。他の遺構と比べると、著しく多い出土量であり、廃棄儀礼を示す可能性が想定される。白磁・土師器皿は、覆土上位の2層から下位の9層まで満遍なく出土しているが、2層・7層・8層・9層から多数出土し、覆土下位の9層が遺物密度のピークとなる。残存率の高い白磁（5・6・7）の破片は、すべて9層から出土しており、一括して投げ込まれた可能性を指摘できる。層を超えた接合関係は、白磁9は7層+9層、土師器皿31は2層+7層、土師器皿41は7層+8層+9層に認められるものの、全体数から見れば少数であり、各個体が各層に投げ込まれた傾向が強い。なお、2層は極めて特徴的な土層である。確認面において認められた円環状のプランの外周部分にあたる土層にあたる。断面の観察からは、埋め戻し後に外周部分が再度掘削され、2層が充填されたようにもみえるが、2層・5層・7層は似た土質であり、3層は一連の過程で埋積した土層と考えられる。したがって、2層から7層を埋め戻した後に1層が堆積したものと理解できる。2層と7層の間に大きな断絶があるようにもみえるが、2層～9層を連続する土層と理解したい。

さて、SE183から出土した白磁は、県内でも有数の一括資料である。特に、碗（5～7）については、遺存率が高い優品であるが、すべてのパーツは揃わない。いずれの資料も、破損の状況から意図的に破砕された可能性が想定される。中でも5については、底部を中心に外面から内面に向けて剥離した単位や、高台部分の意図的な剥離痕が認められ、明らかに叩き割っている様子が窺える。しかし、遺構内からは8割のパーツが出土したものの、2割は出土しなかった。SE183以外の場所で破砕されたものが投げ込まれたものと理解できよう。また、被熱して軸にひび割れが生じているものが半数を占める（6・7・9）ことも特筆される。また、7については被熱しているパーツと、被熱していないパーツが接合関係にあることが確認されている。被熱の有無という観点においても、他所で破砕されたものが投げ込まれた可能性を指摘することができる。

多数出土した土師器皿についても、すべて破損した状態で出土しており、完形に復元できるものはない。しかし、偶発的に混入したと考えられるものとは異なり、遺存率は比較的高い。これらも他所で破損したものが投げ込まれた可能性が高い。また、土師器皿で特徴的なことは、34個体中、24個体（71%）にススの付着が認められた点である。ススの付着から、灯明皿として使用されたものが大半とみられ、饗宴後の一括廃棄行為とは考えられない。

以上のように、一括出土した白磁・土師器皿は、ともに破損したのから構成されることが特徴的といえる。白磁の破損状況をみれば、あるいは破損させることに意味があったのかもしれない。いずれにして

も、これら多数の資料が埋め戻し土に偶発的に混在することは考えがたく、井戸の廃棄儀礼を示す資料と評価できる。

なお、SE183の9層からはトチノミが1点出土している。井戸から出土するトチノミについて四柳嘉章氏は、北陸の「13世紀前～中期の井戸には必ずといってよい程、相当量のトチの実が認められた。調査範囲では殆ど検出されておらず、これなどは水神への供物と考えて不当ではないだろう。」と評価している〔四柳1987〕。SE183は、12世紀第二四半期に位置付けられることから時期的な離隔があるが、上記の一括出土資料とあわせて廃棄儀礼を意味している可能性を指摘できる。

#### 【木製品が覆土下位から出土するケース】

井戸の最下層からは、木製品が出土する傾向にあった。SE155では曲物、SE158では箸、SE159では櫛、SE167では鎌<sup>?</sup>が出土した。このほかSE61では建築部材（柱根<sup>?</sup>）、SE154では杭が出土しており、無加工の枝等が多数含まれるケースもあった。井戸の底は、湧水があるため、木質遺物が他の層位より残存しやすい環境にあったがため残存したものと考えられる。

井戸の底部付近から出土したこれらの遺物は、意図的に埋められた可能性がある。特に、他地域から流通でもたらされたであろう曲物や櫛が、未破損の状態で出土したことは注目される。仲田遺跡においても、曲物・漆器・櫛・杓子・鎌や、井戸祭祀との関連性が高い杵や槌が出土している〔加藤<sup>ほか</sup>2003〕。曲物は出土状態から集水施設の一部とは考えられず、その他の遺物も井戸の機能に関連する遺物とは考えられない。まだ使用できるであろう道具を、あえて井戸底に埋めることは、廃棄儀礼のひとつと考えられよう。

#### 【礫が覆土下位から多数出土するケース】

井戸の下位には、粘土質の覆土、植物遺体を多数含む覆土、礫を多数含む覆土が認められる。SE61・SE151では、井戸の下半に拳大～人頭大の礫が多量に投棄されていた。礫は、近隣の矢代川や関川で採取できる安山岩や砂岩である。しかし、周辺の地山等に自然状態で存在するものではなく、川原からあえて持ち運んできたものとみられる。また、無加工の礫が大半であったが、被熱しているものが多いことも特徴的であった。中には、加工が施されたもの、あるいは使用されたものも含まれており、SE167からは砥石（94）、SE173からは凹石（107・108）が出土した。川原から持ち込まれた礫が、一括投棄されたかのように検出された状況を偶発的な事象とは考えられず、井戸の廃棄儀礼のひとつと考えられる。

#### 【植物遺体が覆土下位から検出されるケース】

SE158・159の覆土下位からは、ヨシのような繊維質の植物が平行するように検出された。一括して投げ込まれたため繊維の方向が一致しており、一見、編み物のようにもみえた。そこで、一部を取り上げてクリーニングしてみたが、編み物としての構造は見出されなかった。仲田遺跡においても、同様の植物遺体が検出されており、埋め戻し時の祭祀に関する埋積物であると考えられた。その組織の一部を分析した結果、イネ科以外の草本という結果が得られている〔加藤<sup>ほか</sup>2003〕。用言寺遺跡における花粉分析の結果では、井戸の堆積当時、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと推測されており、検出された繊維質の植物がヨシである可能性を指摘できる。例えば、岩船郡神林村においては、井戸を埋め戻す際、「梅の実」と「葦」を投げ入れるが、これは「埋めてよし」に掛けた廃棄儀礼であるという〔田辺2001〕。同様の事例は各地に認められ、検出されたヨシとみられる繊維質の植物遺体は、このような廃棄儀礼を意味している可能性が高い。

## 2) 土 坑 (図版9・11・13・15・21・24・45・46)

土坑と判断した遺構は17基ある。その大半は、出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、覆土の特徴から中世の遺構と考えられる。出土遺物のあった土坑 (SK55・SK149・SK156・SK220) のうち、SK220・SK156からは、11世紀後半から12世紀のものとみられる土師器の柱状高台皿 (57・59) が出土した。

断面形は浅い弧状が最も多く、全体の50%を占める。次いで箱状、半円状と続く。平面形は、円形・楕円形が半数以上を占める点においては井戸と共通するものの、方形基調の比率がより高いことが特筆される。平面形と深度平均値の相関関係を見ると、円形が最も深く平均39cm、楕円形が最も浅く平均16cmである。直径と深さの関係 (第10図) は、SK149をのぞき、すべて比率2:1の中に収まる。直径は50cmから150cmのものが主体で井戸に近いが、深さは4cm～69cmとより浅い。直径2mを超える土坑 (SK156・SK250) においても、深さは20cm・42cmほどであり、井戸との相違は明瞭である。一方、ピットとは深さが近い値を示すが、直径はより大きい。なお、土坑はいずれも、粘性の極めて強いIV層中で掘削が留まっている。

## 3) 掘立柱建物 (図版9・15・18・19・23・33～36・38・39・46)

### ピットの検出

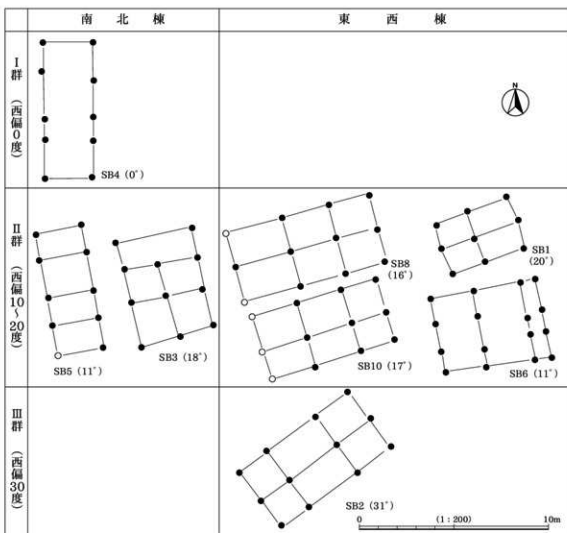
ピットは、14I・14J・15I・16I・16Jグリッド周辺で、特に集中的に検出された。検出された419基のピットは、基本的には中世特有の覆土であり、検出は比較的容易であった。一部は柱の抜き取り後に地山ブロックで埋め戻す例もあり、判別が困難な場合もあったがごく一部である。その場合であっても、地山より覆土の粘性が強いため、より速く乾燥しヒビ割れするため判別することができた。また、ピットの配置から掘立柱建物の存在が想定されるものの、適当な位置に一部のピットが見出せない場合があった。このときは確認面を下げ、かつトレンチ調査を行う等して、有無の確認に努めた。したがって、ピットの存在自体を見落とす可能性はより低いものと考えられる。また、柱痕が平面的に確認できるピットも確認されており、その場合、周囲は地山土で充填されていた。したがって、遺構確認時の平面プランは円環状をなしていた。掘立柱建物が見出された建物では、このようなピットが比較的多く見出される傾向にあった。

### 掘立柱建物の抽出

検出された419基のピットの配置を検討した結果、8棟の掘立柱建物が抽出された。柱穴は、建物が見出されたもののほかに多数存在しており、実際にはこれを大きく上回る数の建物が存在するものと考えられる。特に、調査範囲外に広がる建物については、把握できていないものが多いことが予想される。次年度調査範囲と併せて検討する必要がある。なお、当初10棟程度の掘立柱建物の存在を想定していたが、検討の過程から2棟 (SB7・9) を認識しないこととした。

### 掘立柱建物の構造

掘立柱建物は、構造から側柱建物 (SB4・5) と総柱建物 (SB1・2・3・6・8・10) とに分類できる。側柱建物は1間×4間の細長い建物2棟が検出された。2棟とも似た構造の建物であるが、SB5の柱間



第13図 掘立柱建物の構造と主軸方向

がほぼ等間隔であるのに対し、SB4は等間隔でない。ただし、SB4も東側と西側とで対応する位置にピットが設けられており、おおむね対称形となっている。

総柱建物の構造は、バラエティーに富む。SB2・8・10の3棟は、2間×3間の総柱建物であるが、桁行の柱間が一致しない。SB3は、他の建物と比べると歪みが大きく、北側の架間の中間に柱が設置されていないが、基本的には、2間×3間の総柱建物を意識して構築された可能性が考えられる。

SB6は、3間×3間の建物であるが、桁行きの東端1間の幅は極端に狭い。また、東端1列のピットの規模は小さく、他の柱穴とは異質である。これらの状況から、3間×2間の建物に庇が付随するような構造の建物と理解すべきであろう。この建物を主屋と庇とに区分して考えたとき、主屋東端の柱間が等間隔でないことがわかる。特に、その北側には広い間隔が設けられており、庇の柱間もこれに対応している。ここに出入口が設けられていた可能性が考えられよう。

SB1は、極持柱が両端にわずかに張り出す亀甲形をなしており、長方形をなす他の建物とは平面形態が異なる。また、他の総柱建物の桁行きが3間であるのに対し、SB1は2間であり小型の建物である。柱穴も、他の建物と比べると小ぶりであり、総柱構造の建物ではあるが、他と比べると異質といえる。

## 掘立柱建物の規模

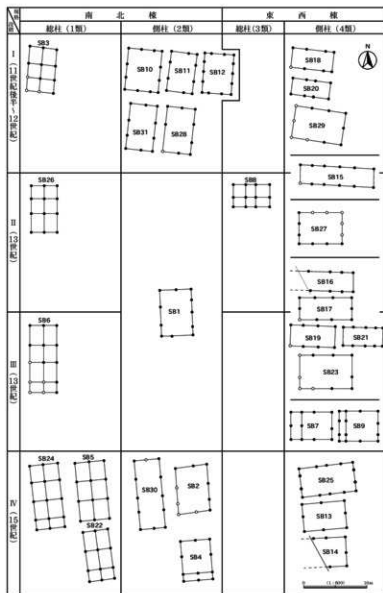
規模は、構造との密接な関係が見出された(第13図)。側柱建物のSB4・5は、よく似た構造の建物であり、規模の上でも近似した値を示している。桁行は3間7m、梁間は1間2.7m、面積は20m<sup>2</sup>ほどを測る。総柱建物は、大型・中型・小型の3種に細分できる。大型(SB2・8・10)は、桁行3間7.8m、梁間2間3.8m、面積30m<sup>2</sup>ほどを測る。中型(SB3・6)は、桁行3間5m、梁間2～3間4m、面積25m<sup>2</sup>ほどを測る。小型(SB1)は、桁行2間4.32m、梁間2間2.96m、面積13.55m<sup>2</sup>を測る。規格性の有無までは言及できないが、一定の構造・規模の建物を構築しようとした意図を読み取ることができる。

## 掘立柱建物の主軸方向と時期

8棟の建物は、東西南北方向を意識して構築されており、南北に桁行を設置する「南北棟」と、東西に桁行を設置する「東西棟」に大別できる。南北棟はSB3・4・5、東西棟はSB1・2・6・8・10が相

当する。しかし、これらの建物はおおむね東西南北方向を指しているが、30°ほどのばらつきが認められ、主軸方向による細分類が可能である。

主軸方向について、本報告では南北方向に対する建物軸の傾きを示すこととする。したがって、南北棟は桁行、東西棟は梁間が主軸方向を示すこととなる。このような視点で建物の主軸方向をみると、大きく3群に分類することができる(第13図)。主軸がほぼ南北方向に乗るI群、西側に10°～20°傾くII群、西側に30°ほど傾くIII群に区別することができる。I群はSB4のみ、III群はSB2のみ、II群はSB1・3・5・6・8・10の6棟が該当する。II群は幅が広く、また、主軸をほぼ同じにするSB5とSB6が重複することから、さらに細分類できる可能性も



第14図 中田遺跡における掘立柱建物の構造と主軸方向

ある。しかし、一定のまとまりを見出すことができないことから1群として理解した。

このような主軸方向による建物の分類群は、時間的な相違を意味する可能性が高い。仲田遺跡においては、集落が形成され始めた11世紀後半～12世紀には建物が東側に傾き、それが13世紀になると南北方向を向き、やがて15世紀には西側に傾く変遷が把握されている(第14図)[加藤<sup>註</sup>2003]。仲田遺跡と時期的に重複する用言寺遺跡においても、同様の変遷観を辿れる可能性を想定したが、各分類間の時間的な前後関係を把握することはできなかった。

ただし、SB10を構成するP329が、15世紀に位置付けられるSE180に切られていることがわかっていて、すなわちSB10は15世紀以前のⅢ期(12～13世紀から)に位置付けることは確実とみられる。SB1を構成するP56・58・65・69・240・249は、平安時代の溝(SD38・75・209・232・233)が埋まりきった後に、P240・247は中世の溝SD37が形成される以前に掘削されている。このことからSB1は、平安時代以降、中世でもより古いⅢ期に構築された可能性が高いといえる。また、SB5を構成するP318からは11世紀後半から12世紀前半の白磁が出土している。この遺物の年代が遺構の年代を反映するわけではないが、中世でも古相の資料であり、Ⅲ期に位置付けられる可能性がより高い。

ここにあげたSB1・10・5は、ともに主軸方向のⅡ群に分類され、主軸方向による分類群が同時期を示すとすれば、Ⅱ群がⅢ期に位置付けられる可能性が考えられる。Ⅲ期は遺物量が最も多い時期であり、建物数と遺物量の多寡が対応関係にあるといえる。しかし、遺構の切り合い関係が多くの箇所で見出されているわけではなく、次年度調査範囲の所見を加味して慎重に検討する必要がある。

### 掘立柱建物の分布

掘立柱建物は、基本的にピット・井戸が集中する範囲と重複するように検出された。また、建物は数棟が近接するように検出された事例が多い。

SB3・8・10は、主軸をほぼ同じにして重複しないように分布することから、これらは並存した可能性がある。SB8・10については、基軸を同じにするだけでなく、柱筋も同一線上に乗る。一部が調査範囲外にまで延長するため必ずしも明らかでないところがあるが2間×3間の総柱建物であるとみられ、構造の上でも共通する建物が並列する状況にある。これらの状況から、特にSB8・10の2棟については並存の可能性が高いと考えられる。

SB5・6は、主軸をほぼ同じにするものの、建物が重複する状況にあり、並存しなかったものと考えられる。また、この2棟の西側5mに隣接するSB4は、SB5・6とは主軸が1度異なり、ほぼ南北方向に乗る。SB4とSB5は、構造・規模において共通するが、主軸方向や配置に関連性を積極的に見出すことはできない。同種の役割を果たす建物が、近接する位置で建て替えられたものと考えられよう。

一方で、SB1とSB2はピットや井戸が集中する範囲から離れて単独で分布する。

SB1は、方形に巡る溝が並列する範囲から検出されたが、切り合い関係から溝SD62より古く位置付けられる。SB1は、他の建物と比べると異質な構造であるが、これと隣接して井戸SE61が単独で分布する。SE61は、調査範囲内から検出された唯一の方形基調の井戸であり、出土遺物から12世紀代に位置付けられる。年代的にSB1と一致することから、遺跡内で特異な形態の建物と井戸がセット関係で並存した可能性が想定されるが、切り合い関係からSE61はSD62より新しく位置付けられ、前後関係に矛盾が生じる。SE61とSD62の切り合い関係の把握は、極めて微妙な判断によっているため、逆転する可能性があり、分布状況からの所見を優先させるほうが適当であるかも知れない。

単独で分布するSB2は、方形に廻る溝が並列する範囲と井戸・ビツトが集中する居住域のちょうど中間の遺構稀薄範囲から検出された。SB2にも、単独で分布する井戸SE154が東側に隣接することが確認される。周辺にはSB2・SE154以外の遺構はほとんど検出されておらず、両者が並存した可能性がある。なお、SE154の焼土・炭化材を多量に含む特徴的な覆土はIV期に位置付けられる可能性があり、SB2をIV期に位置付けることができるかもしれない。

#### 4) 溝 (図版5・7・9・11・13・15・16・36・39・46・47)

##### 溝の形態と分布

III期・IV期の溝の形態は、幅広のものと幅狭のもの2種類に分類できる。幅広のものは、幅50cm～120cm・深さ10cm程度で断面形態は皿状をなし、底面には凹凸が認められることがある。平面形態は、基本的には直線的であるが、やや湾曲するものもある。この種の溝は、直角に屈曲するものが特徴的で、方形に廻るものもある。幅狭のものは、幅30cm・深さ5～10cm程度で断面形態は皿状をなし、平面形態は直線的で、基本的には屈曲しない。

該期の溝は、A区に広範囲に存在するが、用水路をはさみ北側と南側とで様相が大きく異なる。北側は空白域を挟み、11P・11Q・12P・12Qグリッド付近で幅狭の溝が並列するが、密度は極めて稀薄である。南側は密度が高いが、その分布は掘立柱建物や井戸が検出されている範囲まで広がらない。ここには幅広で方形に廻る溝が特徴的に分布する。このように溝の分布には粗密がある。

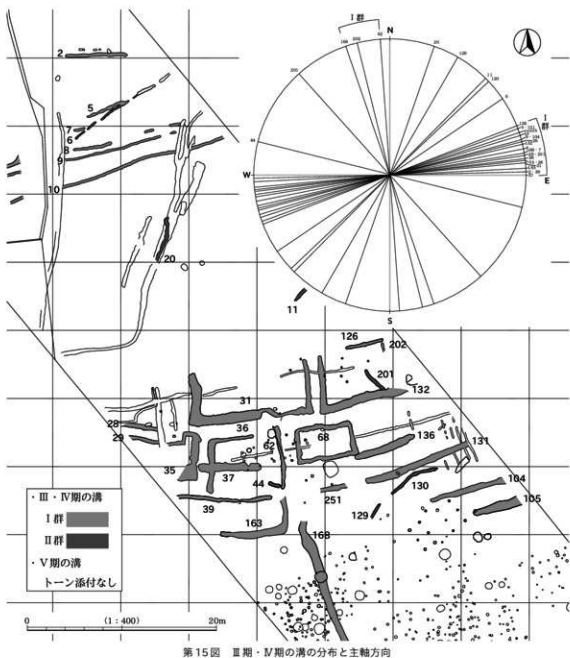
溝が密に分布する範囲において、それらがほとんど重複しないように分布することは特徴的である。特に、方形に廻る溝が集中する範囲では、互いの溝を犯すことなく並列する様子が理解される。例えば、方形に廻るSD31・132・35・36・68は、一定の間隔を置いて並列している。特にSD31とSD132については、規模や形態の酷似する溝が並列する事例といえる。

また、深度が浅いため、検出段階で分断されている溝もある。例えばSD39とSD251とSD131は、互いに分断された状態で検出されているものの、一直線上に分布することから、本来は一連の溝であったものと考えられる。SD37とSD136についても、同様に評価できよう。ただし、南北に延びるSD168の北端は、SD251に向けてわずかに屈曲しており、両者が一連の溝であった可能性を残す。これが一連の溝であるならば、規模の大きな方形区画となるが、SD168は他より深い溝であり、積極的には評価できない。また、SD136・131・104・105は、並列しているが屈曲することはない。方形に廻る溝と断面形態は共通するが、異なる性格の溝であるかもしれない。

一方、遺構密度が稀薄な用水路北側においては溝8条が検出されているが、これもまたほとんど重複しない。このうちSD9とSD10は約3m(10尺)離れて並列している。この間隔は、中世の道路状遺構の一般的な規模に近い。集落から離れて単独で存在することを勘案すれば、道路状遺構の側溝に相当すると考えることができよう。また、SD5・7・8も、これらと概ね平行関係にある。この溝のまともりは、道路状遺構が数度にわたり作り変えられた結果を反映するものと評価できよう。

##### 溝の主軸方向

分布範囲・形状が異なるこれらの溝ではあるが、およそ8割が東西南北方向を強く意識して掘削されている(第15図)。また、この方向性は、おおむね等高線とも平行していることから、地形に沿うように構築されていることにもなる。第15図では、東西南北を強く意識したI群(N69°E～N90°E、およびこれ



と直交関係にあるもの)と、これ以外のII群に分類することができた。I群の主軸方向は、南側に隣接する掘立柱建物の主軸方向と一致することから、両者の関連性を窺い知ることができる。

### 溝の年代

ここでIII期～IV期に位置付けた溝は、覆土の特徴をもとに判断したものであり、切り合い関係の把握からII期以降、V期以前に位置付けられることは確実である。井戸の検討結果を踏まえれば、溝についても一定の年代幅の中に理解することができよう。用水路北側から検出された道路状遺構の側溝については、作り変えの可能性も想定され、複数時期にまたがる可能性を指摘できる。

一方、用水路南側に分布する幅広の溝については状況が異なる。複数時期にまたがる可能性を示唆するSD36とSD37の重複は、該期の溝同士が交差する唯一の事例であるが、浅い溝である上、覆土がよく似



ていたため切り合い関係を認めることはできなかった。「①主軸方向が一致すること。②形態が共通すること。③互いに重複しないように並列すること。」を勘案すれば、並存した可能性を指摘できよう。

それでは、これらが具体的にいつごろ構築されたのであろうか。SD37は、掘立柱建物SB1を切るように掘削されている。SB1は立地の特異性から12世紀代に埋め戻されたSE61と並存するものと考えられる。したがって、SD37はそれより新しく位置付けられる可能性が高い。溝の覆土からは、ほとんど遺物が出土していないが、SD251からは12世紀中頃～後半の青磁碗(50)が、SD168からは13世紀代の珠洲焼(76・77)が、SD39からは13世紀後半～14世紀の瀬戸焼の瓶子(68)が出土している。また、SD168は15世紀前半に位置付けられる井戸SE167に切られている。

これらの所見を総合すれば、用水路南側に分布する幅広の溝は、13世紀代以降に構築された可能性が考えられ、一部は中世後期には埋没したものと考えることができる。したがって、幅広で浅い溝の構築年代は、中世前期(Ⅲ期)に位置付けることができよう。

### 溝の性格

用水路をはさみ北側から検出された溝は、先述のとおり道路状遺構の側溝であった可能性が考えられる。一方、南側から検出された幅広の浅い溝は、底面の凹凸が顕著で方形に廻ることを特徴とする。このような特徴的な遺構は、新潟市沖ノ羽遺跡で「堀田」[石川<sup>ほか</sup>1994、星野<sup>ほか</sup>1996]、細池遺跡で「凹地遺構」とよばれた溝群[小池1994]に類似する。両遺跡の報告においては、これらを水田遺構と捉えている。遺構の性格を検証するためSD68の底部に溜まった土壌について、植物珪酸体分析・花粉分析を行った(第六章1・2)。

植物珪酸体分析の結果、イネの珪酸体2,000個/gが検出された。稲作跡の検証基準(5,000個/g)を下回っているが、付近で稲作が行われた可能性を示唆している。また、SD68の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと推測されている。

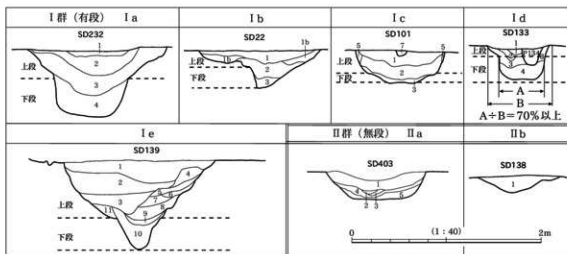
花粉分析においては、ヨモギ属が高率で出現しイネ科はこれに次ぐ。イネ科の出現率という観点でいえば、植物珪酸体分析の結果と一致する。一方、溝と同時期に位置付けられる井戸の埋土の堆積当時は、周辺で集約的な稲作が行われていたものと評価されている。また、検出されたハンノキ属については、水田の畦畔や水路周辺等に植えられていた可能性が指摘されている。

これらの状況を総合すると、方形に廻る溝は水田遺構の可能性はあるが、珪酸体・花粉の出現率からそれを裏付けることはできなかった。しかし、井戸の埋土の堆積当時、周辺で集約的な稲作が行われていた可能性が高く、それに関連する遺構である可能性を否定できない。分析試料数が少ないため、十分な検証を行えなかったが、居住域と生産域が隣接する状況を想定させる分析結果と考えられる。

## C 古代(Ⅱ期)の遺構

### 1) 溝(図版4・7・9・11・13・16・21・24・34・36・37・39・47・48・49・50・51・52)

Ⅱ期の遺構は、SX103を除けば溝のみである。建物跡はもちろんのこと、ピットも検出されていない。分布はC区に南北方向に並行して走る2条の溝を除き、他の全てがA区に集中する。調査範囲を南西から北東方向に多数の溝が網目状に横断するその様は、該期の遺跡としては極めて特異な遺構の検出状況といえる。ここでは、特徴的な遺構が、集中的に検出された背景について検討することとする。



第16図 II期の溝における断面形態の分類

## 溝の年代

溝に伴う遺物はほとんど認められず、伴出遺物から遺構の年代を決定することは難しい状況にあった。しかし、検出状況に「①わずかに出土した遺物(167~178)すべてが9世紀末葉~10世紀初頭という短期間のうちに位置付けられること。②古墳時代前期~後期(1期)の遺物包含層IVb層を切るように構築されていること。③中世前期(III期)の遺構(SE61, SK156・220, SB1)に切られていること。」という規則が存在することを確認した。したがって、出土遺物の年代から古代に位置付けられる可能性が考えられるが、土師器碗171がSD133の覆土中位から出土したほかは、すべて覆土最上層から出土している。特に、遺存率の高い土師器4点(167・168・173・178)は確認面付近から出土しており、溝が9世紀末葉~10世紀初頭に埋没したことを示唆している。一方、覆土下位からの遺物出土は認められず、構築年代を示すための十分な資料は揃っていない。しかしながら、IVb層との切り合い関係から、構築年代を古代以前に遡って考えることはできず、構築年代・廃絶年代ともに古代に位置付けることが適当と考えた。

## 遺構覆土の特徴と切り合い関係

II期の溝37条のうち、単層の覆土の溝は3条のみである。大半が4層~11層から構成される覆土をもつ中型から大型の溝である。覆土の堆積パターンは極めて特徴的で、下半に粘質シルト、上半に細砂~砂質シルトが堆積しており、埋没過程がよく共通することを窺える。

下半の覆土の大半は、非常に粘性の強い粘質シルトで覆われている。特に最下層の粘土層は均質でしまりが強く、また鉄分の沈着が著しく見られた。鉄分の沈着は、底面付近の覆土と地山の層理面に認められ、遺構の輪郭を明瞭に示すことがあった。色調は、黒褐色・褐灰色等より暗い色調から、灰黄褐色・黄灰色・灰白色等より明るい色調がみられる。特に、並列する規模の大きな溝SD18・75・161・176・209の最下層は、全てより暗みの強い黒褐色粘質シルトであり共通性を窺える。覆土下半に堆積した粘性が高い覆土は、その粒子が細かいことから比較的緩やかな水流のもとで堆積する傾向にある。つまり溝が機能していたときに堆積した可能性が高い。また、底部からは灰白色シルトがブロック状に検出され、火山灰である可能性を想定したが、分析の結果、火山ガラスを積極的に認めることはできなかった。

これに対し上半の覆土は、しまりが弱く均質な砂質シルトあるいは細砂に覆われている。黄灰色・黄褐

色・明黄褐色・にぶい黄色等、黄色がかった色調であった。確認面であるⅢa層と非常に酷似していたが、不整合を示す部分があること、地山の粘性がより強いことを根拠に区分した。覆土上半の砂層は、概ね3層に分層されるが、最上層が最も厚く堆積する傾向にある。粒子の粗い砂質層は、比較的速い水流のもとで堆積したと考えられ、より大きなエネルギーによって運ばれた堆積物であることが窺える。

以上のように覆土の堆積過程に共通性を窺い知ることができるが、切り合い関係が一部で認められる。例えば、SD209（新）とSD21（旧）の覆土においては、1層は共に明黄褐色細砂、最下層は209が黒褐色粘質シルト、21が灰黄褐色粘質シルトである。最下層の色調は若干異なるが、極めて酷似した覆土であることがわかる。SD232（新）とSD233（旧）においては、第1層は黄灰色砂質シルト、最下層は黒褐色粘質シルトと完全に共通する。新旧関係のある場合においても、極めてよく似た堆積過程を示していることが理解されよう。

### 形態的特徴

平面形態においては、ほとんどが直線的であり、同一幅で調査範囲を横断する。しかし、東に向かって溝幅が大きくなるもの、またはその逆も若干存在する。次に、直線的な溝と溝の間をつなぐかのようなバイパス状の溝は、やや曲線を帯びる傾向にある。また、SD181・255・257・262等、16K・17Kグリッドのみに存在する、幅・長さ・方向性に規格性をもった一群は、ゆるやかに弧を描き並列する。これは等間隔に分布し、かつ長さも一定することから、畑の畝との関連性が窺える。

断面形態は、第16図のように分類した。1条の溝で複数の断面形が記録されている場合は、できるだけ直交方向に切った断面形を選択して分類することとした。その結果、明確な段差を有するⅠ群と、有さないⅡ群に分類され、Ⅰ群が約80%を占めることがわかった。

有段のⅠ群は、さらに5種類に細分することができる。Ⅰa群は、より明瞭な段差が認められ、幅の広い上段と幅の狭い下段から構成される一群である。断面形は、ほぼ左右対称形を示すことが特徴的である。全体の37%を占め、最も多い形態である。Ⅰb群は、Ⅰa群と共通するが、一方の斜面に段差を有さないため、左右非対称形を示す一群である。全体の20%を占め、Ⅰa群に次ぐ出現率である。Ⅰc群は、概ね方形の断面形を示すが、底面に幅が狭く浅い段差を有する一群である。Ⅰd群は、開口部と有段部の幅の差が小さく、より不明瞭な段差を有する一群である。開口部の幅を100%とした時、有段部の幅が70%以上を測るものを本群に分類し、Ⅰa群と区別した。Ⅰe群は、開口部に比して底面の幅が著しく狭く、断面V字状を呈するものである。無段のⅡ群は、逆台形状を呈するⅡa群と、弧状を呈するⅡb群に細分することができ、全体の20%を占める。

これらの溝は、A区の概ね用水路より北側から検出されている。その中でも北側にⅠb群のSD18・19が、南側にⅠc群のSD276・101が並列する。その中間には、Ⅰa群が8条並列し、その中央に最大の溝SD139（Ⅰe群）が位置する。

なお、幅と深さの計測値からは、小規模（幅40～70cm・深さ10～50cm）、中規模（幅90～140cm・深さ25～60cm）、大規模（幅160cm・深さ95cm）に分類することができる（第17図）が、断面形態の分類との相関関係は認められなかった。

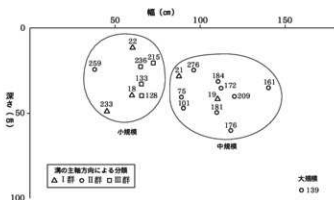
主軸方向による分類と分布状況

溝の主軸方向を示した第18図からは、北北東-南南西方向 (N7°E ~ N23°E) のI群、北東-南西方向 (N32°E ~ N43°E) のII群、東北東-西南西方向 (N53°E ~ N90°E) のIII群に分類できることがわかる。また、16K・17Kグリッドのみに分布する、北西-南東方向に並列する畝跡とみられる一群をIV群とする。主軸方向の分類群ごとの分布状況 (第20図) をみると、一定の傾向を見出すことができる。I群が北寄りに、III群が南寄りに、II群がその中間に分布する様子が理解できる。また、主軸方向と規模の相関関係を見ると、いくつかの例外はあるが、II群は大規模・中規模、I・III群は小規模という傾向が強いことがわかる。

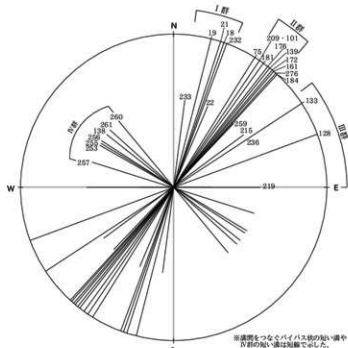
主軸方向と変遷観

37条の溝が抽出されたが、一部の溝の間に切り合い関係が認められた。さらにこの切り合い関係を、主軸方向の分類群ごとにみると一定の相関関係を見出すことができる。

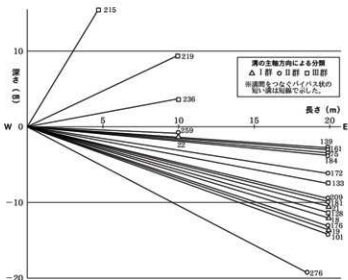
主な切り合い関係を整理すると、SD21 (I群) → SD209 (II群)、SD18 (I群) → SD236 (III群)、SD233 (I群) → SD232 (III群)、SD232 (II群) → SD236 (III群)、SD75 (II群) → SD236 (III群)、SD262・255・256 (IV群) → SD128 (III群) となる。すなわち、主軸方向による分類群は時間差を反映している可能性を指摘でき、I群→II群・IV群→III群という変遷観を復元す



第17図 II期の溝における深さと幅



第18図 II期の溝における主軸方向



第19図 II期の溝における勾配

ることができる。この関係を模式的に整理した第21図をみると、溝が時間の経過とともに東方向へ傾いていく過程を認めることができる。また、IV群については、切り合い関係からIII群より古く位置付けられることは確実であるが、II群との新旧関係については明らかでない。しかし、IV群の溝の縁はII群の溝SD183に沿うように収束しており、並存した可能性を窺い知ることができる。したがって、II群とIV群は並存する可能性を指摘することができる。

このように整理すると、各時期において一定の方向性があったものと考えられる。一見、網目状にみえる溝は、異なる時期に形成された、異なる主軸方向の溝が累積した結果ということができる。ただし、出土遺物の年代から、そのことを裏付けることはできなかった。

### 勾配

検出された37条の溝の勾配を計測した。計測にあたっては、1条の溝に対し2か所の計測点を設定し、底面の標高と2点間の距離を測って求めた。計測点は、できるだけ離れた断面図作成地点に2点に設定し、底面レベルを補足しながら計測した(第19図)。

その結果、IV群9条を除いた28条のうち、24条が南西から北東方向へ傾斜していることが明らかになった。この傾斜は、南葉山麓から広がる高田面の傾斜に沿っていることがわかる。調査範囲を横断する大規模～中規模の溝の勾配は、 $1/100 \sim 1/700$ であり、平均すると $1/300$ 程度である。遺跡周辺における地表面の勾配が $1/600$ 程度であるから、この2倍程度の勾配といえる。ちなみに平野部における用排水路の勾配は一般的に $1/500$ 以上であることから、水が円滑に流れていたものと想定される。しかし、底部に堆積している覆土は、粒子の細かい粘質シルトであり、比較的緩やかな流れのもとで堆積したものと考えられる。

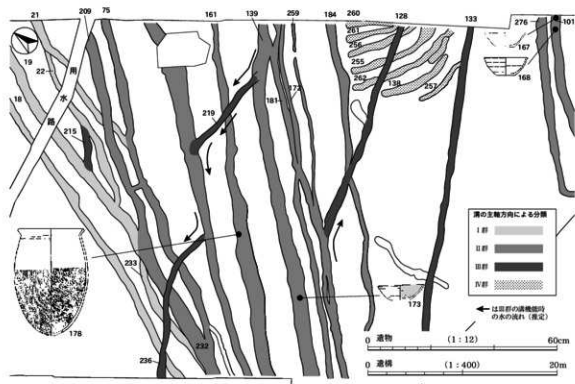
一方、大規模～中規模の溝をつなぐバイパス状の溝SD215・219・233・236は、東から西に向かう $1/30 \sim 1/275$ という急勾配であることがわかった。大規模～中規模の溝とは、逆の勾配であることが特徴的といえる。周辺地域の勾配を考えれば、水が西から東へ流れることが自然であり、何らかの意味を有するものと考えることができよう。例えば、切り合い関係から並存したと考えられるSD19とSD22、そして両者をつなぐSD215のような場合は、SD19の水位が一定量に達したらオーバーフローし、SD215を経由してSD22・SD21に流れる仕組みを想定することができよう。逆勾配であることに重要な意味があるのかもしれない。

これらの溝は、水を流すための施設であることは確かであろうが、用水路としては規模が大きく、特に深いことは機能上、支障をもたらす。規模を勘案すれば、排水路と考えた方が可能性は高いと考えられる。

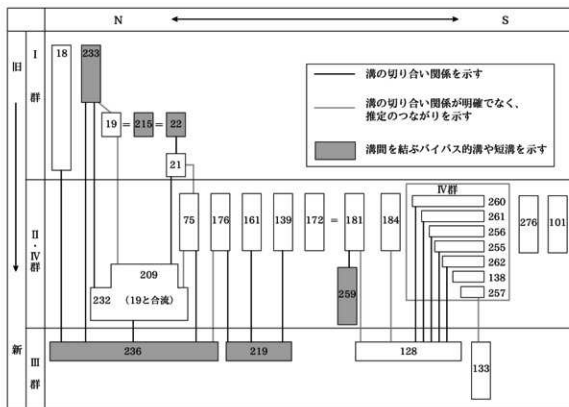
### 古環境の復元からみた溝の機能

遺構の性格を検討するため、SD19・SD176の底部に溜まった土壌について、植物珪酸体分析・花粉分析を行った(第VI章1・2)。その結果、SD176の試料においては、イネの珪酸体が $5,600$ 個/gと高密度で検出された。稲作跡の検証基準( $5,000$ 個/g)を上回っており、付近で稲作が行われた可能性を示唆している。SD19の試料においてもSD176ほど高密度ではないが、イネの珪酸体が検出されている。2点の分析結果を踏まえれば、調査範囲周辺で稲作が行われたものと考えられる。花粉分析においてもイネ属やオモダカ属が認められ、周辺地域における稲作の可能性を支持している。

調査範囲からは、該期の建物跡やピットは発見されておらず、また遺物が殆ど出土していない状況にあ



第20図 I期の溝における主軸方向別分布図と遺物出土地点



第21図 I期の溝における新旧関係

った。したがって、調査範囲を居住空間と考えることはできず、溝の規模や植物珪酸体分析・花粉分析の結果を踏まえれば、検出された溝が稲作に関連する排水路であった可能性を指摘できる。また、溝の周辺は、ススキ属やチガヤ属、ヨモギ属等の草本類が生育する日当たりのよい比較的乾燥した環境であったものと考えられた。調査範囲は段丘上であるため、もとより比較的乾燥した土地であったと考えられるが、検出された溝が排水路となり土壌の乾燥を促進させたものと考えられる。

### 洪水による埋没後の復旧

Ⅱ期の溝には、一定の堆積過程が見出される。下半に堆積した粒子の細かい粘質シルトは、機能時に比較的緩やかな水の流れのもと、長期間にわたって堆積したものと考えられる。一方、上半に堆積した粒子の粗い均質な細砂・砂質シルトは、洪水等の大きなエネルギーによって短期間のうちに埋積したものと考えられる。しかし、切り合い関係から、すべての溝が同時に埋積していないことは明らかである。洪水による埋積であるとすれば、繰り返して洪水に見舞われ、同質の土砂が上流から流されてきたものと想定される。平安時代の小海運の最盛期には、浅い谷は下流から上流へと埋積されたため、洪水が頻発したと考えられている [高野 2004]。このような環境のもと、繰り返して生じる洪水によって溝が埋没するたびに、新たに開削されたことが想定される。主軸方向Ⅰ群とⅡ群の関係については、おおむねこのように理解して差し支えないと考えられる。

しかし、主軸方向Ⅲ群のSD128・219・236については、単に掘り直しとすることでは理解できない。最も顕著な事例がSD219である。平面形状のみをみればSD219を、Ⅱ群のSD176とSD169をつなぐバイパス状の溝と考えられる。しかし、SD219はⅡ群のSD169・161・176を明らかに切っている。しかし、SD176とSD139を横断することはなく、両者の溝と接するように途切れている。また、SD139との合流部付近では切り合い関係が明瞭なものの、その延長上に新しく掘削されたはずのSD219は検出されていない。すなわち、SD219がSD139と合流するかのよう状況が理解される。このことから導き出される仮説として、SD219が半埋没状態であったⅡ群の溝 (SD176・139) をつなぐ役割を果たしたことが想定される。SD176・139は最も規模の大きな溝であり、より埋没しにくい状況にあったため、半埋没状態で一部の機能が残された可能性が最も高いものと考えられる。さらにSD176の西側 (上流側) には、Ⅰ群・Ⅱ群の溝を横断するⅢ群の溝SD236が合流しており、SD219と同様に理解することができる。

ここで今一度これらの関係を整理することとしたい。Ⅲ群のSD219・236は、ともに東から西への勾配が確認されている。一般的な溝と逆勾配であるが、SD236の長さを勘案すれば、オーバーフローしたときのみ水を流出させるバイパスとは考えにくい。したがって、東から西へ水が流れるルートを復元すると「調査範囲外X→SD139 (Ⅱ群・半埋没)→SD219 (Ⅲ群・新規)→SD176 (Ⅱ群・半埋没)→SD236 (Ⅲ群・新規)→調査範囲X' (この間、完全に埋没したⅡ群の溝SD161・75・209、Ⅰ群の溝SD233・18を横断)」(第20図)と整理することができる。なお、Ⅲ群のSD128は、Ⅱ群のSD181から分岐するように検出されているが、これも同様に理解することができる。

このように考えると、洪水によって半埋没状態となった溝を活用しながら、新たな溝が開削された可能性を指摘することができる。また、Ⅲ群の溝の規模が、Ⅱ群と比べて著しく小さい要因は、半埋没状態となったⅡ群の溝の規模にそろえたためと考えられる。

### 土器の出土状況と祭祀の可能性

主軸方向Ⅱ群の覆土上半からは、完形に近い状態の土師器が点々と出土した(第20図)。SD101からは椀2個体、SD139からは椀1個体、SD161からは甕1個体が出土しており、いずれも9世紀末～10世紀初頭に位置付けられるものである。SD101の2個体は正位(図版37・48)、SD139の椀は逆位(図版49)、SD161の甕は横位(図版37)の状態で見出された。

これらは、いずれも覆土の上面(確認面付近)で見出されており、洪水によって細砂が埋積した直後に出土位置に留まったものと考えられる。SD101の椀(168)は、やや覆土中に入り込んだ状態で見出されているが、多量に水分を含んだ細砂の上では、自重でわずかに沈下することが予想され、上面から出土したものと同列に評価できるものと考えられる。これらの状況証拠の積み重ねから、溝の覆土上面から出土した完形の土師器は、洪水後に土地を鎮めるために供えられた可能性を指摘できよう。

古代における土器祭祀の具体例として、多賀城跡の道路における「土器埋設祭祀」がある。穴を掘って土器を埋設した遺構が、道路の交差点で13基、他の路上で3基、区画内で9基、方格地割の外で3基の計28基が発見されている。16基中13基までが交差点で見出されている点、埋設時期が10世紀前半に限定され、造成工事中に埋設されていることが確認されていることを理由に、祭祀の可能性が指摘されている[平川1999]。

用言寺遺跡の事例は、穴を掘って埋設されたものではないが、①土師器の長胴甕や坏がほぼ完形の状態で見出された点、②長胴甕は横位、坏は正位で見出された点、③土師器の年代が9世紀末～10世紀前半に位置付けられる点において共通点を見出すことができる。遺構の機能の相違や埋設方法に相違点が見られるが、特異な出土状況を勘案すれば共通性を積極的に評価し、洪水後の祭祀に関する事例とみることができよう。

### 2) 性格不明遺構

SX103は、焼土の上に長胴甕1個体が見つかった状態で見出された遺構である。長胴甕の年代から、8世紀末頃の遺構と評価できる。焼土の広がり是不整形で、長さ68cm、幅27cm、厚さ2cmを測る。カマド等、住居に付随する遺構である可能性を想定したが、周辺に同時期の遺構は認められず、単独で存在するものと考えられる。同時期の遺物も認められず、遺構の性格等を評価することはできない。

## 2 遺 物

### A 中世の遺物(図版26～29・55～57)

#### 1) 概 要

北陸では、12世紀中頃に現れる「珠洲焼きの成立と広域流通、中国陶磁器の定量的流通、京都系土師皿の流入」という画期をもって「中世的土器様式」の成立期とする見解[坂井1990]がある。そうした、環日本海流通を軸とした中世北陸様式の嚆矢は、白磁が日本海側に大量流通する11世紀後半(=「白磁の洪水の時代」)に認められる[水澤2005a]。本報告では、これらの見解にしたがって11世紀後半から「中世」とする。

各遺物の分類・編年および年代観については、珠洲焼は吉岡康暢氏[吉岡1994]、瀬戸・美濃焼は藤



澤良祐氏〔藤澤1993・1995〕、中世土師器は水澤幸一氏〔水澤2005b〕、古代の土師器・須恵器は春日真実氏〔春日2005〕、緑軸陶器は高橋照彦氏〔高橋1995〕、灰軸陶器は山下峰司氏〔山下1995〕の各論考を参考にした。また、船載陶磁器については14世紀以前の分類は横田賢次郎・森田勉氏〔横田・森田1978〕及び山本信夫氏〔山本2000〕、年代観については山本信夫氏〔山本1995〕、15世紀以降の青磁は上田秀夫氏〔上田1982〕、同じく15世紀以降の白磁は森田勉氏〔森田1982〕の各論考を参考にした。

第三章で示したとおり、上層の遺構は覆土の分類から中世(Ⅲ・Ⅳ期)と平安時代(Ⅱ期)の大きく2時期に分類可能であり、さらに中世は包含層中および遺構内の遺物のまとまりから中世前期(Ⅲ期)と後期(Ⅳ期)の2時期に細分できることが分かっている。以下、この分類に則り報告する。なお、遺物図版の掲載方法は、遺構から一括して出土した遺物から各期の時代相を読み取ることを重視したため、その遺構が属する時代以外の混入品については遺構外出土と同列に扱った。

## 2) 中世前期(12世紀～13世紀, Ⅲ期)

該期における陶磁器の組み合わせは、主に白磁・青磁・珠洲焼・中世土師器で構成される。そして遺構ごとに細かくみていくと、12世紀から13世紀にかけてのその組み合わせの推移を取ることができる。SE183にみられるように白磁と柱状高台を含む土師器皿・椀の組み合わせが最も早いと考えられる。その後、珠洲焼の片口鉢が加わり(SE151)、さらには土師器皿が口縁端部を強く面取りするてづくねの土師器皿へと変化する(SE159)。最後に白磁は姿を消し、変わって龍泉窯系の青磁椀が加わり、13世紀的な青磁椀・珠洲焼・てづくね土師器皿の組み合わせ(SE155)へと変化を遂げる。こうした基本的な陶磁器組成に瀬戸焼・木製品・金属製品が若干量加わる。以下、遺構ごとの出土遺物について記述する。

SE153からは、白磁(1・2)が出土した。1は白磁皿Ⅳ-1類。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部を外反させる。胴部外面はケズリで調整する。内面および外面胴部中位まで縁掛かった透明釉を施す。露胎部は黒く変色している。化粧土は確認できない。2は白磁椀Ⅴ類の底部とみられる。見込みは白濁した釉を施すが、高台内は無釉である。ともに山本C期〔山本1995〕に含まれ、11世紀後半から12世紀中頃に比定できようか。

P291からは、白磁皿(3)が出土した。本資料は口縁部であるが、小片のため、細かな分類は困難である。口縁外面はヨコナデにより面取りをする。胎土は黄色味を帯びた灰白色を呈し、軟質である。化粧土を施した後、透明釉を掛けるが、器表は緑黄味を帯びた透明度の低い灰白色を呈し、貫入が多く認められる。広東産であろう。1・2と同様に山本C期に含まれると考えられる。

SE157からは、ロクロ成形の土師器皿(4)が出土した。12世紀前半の資料である。

SE183からは、比較的遺存率の高い白磁と中世土師器がまとめて出土した。白磁には椀(5～9)と皿(10)がある。5～7は、口縁端部を玉縁状に作出するもの。5は、白磁椀Ⅴ-3a類である。通常みられる同類は、より深身で玉縁が小さい傾向にある。体部は内湾しながら立ち上がり、胴部中程で屈曲し口縁部が外に開く。高台外側は下方につれてやや内側に傾きながら直線的に、また畳付は内接地し、平坦に削り出される。高台内側はトキン状を呈する。外面はケズリにより器面を調整し、胴部と高台との境には縦方向の細かなケズリが連続する。軸は白濁したやわらかな色調の透明釉を漬け掛ける。外面高台付近は無釉であり、化粧土はみられない。外面にはピンホールが多くみられ、内底面には焼成時の微細な不純物が焙着している。6は、薄手で内湾気味に立ち上がる形状をもち、Ⅱ-1類である。軸調は濁っており透明度が低く縁掛かっている。ムラが多く貫入は認められない。口縁端部の破損部にススが付着している。7

は、5・6と比して大型の玉縁をもつ製品であり、IV-1a類である。5と同様に厚い器壁をもち、緩やかに内湾する形状を呈する。高台の形状も5に類似するが、高台は浅く削り込んで作出され、豊付は幅広い輪高台となる。高台外面には、斜方向のケズリの痕跡が連続して認められる。白濁し黄緑味を帯びた軸を厚く掛ける。口縁内側には若干の軸溜まりがみられるが、ムラは少ない。外面高台付近は無軸となる。ピンホール・窯着物の程度は5に類似する。露胎部分には、黒色のタール状ないしは炭が付着している。接合関係にある破片により付着物の有無が明確に異なっているが、破断面には付着しておらず、破損後に付着したとは考えにくく、破損前に塗布されたものと推測される。なお、付着物が連続するはずの破片の一部には付着が見られないことから、破損後に何らかの理由（被熱等）で脱色したと考えるのが最も合理的である。8は、直口の口縁をもつ製品でII-3類もしくはIV類である。軸は透明度が高くガラス質であり、器表には細かな貫入が多くみられる。9・10は、口縁端部が外反するものである。9は、XII-1a類。体部下半で丸みを持ち、口縁部を外反させる。口縁端部は丸みを持たせている。軸は6に類似するが貫入が多い。山本信夫氏の御教示によると、XII-1a類の碗は北部九州には少ないという。この指摘は該期の流通を考える上できわめて重要な点であろう。10は、強く口縁端部を引き出す形状をなし、IV-1a類である。軸は緑掛かった色調を呈し、ピンホールやムラが少なく、貫入は見られない。本遺構から出土した白磁の胎土には大きく2類に分けられ、白色ないしは灰白色を呈し硬質のもの（福建産）と、黄白色を呈し軟質で粒子が粗いもの（広東産）がある。前者には5・7・10、後者には6・8・9が該当する。

土師器（11～44）は、すべてロクロ成形で底部は回転切り技法で切り離されており、てづくね技法の皿はみあたらない。柱状高台皿が定着し、口径が9cmほどで器高2cmほどを主体とする小皿（11～35）と口径が14cmほどで器高5cmほどを測る碗（41～44）が認められる。そのほか、口径12～13cmほどの皿（36～40）といった3種の法量で構成される。小皿の口縁部はやや内湾気味であるものの、ほぼ直線的に開く。色調はにぶい橙色から黒褐色ないしは黒色と暗い色調が多く、胎土中に雲母やチャートを含んでいる点共通しており、生産時の同時性の高さを示している。碗は胴部中程から口縁部にかけて強く内湾する。なお、本遺構出土の碗を除く土師器のほとんどにススが付着している。

鉄製品（45～48）は4点出土しているが、いずれも断面四角形の鉄棒を素材とし、折り曲げて形が作り出されることを特徴とする。45は、一端に「輪」が作り出され、他端は素材の尖鋭な部分が残される。46は釣針状に、47は環状に仕上げられており、刀子等の鐙にも似るがより厚手であり、その可能性は低い。48は折り曲げられておらず、鉄釘の可能性が高い。いずれも建築部材の可能性があり、45・46は蝶番の組み合わせとみられ、45が建物側に、48が扉側に打ち込まれた部品と考えられる。

本遺構から一括して出土した白磁は、山本C期の組み合わせとなり、珠洲焼や青磁は共伴していない。また、土師器はすべてロクロ成形されており、てづくね技法の製品はみられない。このことから、至徳寺SK512上層・SK493の資料〔笹澤・水澤2001〕と対比でき、12世紀中頃の資料と位置付けられる。

SK55からは、土師器柱状高台皿の底部（49）が出土した。ロクロ成形で、底部は回転切り技法で切り離されている。内底面にススが付着し、灯明皿として使用されていたと想定される。形態は至徳寺SK493〔笹澤・水澤2001〕に類似し、12世紀第3四半期に比定される。

SD251からは、青磁碗（50）が出土した。龍泉窯系統I-4類である。内面にヘラ状工具で刺花文を刻む。12世紀中頃～後半の資料である。

SE151からは、柱状高台皿（51）と土師器皿（52）、珠洲焼片口鉢（53・54）がセットで出土した。51と52は、ともにロクロ成形される。53は口縁形態より吉岡I2～I3期に比定できる。54は内外面に

ススが付着している。その他、平安期の長胴甕口頸部(197)と須恵器甕の胴部片(213)が混入している。12世紀末頃の資料である。

55～59は土師器皿の底部である。すべて、ロクロ成形で底部には回転糸切り痕が認められる。11世紀後半から12世紀代の所産である。55はP191からの出土である。他の製品に比べて、底径が大きい。56はSE169からの出土で柱状高台である。SE169からは須恵器甕の胴部片(215)が、混入している。また、小片のため図示していないが口縁端部を面取りするてづくねの土師皿が共伴している。57はSK220から、58はSD67から、59はSK156からの出土である。SB5を構成するP318からは白磁皿(60)が出土した。V類またはVI類の底部であり、底部は上げ底風に削り込まれ、見込みの底部境には沈線が巡る。底部を除く内外面にやや緑味を帯びたガラス化した透明釉を施す。露胎部は炭化しており、黒色化している。破断面には漆継ぎの痕跡が認められる。山本C期に含まれ、11世紀後半から12世紀前半の資料である。

SE61からは、土師器皿(61)と建築部材(62)が出土した。61はロクロ成形され、12世紀代の所産か。62の建築部材の側面には樹皮が残されている。加工は枝が除去された痕跡に限られることから、柱根の可能性がある。加工痕の観察からは、鋭利な工具によって伐採されたものとみられる。主に二方向から伐採が進められたことが読み取ることができ、あるいは伐採後に分断された痕跡かもしれない。樹種はトチノキである。トチノキは温帯の谷沿い等の湿潤地に分布する落葉高木であり、遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

SE159からは、てづくねの土師器皿(63・64)と器種不明の土師器底部(65)、白磁皿(66)、櫛(67)が出土した。63は、口径8.8cmを測る浅身の皿で、内面に油煤が付着している。64は、口径11.4cmを測る大振り・深身の皿で、口縁端部をナデにより面取りする。65は平底であるもののやや丸みを有する底部で、軟質な焼き上がりである。風化が著しく、具体的な調整等は認めたい。66は白磁皿の胴部である。外面の胴部下半は無釉である。67は櫛歯が密であり櫛櫛であろう。表面に「レ」字状の文様が刻まれる。同様の形状の製品は、仲田遺跡SE141[加藤2003]から出土している13世紀前半頃の資料である。樹種はイスノキである。イスノキは、耐久性に優れ、細かい細工にも良好で、器具類にも適することから櫛材として散見される。イスノキの分布は関東以西であることから、67は流通によりもたらされたと考えられる。

SD39からは瀬戸焼の瓶子(68)が出土した。粒子の粗いシルト質で灰白色を呈する胎土をもち、外面にはオリーブ黄色の灰釉を施す。軸にはムラが生じており、斑状に見える。外面は無文で、古瀬戸前期様式(13世紀)か。遺存率が低いいため全容を捉えられず、古代灰釉陶器の長頸瓶もしくは短頸壺の可能性もある。なお、図示していないが、てづくねで作出された可能性の高い土師器皿の小片が共伴している。その皿は、胴部中央の稜が明瞭でないことから13世紀後半～14世紀の所産である可能性が高い。

SE155からは、青磁櫛(69)と珠洲焼片口鉢(70～72)、木製品(73・74)、須恵器(222)が出土した。小片のため図示していないが、てづくねの土師器皿が共伴している。69は龍泉窯系横IIb類である。弁幅の広い片刃鎌逆弁文を胴部外面に配した製品で、13世紀初頭から中頃に比定できる。70は、吉岡I3～I4期の片口鉢に比定できる。口縁端部に櫛描波状文を施し、残存部に卸目は認められない。71と72は胴部片であるが、ともに卸目が細く鋭く作出されていることから該期の製品とみてよいだろう。71の内面卸目はかなりすり減っており、使用頻度の高さがうかがわれる。SE155からは、曲物2個体も出土した。73は完形品で、井戸の底から出土した。側板・底板ともスギ材である。底板は断面が「ハ」字

状に整えられており、木釘で固定されている。側板は、湾曲させるために内面に斜方向の傷が多数認められ、底板を二重に開いた木釘と樹皮製の留具で固定されている。74の底板は、サワラを素材とし断面が「ハ」字状に仕上げられている。また、木釘で固定した痕跡が認められ、素材・形状・固定方法において73とよく共通する。曲物の素材となったスギ・サワラは、加工が容易であるため器具類の製作に多く用いられ、特に水質に強いので桶や曲物に重用される樹種である。これらは、13世紀中頃の資料とみられる。なお、SE155からは222も出土したが、磨耗が著しい須恵器の蓋であり混入物と考えられる。

P188からは、てづくねの土師器皿(75)が出土した。P188はⅡ期のSD133を切り形成されている。口縁端部を強く面取りすることから13世紀代に比定される。

SD168からは、珠洲焼(76・77)が出土した。76は吉岡Ⅱ～Ⅲ期の片口鉢。口縁部形態はⅡ期に近い。77は甕か壺の底部である。底部をヘラケズリ調整する。図示していないが、厚手のでづくね土師器皿の小片が共伴しており、本遺構は13世紀代の資料と考えられる。なお、214の須恵器甕の胴部片は、混入品である。

### 3) 中世後期(15世紀,Ⅳ期)

中世前期に引き続き珠洲焼が流通する。てづくねの土師器皿は15世紀に至りロクロ成形の土師器皿に変化する。また船載陶磁器に関しては再び白磁が流通する。これらの陶磁器に木製品・石製品が加わる。SE180からは、土師器(78・79)と珠洲焼の甕(83)、鉄滓(80・81)、鉄製品(82・84)が出土した。78はてづくねの皿である。口縁端部の面取りは弱く、胴部中程の稜線は明確でない。14世紀代の資料か。79は回転糸切り痕の認められる底部。見込みの全面にタールが付着しているが、4か所付着していない部分が認められ、本品の上に何かを乗せて使用していた可能性も想定できる。15世紀代の資料か。83は甕の胴部片である。焼成が不良で、器表は黄灰色を呈する。本遺構からは鉄製品、鉄滓がまともに出土している。80・81は、碗形滓である。82は、断面四角形で「T」字形をなす鉄製品である。「Y」字形であれば雁股の可能性もあるが、先端部はT字に完全に開いている。鉄釘の類と考えるべきであろうか。84は、鉄製品の中では比較的大形で断面が四角形をなし、一端が棒状、他端が袋状に作り出されている。工具の柄や石突の可能性が考えられるが明らかでない。

SE150からは、珠洲焼(85・86)と土師器の皿(87・88)が出土した。85と86は共に片口鉢であるが、85が太い脚目を持つのに対し、86は細く、比して古相である。前代の遺物が混入した可能性がある。87は、器壁が直線的に外側に開く皿であるが、ロクロ成形で、底部を回転糸切りによって切り離す特徴から該期に比定できる。口縁部および、外面・底部にはタールが付着しており、灯明皿として使用された痕跡が明瞭に認められる。88は土師器皿の底部であるが、底部境を窪ますことにより柱状高台を作出しようとする意図が看取され、86と同様に混入品である可能性がある。

SE174からは、白磁焼(89)と土師器皿(90)、珠洲焼(91)が出土した。89は口縁端部を外反させる碗Ⅱ-3もしくはⅣ類の口縁部片である。11世紀後半～12世紀前半の所産。90はてづくねの皿であり、口縁端部に明瞭な面取りを施さず、胴部中央付近の稜線が弱いことから、後出的な様相が強い。14世紀前半頃の所産であろうか。91は吉岡Ⅳ4～Ⅴ期(14世紀後半～15世紀前半)の片口鉢である。口縁端部は丸みを帯びやや外側につまみ出される。脚目は太く作出される。本遺構の出土品は年代的なまともに欠ける。ここでは、吉岡Ⅴ期まで下がる可能性のある91の存在を評価し、埋没年代を該期に含むこととする。

SE167からは、珠洲焼の片口鉢(92・93)と石製品(94)、木製品(95)が出土した。92は口縁部形

態から吉岡V期の所産である。93は胴部片であるが、太い卸目が施され、該期の製品と考えられる。94は井戸の底から出土した礫の中に含まれていた砥石である。矢代川で採取可能な砂岩製で、平坦な砥面が四面に形成されている。また、平坦な剥離により平滑になった砥面が除去されている。おそらくは平滑になった砥面を剥離によって更新したものと推測される。95は、平坦な板材を素材としており、実測図下側の左右両端部は丸く薄く取められていた。ここは金属製刃部の装着部とみて厭と考えたが、柄の装着部が見当たらない。樹種は、コナラ属コナラ節である。コナラ属コナラ節（ミズナラ等）は、遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

#### 4) 中世前期～後期（Ⅲ～Ⅳ期）

遺構の覆土が中世前期（Ⅲ期）ないしは後期（Ⅳ期）と共通し、中世に属することは確実であるが、中世前期・後期のいずれかに分類することが不可能な遺構から出土した遺物を記述する。

SD12からは、瀬戸美濃焼碗（96）と珠洲焼壺底部（97）、鉄滓（98）、器種不明土師器（99）、瀬戸焼鉢（100）が出土した。96は、外面に線描の蓮弁文を配し、内外面に灰軸を施す碗である。本製品は、2片を漆により接いである。大窯1期の所産。97の器表にはタタキ目は認められない。内面は調整が粗く、凹凸が激しい。98は碗形滓である。99は薄手の器壁をもち、下方にしたがいやや外反気味にひろく形状をなしている。風化が激しく、器表は荒れている。外面にはタール状付着物が認められる。鍋であろうか。100は外面の上半と内面の一部に灰軸を施した鉢である。胴部外面下半には横位にケズリ調整されている。古瀬戸様式か。本遺構の出土品は年代的なまとまりに欠ける。16世紀以降まで下る資料が混在する可能性がある。なお、ロクロ成形による古代土師器碗（192）が混入している。なお、192の底部は回転糸切りによって切り離されている。SD12の覆土は、V期に分類されるものであり、中世の遺物を多数含んでいるが、近世まで下る可能性が高い。

SE158からは、箸状木製品（101）が出土している。本製品は遺存部の約1/3～2/3程のところまで折れ曲がっている。片端は欠損しているが、遺存している先端部は徐々に細くなり尖る。おおまかに面取りをおこなうが、断面形態は一定しない。樹種はスギである。加工工作が容易なことから、箸の素材にしばしば用いられる樹種である。なお、図示していないがづくね土師器皿と細く鋭利なタタキ目をもつ中世前半の珠洲製の胴部が共存しており、本遺構は中世前期に含まれる可能性が高い。

P294からは鉄製品（102）が出土した。やや屈曲するが、断面が四角形の鉄釘とみられる。

SD105からは大型砥石（103）が出土した。103は砂岩製の砥石である。矢代川で採取可能な石材を用いており、94と同様に平滑になった砥面の更新に供したであろう剥離面が認められる。

SE154からは所属年代不明の土師器の底部（106）と鉄滓（104）、杭状木製品（105）が出土した。106の底部は風化しており成型方法は確認できない。105の樹種はブナ科（クリ?）という結果であるが、年輪界が広くクリの可能性がより高い。

SE173からは石製品（107・108）が出土した。ともに大形の凹石である。角閃石を多量に含む粗い安山岩を素材としている。比較的軟質な石材であることもあり、107には大きな凹みが形成されている。この種の凹石は、中世の遺跡からしばしば出土することがあり、近隣の仲田遺跡からは凹みとフィットする球状の礫も出土している。なお、この石材は淡江川等、妙高山麓で容易に採取でき[加藤2002]、頸南地域では縄文時代から凹石・磨石・石皿に多用される。妙高山塊から河川を集める関川でも、この種の石材は採取可能であることから、近隣で採取された石材とみられる。井戸の覆土には、しばしば拳大～人

頭大の礫が含まれるが、いずれも矢代川・関川で採取可能な石材である。地山にこれらの礫が含まれることはないことから、近隣の河川から搬入されたものと考えられる。

159と184は、道路状遺構の側溝部分から出土したものの。159がSD9から、184がSD10からの出土である。159は遺存状態が悪く、詳細は不明であるが、ロクロ成形による土師器碗で古代に属するか。184は土師器碗で、春日VI期頃（9世紀後半～10世紀初頭）の所産。なお、道状遺構からはまとまった出土はみられないため詳細な存続年代は判断できない。ただし、小片のため図示できなかったが、SD10からてづくねで薄手の、14世紀代の可能性のある土師器皿が出土していることから、14世紀以降の遺構としておきたい。

161・164・187・209・223は、生産域に付随する方形に巡る溝群から出土したものの。161と187はSD31から、164と209がSD132から、223がSD39からの出土である。これらの溝からの出土品は小片が多く、他時代の混入が多い点が特徴である。209と223は須恵器で、209が坏、223は蓋。161は中世土師器の底部。164と187は底部に回転系切り痕が認められる古代の皿である。

SK149からは、灰軸陶器皿（194）が出土した。黒笹90窠式に比定でき、9世紀末～10世紀前半頃。なお、小片のため図示できなかったが、中世前期と考えられる土師器皿が出土しており、中世前期の遺構である可能性がある。

## 5) 遺構外出土の遺物

109～119は轆轤陶磁である。109～115は青磁で、すべて龍泉窯系の碗である。109は、IV1あるいはIV2類で山本D期（12世紀中頃～後半）の所産。内面に劃花文を施す。110はI-1類で山本D期（12世紀中頃～後半）の所産。無文。111はII-b類で14世紀後半から末の所産。外面に片刃彫りによる菊蓮弁文を施す。112は上田D類で14世紀後半～15世紀前半の所産。器表に細かな貫入が認められ、二次的に被熱している可能性がある。113はIV類で山本G期（14世紀初頭～15世紀前半）の所産である。114は底部資料で15世紀の所産。外底面に蛇ノ目状に軸刺ぎする。115は上田B-IV類で15世紀末から16世紀の所産。外面に剣先蓮弁文を描く。116は天目碗である。灰白色の堅く緻密な胎土を持ち、内面と外面胴部上半に暗褐色を呈する鉄軸を施す。内面には微細な擦痕が無数に認められる。

117～119は白磁である。117は森田C類の白磁である。灰白色の堅密な胎土をもち、黄緑灰色のガラス質な釉を内面に施す。見込み中央には印花文を配す。高台は削り出して作出され、外面・内面ともにやや外側に傾斜しながら直線的に立ち上がり、断面台形を呈す。削り込みは浅く、高台内はヘラ状工具を回転させて削り込んだ痕跡が明瞭に残されている。豊付は幅広の輪高台であるが内側で接地する。いわゆる「ピロースクタイプ」であり、15世紀の所産である。破断面には漆継ぎの痕跡が認められる。118と119は森田D類に属し、118は坏、119は皿である。ともに117とは異なる黄白色を呈する軟質な胎土を持ち、全体的に黄色味を帯びる。口縁端部を面取りする。15世紀の所産。

120～130は瀬戸・美濃焼である。120と122は、古瀬戸後期様式IV期頃の灰軸平碗である。120は、口縁部を屈曲させ、外反させる。本品は中世前期まで遡る可能性がある。122は胴部片であるが、胴部と高台の境に平坦な段を有する。内面には日積み（重ね焼き）の痕跡が認められる。121は筒形香炉で、外面に灰軸を施すが、内面は無軸である。外面には一条の沈線が巡る。古瀬戸後期様式の可能性が高いが、大窯段階まで下るかも知れない。123は、緑軸小皿の底部である。古瀬戸後期様式（14世紀後半～15世紀中頃）。124は大窯段階の坏である。灰白色の胎土を有する。内面と外面上部に黒褐色を呈する鉄軸を

掛ける。125は、端反皿で大室2期（16世紀中頃）に位置付けられる。口縁部上面のみ濃緑色でガラス質の灰軸を施す。126は、灰軸丸皿で大室期（15世紀末～16世紀）に位置付けられる。口縁部を肥厚させ、玉緑気味に作出する。127は大室段階の鉄軸丸皿である。薄手で、内面および外面の口縁部に暗褐色を呈する鉄軸を施す。

128～130は、志野皿である。128は端反皿で、厚い長石軸を全面に施す。129は丸皿で薄手の長石軸を全面に施し、内面には鉄絵を描く。130は底部片。ともに16世紀末から17世紀第1四半期の所産。131～147は、珠洲焼である。131～139は、片口鉢である。131は古岡Ⅱ期（13世紀前半）、132と133はⅢ期（13世紀後半）、134はⅣ1～Ⅳ2期（14世紀前半）、135はⅣ2～Ⅳ3期（14世紀中頃）、136はⅤ期（15世紀）に位置付けられる。137・138は胴部片、139は底部である。137～139のいずれも太い鉾目が刻まれる。139は、底部外面をヘラケズリ調整する。140・141は、壺の口縁部である。140は古岡Ⅰ～Ⅲ期（12世紀後半から13世紀）、141は古岡Ⅳ1期頃（14世紀初頭）の所産か。142と143は、壺もしくは瓶の底部片である。142の外面はヘラケズリで、内面はヨコナデで調整されている。143の外面には、回転系切り痕が認められる。内面は未調整で凹凸が激しい。破断面に漆継ぎが認められる。144～146は甕である。144は頸部、145と146は胴部片である。いずれも器表にタタキ目および当て具痕が認められる。147は、甕の破砕した胴部片を再利用しての研磨具である。器表のタタキ目や破断面の凹凸を砥面として利用している。

148～165は中世土師器である。148～157はてづくねの土師器皿である。148は浅身の皿で、口縁端部の面取りや胴部中央の稜線が不明瞭であることから、13世紀末～14世紀に位置付けられる。内面には黒色付着物が認められる。149～154は小口径、155～157は大口径の皿。その多くに胴部下半の内外面に指頭正痕が認められる。13世紀から14世紀の所産。155は小片のため復元実測ではあるが、口縁端部に面取りを施し、器高が低く器壁が外に開く形態から12世紀末～13世紀前半に位置付けられる。一方、156と157は器壁が薄く口縁端部を外反させる形状から14世紀代に下る可能性が高い。158は口縁部をヨコナデし、口縁端部が上方にやや突き出る形状から15世紀代の所産である可能性が高い。159～165は底部片である。159～165は大型の底径を持つロク口成形の土師器皿で、15世紀に比定できるものである。160・162～164の底面には回転系切り痕が認められる。165は厚手の器壁をもち、12世紀の大型の柱状高台皿もしくは碗の底部と考えられる。

遺構外から出土した資料も、やはり13世紀と15世紀の遺物が多いが、遺構から出土した陶磁器類のまとまりと比べると、より幅広く12世紀から16世紀の製品も混在する状況にある。

## B 古代の遺物（Ⅱ期、図版30・31・57・58）

### 1) 遺構内出土の遺物

該期の遺構は、多条の溝とわずかな性格不明遺構のみである。それらはすべて、厚い細砂層に覆われており、洪水等により短期間のうちに埋没したものと理解された。該期の出土遺物は、他の時代のものより遺存率が高く、完形に近いものが多い。また、分布は極めて散発的で、溝の最上層から出土することが特徴的であった。古代の遺物総数は多くないが、土師器碗・長胴甕、緑軸陶器が出土した。

166～173は、土師器碗である。166はSD403から、167と168はSD101からの出土である。ロク口成形で、底部は回転系切り技法で切り離されており、無台である。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁をやや外側に引き出している。169はSD176から、171はSD133からの出土である。とも

に胴部下半を欠損するが、168と同様な形態を持つと考えられる。173はSD139からの出土である。内面はミガキにより黒色処理されている。ロク口成形であるが、底部はケズリにより調整され無台である。底部外面には、ヘラ状工具による沈線が一条認められる。外面の胴部下半は横方向によるケズリで調整される。170はC区のSD403からの出土である。A区の溝から約150m北方に離れた位置にある。本製品はロク口成形され、底部は回転糸切りにより切り離される。無台で浅身である。171は、SD133の覆土の下位から出土した土師器椀である。他の椀と比して、体部の反りが弱く、口縁端部の丸みや外側への引き出しが弱い。春日VI期まで遡る可能性のある資料であり、9世紀後半に位置付けられる。

174はSD276、175はSD233から出土した須恵器蓋である。春日VI期の所産と考えられ、9世紀後半の所産。ともに東頸城丘陵産とみられる。SD276は調査範囲南端に位置し、東端と南端が調査範囲外に延びるL字に曲がる溝で区画溝になる可能性がある。他の直線的な溝とやや異質な感じを受ける。小片であるため図示していないが、内面黒色土器が共存している。

176は緑釉陶器皿である。SD104からの出土である。浅みの皿で、口縁端部は丸く外に作り出される。胎土がやや黄色味を帯びた灰色を呈することから東海産と考えられ、9世紀後半に位置付けられる。

177～179は土師器の長胴甕である。177はSD139から出土した口縁部である。頸部は短く、口縁端部は丸く取める。器表は激しく剥離しているが内面は特に凹凸が認められ、指押さへの痕跡である可能性もある。全体的に古相を呈し、古墳時代後期～古代初頭に位置付けられようか。178はSD161からの出土である。胴部上半は横方向のカキメ調整、下半はタタキ調整される。遺存していないが、底部は丸底になるものと推定される。頸部は短く、口縁端部を内側につまみ上げる。179は、焼土SX103からの出土である。胴部をハケメとケズリにより調整する。底部は丸底で、短い口頸部が直線的に外に開く。178と比較して古相を示し、8世紀末頃に比定できるか。

以上のように、古代の土師器は179を除き、溝の検出面上ないしは極めて浅い深度から出土している。177・179以外の土師器は、春日VI-3～VII-1期頃の所産と考えられ9世紀末～10世紀初頭のものである。

## 2) 遺構外出土の遺物

180～192は土師器椀である。口縁形態に注目してみると、端部が丸く外反するもの(180・182・186)、端部が丸く内湾するもの(183)、端部が細くなるもの(181・184・185)がある。187～192は底部資料である。193・197・198は小甕とみられる。193と197は口縁部であるが、193は肥厚し、対して197は薄手である。197の外面はヨコナデし、面取りをおこなう。198は胴部片で内外面をヨコナデ調整する。

194～196は灰釉陶器である。194と195はハケヌリで施釉され、195は三日月高台を呈する。ともに黒笹90窟式(9世紀後半)に比定される。196は粘質で白色が強く、混入物や空隙が少ないという胎質から東濃産と考えられる。角高台を呈し、大原2号窟式(10世紀前半)に比定される。199は須恵器の蓋で、遺存部の外面にはケズリ調整、内面はナデ調整をおこなう。200は土師器の長胴甕である。平底で内外面ハケメ調整をおこなう。7世紀末～8世紀初頭の所産である。

201～223は須恵器である。201～212は坏である。口縁形態に注目してみると、口縁部を外に引き出し外反させるもの(201～207)と口縁部が内湾するもの(208・209)がある。205・210～212は底部資料である。201・211・212は無台坏、205と210は有台坏である。211と212には回転糸切り痕が認められる。9世紀後半頃の所産であろうか。213～216は甕の胴部片。いずれも内外面にタタキ目お



よび当て具痕が明瞭に認められる。217と218は横瓶。217の胴部は半分しか遺存していない。遺存部の側面には開口部が認められ、その付近はカキメ、頸部付近からはタタキが認められる。その後、開口部を閉塞し、頸部はヨコナデ調整している。219と220は長頸瓶。219は口縁部、220は頸部である。221は瓶または壺の底部。222と223は蓋。ともに遺存率が低く、全容をつかみがたいが器高が低く、222が8世紀後半頃、223が9世紀中頃の所産か。

本遺跡から出土した須恵器の胎土は2種に大別できる。1つは春日真実氏が「C1群」としたもので、「石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い」〔春日2005〕胎土であり、頸城平野東丘陵窯跡群に特徴的に見られる胎土である。もう1つは「C3群」としたもので、「砂質もしくはシルト質で均質な」〔春日2005〕胎土であり頸城平野西丘陵窯跡群に見られる胎土である。佐澤小泊窯産と特定できたものはない。なお、個々の遺物の産地推定については、笹澤正史氏から御教示いただいた。201と203、204、207～209、213、216はC3群であり、東頸城丘陵産と考えられる。205と206は、胎土はC3群に近似しているものの、小片であるうえ器表が荒れており、東頸城丘陵産の可能性が高いが、断定することはできない。201と205は日向窯や未野窯の製品〔笹澤2002〕に類似し、8世紀中頃～後半に位置付けられる。

211・217・218・221・223はC1群であり、西頸城丘陵産と考えられる。217は焼成不良で橙色を呈し、産地が特定しがたいが、混入物が向橋窯跡の製品に似ていることから本群に位置付けた。210・214・215はC1群と近似する胎土を有するものの、胎土中に黒色粒子を多く含む一群で、胎質は下馬場窯（西頸城丘陵）の製品に似る。219と220は明確に産地が特定しがたいものの、混入物や胎質がC1群に近似しており、西頸城丘陵産の可能性が高い。219は外側に大きく開く形状をなす長頸瓶の頸部と考えられるが、頸部外面に自然釉が薄く掛かっていることから、天地逆転して焼成した可能性がある。もしくは、脚台であろうか。8世紀後半頃の所産である。212と222はローリングを受け摩耗しており、産地の特定に至らなかった。胎質から西頸城丘陵産の可能性はある。202は焼成不良のため産地が特定できなかった。

遺構外からの出土遺物は、土師器碗や灰軸陶器が遺構内出土物の年代と概ね同時期（9世紀後半～10世紀初頭）に位置付けられるのに対し、土師器長胴甕の一部や須恵器に8世紀代中頃まで下る製品が一定量認められた。また、そうした古相の遺物の多くは器表の磨耗が著しく、二次移動した可能性が高い。このことは、調査範囲の周辺に今回検出された遺構の時期より古い段階の生活域が存在する可能性を示唆している。

## C 年代の詳細が明らかでない遺物（Ⅱ期～Ⅳ期）

224～228は上層の遺物で所属年代の不明なものである。224と228は石製品で、224は、不明石製品であり、年代も明らかでない。裏面に穿孔痕跡？がみられ、ここを境に半割している。また、表面に括れが形成されている。全面が著しく磨耗しており、ローリングを受けた遺物とみられるが、自然の産物とは考えにくい。228の砥石は、使用の進行により角柱状をなす。砂岩製の他の砥石と比べると緻密な凝灰岩が用いられており、仕上げに用いられた可能性が考えられる。同種の砥石は、金属器が出現する弥生時代以降に大きな形態変化がないため、時期の特定は困難である。225～227は鉄製品および製鉄関連遺物で、225は鉄釘、226は羽口、227は鉄滓（椀形滓）である。これらは中世の遺物の可能性が高い。

## 第V章 中層・下層の調査

### 1 調査の方法

確認調査により3面にわたって遺跡が存在するものと理解された。しかし、確認調査率が低かった中層（古墳時代）と下層（縄文時代後期）については出土遺物の数が少なく、遺構も検出されなかった。そこで、本発掘調査を実施したA・B・C区において、上層の調査終了後に中層・下層に広がる遺跡の範囲と内容を把握するための部分的な調査を実施することとした。また、本発掘調査開始後に用地の取得が進展したため、A区とB・C区の間D区・E区についても調査を実施した。

調査は、対象地にトレンチを任意に設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した（第22図）。その後、土層の堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。なお、バックホーによる掘削は、1回あたり1～2cmずつ漕き取る方法で行った。さらにサンプリングエラーを防ぐため、漕き取りの都度、掘削面全面を竹箆で傷つけ、遺物の有無を確認している。このような方法で調査していることから、遺物のサンプリングエラーは少ないものと考えられる。



第22図 中層・下層の調査風景

### 2 中層の調査

#### A 遺構・遺物の検出状況（図版25・52～54）

A・B・C・D・E区あわせて23トレンチ、1106.5m<sup>2</sup>（15.4%）を調査した。その結果、中層の遺物包含層あるいはそれに相当するIV a層の存在は調査対象地全域で確認されたが、遺構・遺物はほとんど検出されていない。遺物の出土状況は極めて散漫で、遺物の集中範囲は認められなかった。遺構については、溝2条が検出されたが、周辺に他の遺構は確認されなかった。これらの状況から、遺物が定量出土した範囲については、トレンチを拡張してその広がりの有無を確認した。遺構が検出された範囲については、トレンチを拡張して遺構を完掘した。次に、遺構や遺物が出土したトレンチについてのみ報告することとする。ただし、A区南東隅からは古墳時代の土師器が多数出土する状況にあったため、中層の全面調査が必要と判断され、この部分の調査は次年度に実施することとなった。

#### A～Gトレンチ（B区・C区）

A～Gトレンチからは、遺物包含層が残存することが確認されたが、出土した遺物は土師器数十片であった。このうちBトレンチのIV a層またはその上位から出土した長胴甕の底部（200）の残存状況は比較

的良好であり、周囲に遺構の存在や遺物分布の広がりが想定された。そこで、出土地点に隣接する範囲を面的に調査した（Eトレンチ）が、土師器の小片1点が出土したのみであった。このほかに遺構・遺物の検出は認められなかった。なお、長胴甕（200）は、7世紀末～8世紀初頭に位置付けられることから、IVa層の下限を示す資料となる可能性がある。ただし、C区においては間層のIII層の推積が薄いため、本来的にはII層からの出土であるかもしれない。

#### N～Pトレンチ（A区・E区）

Pトレンチにおいて溝1条（SD401）が検出された。IVa層を基調とする覆度で、E区と用地外へ延伸することが確認された。遺構覆土からは、内面黒色処理された坏1片（231）が出土したことから、古墳時代後期の遺構と考えられる。Pトレンチの調査後、E区に設定したNトレンチにおいてもSD401の延長部が検出された。E区においては、IVa層から古墳時代の遺物は出土しておらず、SD401以外の遺構も検出されていないことから、遺跡の広がりは極めて稀薄であると判断された。したがって、溝の規模と広がりを把握するためにOトレンチを設定した。調査の結果、SD401は、蛇行しながら広がっていることが明らかになり、E区の中で途切れた。これ以外に遺構が存在しないことから、SD401を完掘して中層の調査を終了することとした。

#### S～Uトレンチ（A区）

Sトレンチからは、磨製石斧1点（234）と土師器1個体が出土した。蛇紋岩製の磨製石斧は片刃であり、弥生時代の所産である可能性がある。土師器は、1個体がまとまって出土したものの風化が著しく、また時期を特定しうる部位が認められなかったが、出土層位や胎土の状況（平安時代の土師器より粗粒）から古墳時代以前に位置付けられるものと考えられる。これらの出土品があったため周辺にTトレンチとUトレンチを設定したが、遺構や遺物は検出されなかった。

#### W・X・Zトレンチ（A区）

Xトレンチ及びWトレンチの断面において溝1条（SD404）が検出された。IV層が落ち込むように検出されたため、中層に相当する遺構であると判断した。この遺構の広がりと規模を把握するためZトレンチを設定することとした。調査の結果、溝は蛇行しながら広がっており、覆土から出土した2点の土器片から、弥生時代後期あるいは古墳時代前期の遺構と判断した。しかし、SD404の周辺からは、これ以外の遺物がほとんど出土しておらず、遺構も検出されなかった。このことから、SD404周辺における遺跡の広がりは極めて稀薄と考えられる。

### B 遺 物（図版31・58）

229～236は中層から出土した遺物である。229～231は、遺構から出土したもので、229と230はSD404から、231はSD401からの出土である。229は口縁部が長く伸びる有段口縁部の上半部、230は脚部が外反する高坏の一部である。両者とも古墳時代前期に属するものと考えられるが、破片資料であり、弥生時代後期に遡る可能性もある。231は口縁部が外に開いて屈曲する坏であり、内面はヘラミガキで黒色処理されている。古墳時代後期のものである。232・234～236は遺構外から出土した。233はSD33からの出土である。頸部がほぼ垂直に立ち上がる有段口縁部片で、器種は壺であろう。段部には、粘土帯の接合痕が確認できる。時期は、古墳時代前期に位置付けられる。232・235・236は、古墳時代後期の土師器である。232は壺の口縁部。口縁部が上方に向かって直線的に伸びるもので、内外面がヨコナデ調整される。235は、充填法の痕跡を残す平底の甕底部。236は、甕の下半部。底部は安定し

た平底で、体部が上に向かって膨らむ。外面に縦方向のハケ調整が、内面に横方向のハケ調整がおこなわれる。234は、磨製石斧である。小型の扁平片刃石斧で、基部側半分を欠く。石材は蛇紋岩を使用しており、灰白色を呈する。出土層位から弥生時代に属する遺物と考えられるが、遺構外からの単独出土である上、周囲から弥生土器も出土していないため、詳細な時期は不明である。

### 3 下層の調査

#### A 遺構・遺物の検出状況 (図版25・54)

下層は、平成16年11月に実施した確認調査の2トレンチから縄文時代後期・加曾利B1式期の土器1個体が出土している。これは、県内でも稀有な事例となり注目されるものであった。このような状況を踏まえ慎重に調査を行った。調査面積は、A・B・C・D・E区あわせて21トレンチ、1061.5m<sup>2</sup>(14.8%)である。

調査の結果、遺物包含層あるいはそれに相当する黒色砂質シルト層の存在は確認されたが、遺物の出土は認められなかった。また、C区において、黒色砂質シルト層の掘削後に遺構状の「しみ」が多数検出されたため、断ち割り調査を行った。大形の落ち込みは、不整形であること、地山と覆土となる黒色砂質シルト層が逆転している箇所があること、遺構の平面プランが円環状に検出されたことから風倒木痕と判断した。また、ビット状の落ち込みは、先端が極めて細くなっていた。杭の打設によって形成された可能性を想定したが、地山との境界に凹凸があり不整形であることから、その可能性は極めて低いものと判断した。遺物の出土も認められなかったことから、検出された「しみ」を風倒木痕や木の根の痕跡等、自然の落ち込みと考えるのが適当と判断した。遺物の出土が皆無であったこと、遺構が検出されなかったことから、下層の本発掘調査はこれらの部分的な調査を行うことで代えることとした。

#### B 遺物 (図版31・58)

237は、平成16年度の確認調査時にC区の2トレンチから出土した資料である。直線的に立ち上がる深鉢の上半部で、3単位の緩やかな波状口縁に把手状突起が付き、口唇部に細い刻目が施される。外面には磨消手法で細い縄文帯が作出されるが、不明瞭であり、4条の沈線間に単筋LR縄文と思われるものがかかるように確認できる。また内面には、幅6～7mmの太い沈線が2条施される。後期中葉の加曾利B1式併行期に位置付けられる。

## 第VI章 自然科学分析

### 1 植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_2$ ) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌等から検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定等に応用されている [杉山2000]。

#### A 試料

分析試料は、平安時代 (9世紀～10世紀) とされるSD19溝とSD176溝、および鎌倉～室町時代 (12世紀～15世紀) とされるSD68溝、SE153井戸、SE159井戸、SE174井戸、SE183井戸の埋土から採取された計7点である。試料の詳細を分析結果図に示す。

#### B 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 [藤原1976] を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40  $\mu\text{m}$  のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20  $\mu\text{m}$  以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10-5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合等を具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である [杉山2000]。

#### C 分析結果

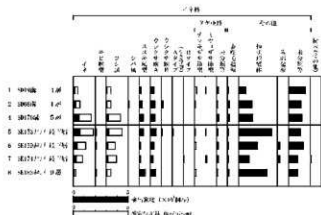
##### 【分類群】

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行

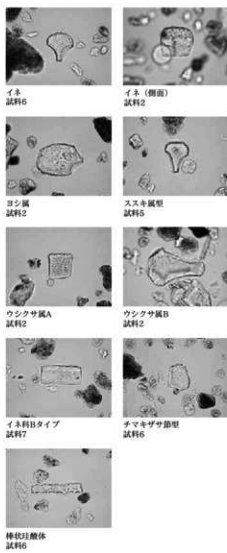
# 1 植物珪酸体分析

植物群 (単位: ×100個/g)	学名	地点・試料									
		SD10	SD68	SD176	SD132	SD130	SD174	SD183	その他	未分類	その他
イネ科	<i>Oryza sativa</i>	14	21	56	43	29	29	7			
キビ科	<i>Panicum type</i>	7	7	21	23	13	15	7			
ヨシ科	<i>Phragmites</i>	7	7	21	23	13	15	7			
ススキ属型	<i>Microstachya</i>	14	21	28	29	7	7	47			
ウシクサ属A	<i>Anthoxanthum A type</i>	30	42	42	52	33	32	47			
ウシクサ属B	<i>Anthoxanthum B type</i>	14									
イネ科(くさび型)	<i>A type</i>										
イネ科(Bタイプ)	<i>B type</i>									7	
チマキザサ節型	<i>Phalaris (Scribn.)</i>	21	7		6	1313					
ミヤコザサ節型	<i>Sua. sat. Cuscuta</i>	7					16				
その他	<i>Others</i>	14	7	21	11	13	15	7			
その他のイネ科	<i>Others</i>										
高草科	<i>Hack. lat. etc.</i>	7	14	14	6	7	7	13			
雑草科	<i>Sua. sat. Cuscuta</i>	43	119	127	296	170	94	253			
ススキ属	<i>Others</i>						20	22			
ウシクサ節型	<i>Others</i>	133	112	120	109	131	80	80			
未分類	<i>Others</i>									7	
植物珪酸体総量	<i>Total</i>	333	371	420	421	453	320	451			
おもな分類の構成比率 (単位: % (g/g)) / 試料の検出率 (100未満は検出なし)											
イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.41	0.62	1.66	1.86	1.10	0.80	0.20			
キビ	<i>Panicum</i>	0.49	0.44	1.26	1.45	0.83	0.92	0.42			
ススキ属型	<i>Microstachya</i>	0.17	0.25	0.30	0.30	0.08	0.09	0.58			
ウシクサ属A	<i>Sua. sat. Cuscuta</i>	0.16	0.66	0.66	0.64	0.10	0.10	0.10			
ウシクサ属B	<i>Others</i>	0.20									
チマキザサ節型	<i>Phalaris sat. Scribn.</i>										
ミヤコザサ節型	<i>Sua. sat. Cuscuta</i>	80	100		71	100		100			
その他	<i>Others</i>	11			22			100			

第2表 植物珪酸体分析結果



第23図 植物珪酸体分析結果



第24図 植物珪酸体の顕微鏡写真

い、その結果を第2表および第23図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

## 〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型(おもにススキ属)、ウシクサ属A(チガヤ属等)、ウシクサ属B(大型)、Aタイプ(くさび型)、Bタイプ

## 〔イネ科-タケ亜科〕

チマキザサ節型(ササ属チマキザサ節・チマキザサ節等)、ミヤコザサ節型(ササ属ミヤコザサ節等)、未分類等

## 〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

## 〔樹木〕

## その他

### 【植物珪酸体の検出状況】

溝(SD19, SD68, SD176)の埋土では、すべての試料からイネが検出された。このうち、SD176の5層(試料4)では密度が5,600個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としてい

る5,000個/gを上回っている。その他の試料では1,400～2,100個/gと比較的低い値である。イネ以外の分類群では、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A等が検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、SD176ではイネが優勢であり、ヨシ属も比較的多くなっている。

井戸 (SE153、SE159、SE174、SE183) の埋土では、すべての試料からイネが検出された。このうちSE153の最下層 (試料5) では密度が6,300個/gと高い値であり、SE159の最下層 (試料6) でも3,900個/gと比較的高い値である。その他の試料では700～2,900個/gと比較的低い値である。イネ以外の分類群では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A等が検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、SE153やSE159ではイネが優勢であり、ヨシ属も比較的多くなっている。

## D 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

平安時代 (9世紀～10世紀) のSD19溝、鎌倉～室町時代 (12世紀～15世紀) のSD68溝の埋土の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周囲にはススキ属やチガヤ属等が生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが分布していたと推定される。また、調査範囲周辺では稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

鎌倉～室町時代 (12世紀～15世紀) とされる井戸の埋土の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、周囲にはススキ属やチガヤ属、キビ族等が生育する日当たりの良い比較的乾燥したところが分布していたと推定される。また、調査範囲周辺では稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。

## 2 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物等を対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉等の植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

### A 試料

分析試料は、植物珪酸体分析に用いられたものと同一の計7点である。試料の詳細を分析結果図 (第26図) に示す。

### B 方法

花粉の分離抽出は、中村 [1973] の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム (12水) 溶液を加え15分間湯煎する
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫等の大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸9 : 濃硫酸1のエドマン氏液を加え1分間湯煎) を施す

5) 再び水酢酸を加えて水洗処理

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉〔1973〕および中村〔1980〕をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村〔1974・1977〕を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

## C 結 果

### 【分類群】

出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉19、シダ植物胞子2形態の計45である。分析結果を第3表に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

#### 【樹木花粉】

モミ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、キハダ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、グミ属

#### 【樹木花粉と草本花粉を含むもの】

クワ科-イラクサ科、マメ科、ウコギ科

#### 【草本花粉】

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、タンポポ科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

#### 【シダ植物胞子】

単条溝胞子、三条溝胞子

### 【花粉群集の特徴】

#### SD19溝（Ⅱ期）

4層（試料1）では、ハンノキ属、シイ属、コナラ属コナラ亜属、クワ科-イラクサ科、イネ科、ヨモギ属等検出されたが、いずれも少量である。

#### SD68溝（Ⅲ期）

1層（試料2）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子が約15%を占める。草本花粉ではヨモギ属が高率に出現し、次いでイネ科が多く、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ソバ属等が低率に伴われる。樹木花粉ではブナ属が低率に出現する。

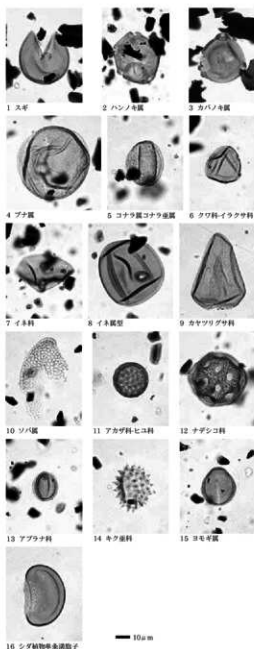
#### SD176溝（Ⅱ期）

5層（試料4）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子が約20%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、次いでヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、キク亜科、

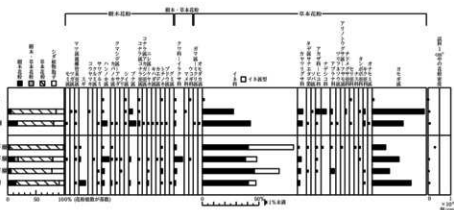


分類群	学名	SD19 SD48 SD76 SD133 SD139 SD174 SD183							
		4期	1期	5期	6期	7期	8期	9期	
<b>Achard pollen</b>	類本花粉								
<i>Alis</i>	オヒメ属			1		2			
<i>Yago</i>	ツバ属		1						
<i>Ficus vulpina</i> <i>Haplodes</i>	マツノ科植物花粉属		1	2	1	1		1	
<i>Cycas japonica</i>	カマノ木属				2	2		21	
<i>Isotriaele verticillata</i>	コウヤマキ属		1						
<i>Juglans</i>	ナツメ属					1			
<i>Passerina stipitata</i>	ツバグミ属						1	1	
<i>Alis</i>	オヒメノ木属		1	2	17	1	10	5	
<i>Ardis</i>	カマノ木属				3	1	2	4	
<i>Cycas thurii</i> <i>japonica</i>	ツバグミ属ツバグミ						1	3	
<i>Gonocarpus</i>	クワ						1	1	
<i>Gonocarpus</i>	クワ								
<i>Quercus</i>	クワ		3	2	1				
<i>Fagus</i>	ブナ属			11	22		4	5	
<i>Quercus vulgaris</i> <i>Lycobalanus</i>	コナラ属コナラ属		1	2	5		1	2	
<i>Quercus vulgaris</i> <i>Cyathobalanus</i>	コナラ属アカシメ属								
<i>Ulmus glaberrimus</i>	ユズリハノキ						1	1	
<i>Phellodendron</i>	キハダ属								
<i>Acer</i>	カエデ属						1	2	
<i>Azadirachta indica</i>	シロバナ		1	1	1	1	4	1	
<i>Vitis</i>	ブドウ属				1				
<i>Elaeagnus</i>	ザン属							1	
<b>Achard - Nonachard pollen</b>	類本・非本花粉								
<i>Maianthemum</i>	アザミ科イラクサ科		2	3	5	7	15	5	
<i>Leguminosae</i>	マメ科			1					
<i>Adiantum</i>	アザミ科		1				2		
<b>Nonachard pollen</b>	非本花粉								
<i>Typha latifolia</i>	カマノ木(イラクサ)属				1				
<i>Sagittaria</i>	オヒメノ木属							1	
<i>Quercus</i>	イヌノ木		5	32	145	142	91	99	
<i>Urtica</i> <i>typo</i>	イラクサ科					1	140	24	
<i>Cyperus</i>	カマノ木(イラクサ)科				15	13	2	5	
<i>Polypodium</i> <i>and</i> <i>Antrodia</i>	アザミ科オウゴン科					1	1	1	
<i>Fragaria</i>	ソバ				1				
<i>Chenopodiaceae</i> <i>Nonachard</i>	アカザ科ヒユ科		13	1	3	1	2		
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科						15	1	
<i>Cucurbit</i>	アズキノ科						5	2	
<i>Asplenium</i>	アザミ科ソバ						2	1	
<i>Asteraceae</i> <i>Muticobalanus</i>	アキノノボク属ツバグミ					1			
<i>Hydrocotyle</i>	ナメタゲ草科				4				
<i>Agrostis</i>	アザミ科		1						
<i>Silene</i>	ナメタゲ草科						2		
<i>Lactuca</i>	アキノノボク科						3	1	
<i>Asteraceae</i>	アキノノボク科						5	1	
<i>Asteraceae</i>	アキノノボク科							2	
<i>Asteraceae</i>	アキノノボク科							2	
<i>Asteraceae</i>	アキノノボク科							124	
<b>Few spore</b>	シダ植物花粉								
<i>Monolete type spore</i>	単溝植物花粉		40	48	71		39	43	
<i>Tetrate type spore</i>	多溝植物花粉		1	8	10	3	22	17	
<b>Achard pollen</b>	類本花粉		6	20	69	6	36	12	
<b>Achard - Nonachard pollen</b>	類本・非本花粉		3	4	5	7	20	5	
<b>Nonachard pollen</b>	非本花粉		15	339	277	337	183	196	
<b>Total pollen</b>	花粉総数		24	374	351	380	239	210	
<b>Pollen frequency of tax</b>	識別 tax 中の花粉頻度		1.0	5.1	6.8	3.0	3.5	2.1	
<b>Few spore</b>	シダ植物花粉								
<i>Urtica</i>	イラクサ科		3	11	8	2	5	2	
<i>Few spore</i>	シダ植物花粉		41	55	51	3	51	50	
<b>Chlorid fungus</b>	菌類植物		(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	

第3表 花粉分析・寄生虫卵分析結果



第25図 花粉・胞子の顕微鏡写真



第26図 花粉ダイアグラム

オモダカ属等が低率に伴われる。樹木花粉ではブナ属、ハンノキ属が低率に出現する。

### SE153 井戸 (Ⅲ期・12世紀)

最下層(試料5)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が非常に高い。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が卓越し、ヨモギ属等が伴われる。樹木花粉はほとんど出現せず、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が低率に出現する。

### SE159 井戸 (Ⅲ~Ⅳ期・12~15世紀)

最下層(試料6)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子が約20%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を多く含む)が優勢で、次いでヨモギ属が多く、カヤツリグサ科等が低率に伴われる。また、樹木花粉のハンノキ属、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が低率に出現する。

### SE174 井戸 (Ⅳ期・15世紀)

最下層(試料7)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子が約20%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を含む)が優勢で、次いでヨモギ属が多く、アブラナ科、カヤツリグサ科等が低率に伴われる。また、樹木花粉のハンノキ属、トチノキ、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が低率に出現する。

### SE183 井戸 (Ⅲ期・12世紀)

9層(試料8)では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、シダ植物胞子が約10%を占める。草本花粉ではイネ科(イネ属型を多く含む)が優勢で、次いでヨモギ属が多く、カヤツリグサ科が低率に伴われる。樹木花粉ではスギ、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ、カバノキ属が低率に出現する。

## D 花粉分析から推定される植生と環境

平安時代(9世紀~10世紀)とされるSD176溝の埋土の堆積当時は、イネ科やヨモギ属等の草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられる。また、少量ながらイネ属型やオモダカ属が認められることから、調査範囲周辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。周囲に森林は少なく、周辺地域にブナ属やハンノキ属等の落葉広葉樹林が分布していたと推定される。

SD19溝の埋土では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難である。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉等の有機質遺体が分解されたこと等が考えられる。

鎌倉~室町時代(12世紀~15世紀)とされる井戸の埋土の堆積当時は、周辺で集約的な稲作が行われていたと考えられ、部分的にアブラナ科等が栽培されていた可能性も考えられる。また、調査範囲周辺はイネ科やヨモギ属等の草本類が生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺地域にはハンノキ属やブナ属等の落葉広葉樹およびスギ等の針葉樹が分布していたと推定される。なお、ハンノキ属については水田の畦畔や水路周辺等に植えられていた可能性も考えられる。

### 3 寄生虫卵分析

人や動物等に寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いて、トイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

#### A 試 料

分析試料は、鎌倉・室町時代とされるSE153井戸、SE159井戸、SE174井戸、SE183井戸の埋土から採取された計4点である。

#### B 方 法

寄生虫卵の分離抽出は、微化石分析法を基本にして、以下の手順で行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25%フッ化水素酸を加えて30分静置(2~3度混和)
- 5) 遠心分離(1500rpm, 2分間)による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

#### C 結果および考察

分析の結果、寄生虫卵および明らかな消化残査は、いずれの試料からも検出されなかった。寄生虫卵と同様の残査を示す花粉は多く検出されていることから、寄生虫卵のみが消失したことは考えにくい。したがって、分析試料には当初から寄生虫卵が含まれていなかったか、ごくわずかであった可能性が考えられる。

### 4 樹種同定

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉等の微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

#### A 試 料

試料は、平安後期~室町時代とされる遺構から出土した櫛、箸、鎌?、曲物、杭等の木製品9点である。

## B 方 法

木材の横断面（木口と同義）、放射断面（縦目）、接線断面（板目）の基本三断面について、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## C 結 果

第4表に結果を、第27図に主要な分類群の顕微鏡写真を示し、以下に同定の根拠となった特徴を記す。

### スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

### サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞がみられる。放射断面：放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型からスギ型を示すものもあり、1分野に2個存在するものがほとんどである。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密であり、ヒノキより軽軟でもろいが広く用いられる。

### コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材等に用いられる。

### ブナ科(クリ?) Fagaceae

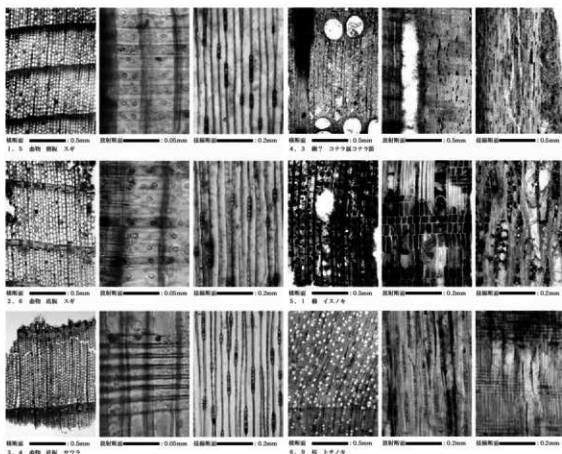
横断面：部分的ではあるがやや小型の道管と火炎状に配列する小道管が見られた。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。以上の形質よりブナ科のクリと考えられるが、切片が小片で広範囲の観察が困難であり、シイ属やコナラ属コナラ節の可能性もあることから、ブナ科(クリ?)の同定にとどめた。

### イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科

横断面：小型でやや角張った道管がほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

試料番号	通称	樹位	採取部位	備考	結果 (学名/和名)
1	SR159	10	葉	20050719 庭下層	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc. イスノキ
2	SR158	17	葉	庭下層	<i>Crymteria japonica</i> D.Don スギ
3	SR167	7	葉?	20050608 庭下層	<i>Quercus sess. Prinos</i> コナラ属コナラ属
4	SR155	13	幹物	底板 20050711 庭下層	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl. サワラ
5	SR155	13	幹物	底板 20050713 庭下層	<i>Crymteria japonica</i> D.Don スギ
6	SR155	13	幹物	底板 20050713 庭下層	<i>Crymteria japonica</i> D.Don スギ
7	SR155	13	幹物	結露部 20050713 庭下層	樹皮
8	SR154	13	根	庭下層	Fagaceae プナ科(クワ?)
9	SR61	9	根	20050609 庭下層	<i>Aesculus turbinata</i> Blume トチノキ

第4表 樹種同定結果



第27図 出土木製品切片の顕微鏡写真

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭等に用いられる。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科

横断面：小型でやや角張った道管が単独ないし放射方向に2～数个複合して密に散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は小型で密に分布する。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、層階的に規則正しく配列する。以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが、耐朽性、保存性がなく、容器等に用いられる。

## D 考 察

分析の結果、鎌倉時代～室町時代の遺構から出土した木製品は、スギ3点、サワラ1点、コナラ属コナラ節1点、ブナ科(クリ?)1点、イスノキ1点、トチノキ1点、樹皮1点と同定された。スギは箸や曲物(底板、側板)、サワラは曲物の底板、コナラ属コナラ節は蹴?、イスノキは櫛、トチノキとブナ科(クリ?)は杭、樹皮は曲物の結束部に使用されている。

スギは、温帯に広く分布する常緑針葉樹であり、湿潤で多雨や積雪を好み周辺地域で多い樹木である。材質は木理通直で大きな材が取れる良材であり、加工工作が容易なことから、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。サワラも、温帯に分布する常緑針葉樹である。軽軟でややもろいため、建築材よりも器具類に多く用いられ、特に水質に強いので桶や曲物に重用される。コナラ属コナラ節は、温帯に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラ等の冷温帯落葉紅葉樹林の主要構成要素が含まれる。トチノキは温帯の谷治い等の湿潤地に分布する落葉高木である。これらの樹種は、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

イスノキは、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。材質は耐朽性に優れ、細かい細工にも良好で、器具類にも適し、遺跡では櫛材として散見される。イスノキの分布は関東以西であることから、本遺跡の櫛については流通によりもたらされたと考えられる。

## 引用文献

- 金子清俊・谷口博一 1987 「線形動物・扁形動物」『動物学, 新版臨床検査講座』8 医歯薬出版
- 金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—』奈良国立文化財研究所
- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店
- 金原正明 1999 「寄生虫」『考古学と自然科学』2 同成社
- 佐伯浩・原田浩 1985 「針葉樹材の細胞、広葉樹材の細胞」木材の構造, 文永堂出版
- 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集
- 島地謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社
- 中村 純 1973 『花粉分析』古今書院
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』10
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」『考古学と自然科学』17
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第1号』植生史研究会
- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard 1992 Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19

## 第七章 ま と め

### 1 SE183井戸一括出土遺物の編年の検討—至徳寺編年との比較—

SE183からは一括性の高い資料が得られた。ここでは、同じ高田平野内にあり、既に中世土師器皿を主軸に編年の組まれている至徳寺遺跡との比較を通じて、本遺構の編年の位置付けを考えてみたい。

至徳寺は、守護所である至徳館に隣接して建てられた寺で、至徳年間(1384～87)の創建と推定されている。開祖は越後守護上杉憲朝の孫、僧可である。僧可は、建長寺で修行、約10年間の中国留学の後、建長寺や円覚寺の住職となる。父憲朝の菩提を弔うため至徳寺をひらいたという。その後、守護房定(1449～1494)は、手厚い保護を加えたので、七堂伽藍が整い、長松院・最勝院という塔頭ができた。文明十八(1486)年、東国歴遊をしていた常光院菟恵が訪れ長松院の貞操軒で房定の厚遇を受けている。長享二(1488)年には相国寺の僧万里集九が来越し、「越後之洲有至徳、雲門、安国三大刹」(『梅花無尽蔵』)と評した。明応八(1499)年には、將軍足利義澄に天下十刹に列せられる等、高い寺格を有している。

当地は発掘調査が行われ〔小島1983・1994〕、高台内に「至徳廿内」と墨書されている天目茶碗が出土したこと等から、至徳館ないしは至徳寺に比定されている。至徳寺遺跡は11世紀後半～13世紀前半と15世紀に盛期を迎えることが判明しており、また、その調査成果の整理の中で遺構ごとの中世土師器の変遷とそれに伴う陶磁器類の様相が示されている〔笹澤・水澤2001〕。さらに水澤幸一氏は、至徳寺遺跡の編年観に越後各地の出土様相を加えて中世全期を貫通した中世土師器の編年を提示している〔水澤2005〕。

先述のように用言寺遺跡SE183井戸一括資料は、「①遺存率が高い。②土師器皿の色調や混入物が共通している。③土師器皿のほとんどにスガが付着する。④土師器はすべてロクロ成形でつくね技法の製品はみられない。⑤白磁は山本C期の組み合わせで珠洲焼や青磁は共存していない。」ことから、極めて同時性の高い資料といえる。

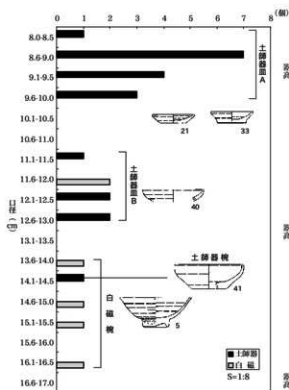
まず、出土資料の口径(第28図)に注目してみる。土師器は9cm前後(土師器皿A)と12～13cm前後(土師器皿B)、14cm前後(土師器碗)にまとまりがみられる。一方、白磁は皿を含む12cm前後が土師器皿Bと重複するもの、主体は14～16cm前後であり、土師器皿と白磁碗の用途が異なっていたと想定することも可能である。次に口径・器高比(第29図)をみる。土師器Bは全容を復元できる資料がないため、計測できなかった。土師器碗および白磁碗と土師器皿Aの分布域は明確に異なっている。土師器皿Aの器高は2cm前後に集中している。この傾向は至徳寺のSK512上層ないしはSK493の資料に類似する。口径はSK512上層とSE183は9cm前後を示しているのに対し、SK493段階では8cm前後と縮小化している。

上記の2つの図から、法量により中世土師器は皿A・皿B・碗の三種に分けられることが分かった。器形に注目してみる(第30図)と、皿Aには口縁が直口するタイプ(皿A-a)と口縁部下を強く撫でるタイプ(皿A-b)と二種に分類できる。皿A-b類と皿Bは至徳寺SK493に繋がる系譜である。また、柱状高台皿も認められる。本遺構の柱状高台皿は高台部が厚手でやや内傾しながら立ち上がる形状で、北陸で11世紀末から12世紀に典型的に見られる形状〔八峠2001〕である。

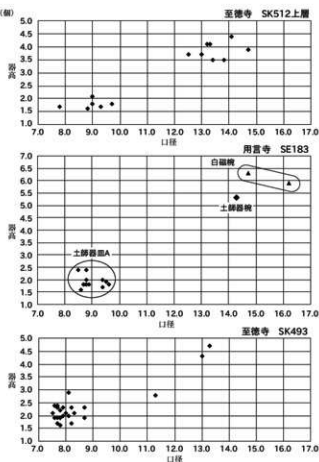
本組成にはつくね技法の土師器皿は認められず、基本的にこの段階に存在しないのではないかと考えられる。水澤氏が指摘するように前段階の至徳寺SK511に認められるつくね皿は「例外的」な事例であり、定着するのは至徳寺SK53・28・38段階（12世紀後半）からという評価〔水澤・笹澤2003〕は支持できる。

用言寺SE183の一括資料は、土師器法量、白磁のみとまり（山本C期）、珠洲及び青磁の欠落という要因の検討から12世紀第2四半期に位置付けられる。しかし、土師器の器種の多様化等、後段階のSK493との共通性も少なからず認められることから第3四半期に限りなく近づく可能性もある。よって、現段階では1150年前後の資料と位置付けたい。

先述のように至徳寺遺跡は府中の中心施設であった可能性が指摘される。いわゆる「上級」遺跡である。ここで用いられた道具類が広く高田平野に所在する中世遺跡の生活様式一般に適用できるかどうかは、今後突き詰めていかなければならない課題である。しかし、ここで分析対象としたSE183井戸の一括資料に限って述べるならば、至徳寺遺跡に劣らぬ白磁の量比を有し、かつ、まとまった量の土師器皿が出土していることから近似した陶磁器の組み合わせを呈し、比較対象として差し支えないと考える。しかしながら、調査範囲からは遺構内外に土師器皿および白磁を出土するもの、これだけまとまった様相を示す資料は他になく、現況では至徳寺遺跡に匹敵する機能ないしはランク（格式）に本遺跡を対照することはできないであろう。



第28図 SE183出土土師器・白磁の口径分布



第29図 土師器の口径／器高分布

(至徳寺SK512とSK493は〔水澤2005〕をもとに作成)





## 2 用言寺遺跡で使用された土器・陶磁器の組み合わせ (第31図)

用言寺遺跡では、前述のように平安時代(Ⅱ期)、中世前期(Ⅲ期)、中世後期(Ⅳ期)に画期が認められる。ここでは、各期ごとの土器・陶磁器類の組み合わせをみていき、流通についても若干触れたい。

Ⅱ期の供膳具は、内面黒色土器を含む土師器碗と須恵器の坏、黒笹90室式から大原2号室式の緑軸・灰軸陶器で構成されており、9世紀後半から10世紀初頭における上越地域の典型的な組成をなす。高級施軸陶器が定量出土し、該期の遺跡を評価する上で注目されるが、今年度調査では検出された遺構が溝のみであるため、居住域との関係は周辺調査の進展を待って結論づけたい。調理具には北陸系の長胴甕があり、貯蔵具には須恵器の横瓶および図示していないが長頸瓶・甕が加わる。なお、須恵器の産地については高田平野の東西丘陵にある窯(西頸城丘陵産・東頸城丘陵産)で生産されたものが搬入されており、佐渡小泊産は出土していない。包含層の須恵器の中には8世紀代に遡る製品も認められ、出土分布が調査範囲南方に漸増することから、調査範囲の南側に本期より古い遺構の存在の可能性が指摘できる。

Ⅱ期に属する遺構は洪水に見舞われ廃絶したと考えられるが、その後、150年程の断絶期間を経て調査範囲内でもっとも隆盛したⅢ期を迎える。Ⅲ期は土師器の形状を見る限り、12世紀前半には営まれていたと考えられ、遺構からは12世紀中頃から13世紀前半の遺物が多く出土した。Ⅲ期では古代的様相から中世的様相に大きく変容する。該期では12世紀から13世紀に至る土器・陶磁器組成の推移がおおまかに把握できる。詳細は第Ⅳ章で述べたので省くが、概略は「クロコ土師器+白磁」から「てづくね土師器+青磁・珠洲焼」への変化である。その新しい組み合わせは13世紀前半には完全に定着し、Ⅲ期が終焉を迎えるまで続く。遺構内出土の遺物は13世紀中葉以降まとまりを欠くが、包含層からは副部境に指頭圧痕を有するてづくね土師器皿(152・157)や、吉岡Ⅲ・Ⅳ期の珠洲焼片口鉢(132・134)が少量ながら出土しており、14世紀前半頃まで該期が存続していた可能性もあるが、その比率は小さい。Ⅲ期の調理具は、片口鉢が主体的に出土し、中世粉食文化[木村1990]の受容と理解できる。貯蔵具は、須恵器から珠洲焼の壺甕類に取って代わられる。また、近隣の仲田遺跡からも同時期に曲物の出土報告があり[加藤2003]、曲物が一般的に使用されていたと考えて差し支えない。陶磁器類と共に曲物も生活の道具として併用されていたという事例を重要視し、あえて本表に加えた。

ここで、瀬戸焼瓶に触れておこう。本品は、古瀬戸前期様式の瓶と考えられるが、古代灰軸陶器の長頸瓶ではないかとの意見もあり、評価は定まっていない。しかし、仮に古瀬戸前期様式であるならば、該期の遺跡を考える上で、極めて重要な視点を与える遺物となりうる。前期古瀬戸様式は鎌倉幕府と密接な関係にあり[藤澤1995]、上越周辺では至徳寺遺跡[水澤・笹澤2003]と横曽根Ⅲ遺跡に報告例[小島ほか1996]がある程度で、出土例は僅少である。横曽根遺跡は第Ⅱ章でも触れたが、横曽根保に比定される有力な遺跡であり、至徳寺遺跡は府中の中心施設である。したがって、古瀬戸であることが確定であるならば、それらの遺跡との対比研究も可能となろう。

さて、Ⅲ期の終焉については、14世紀代における遺物のまとまった資料が欠落しているため不明瞭である。また、Ⅳ期に含まれるであろう白磁碗(117)や青磁碗(111)の製作年代が14世紀後半に遡りうることから、遺物個々の年代観だけからでは必ずしもⅢ期とⅣ期の間に断絶が存在しないという可能性は払拭できないが、調査範囲における遺構および遺物のまとまり、さらには遺物の製作年代から廃棄に至るまでの使用期間の問題を考慮すると、14世紀中頃から約50年程度の断絶期があり、Ⅳ期は15世紀の前

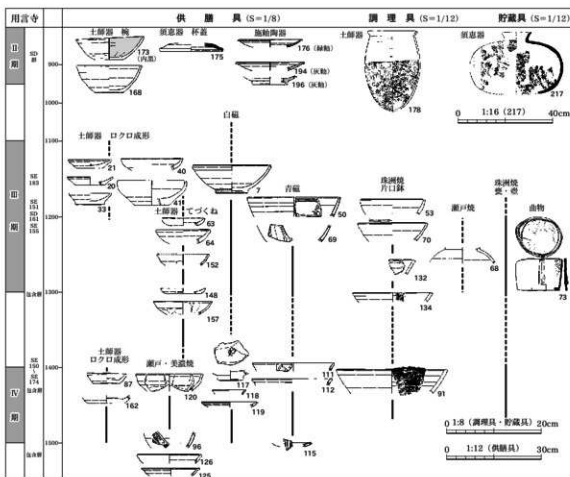
半には営まれていたとするのが妥当ではないだろうか。

Ⅳ期は、Ⅲ期ほどの遺物量はないものの、15世紀代の比較まとまった資料が出土している。供膳具では、土師器皿・白磁・青磁という前段階から引き続いた組み合わせに、瀬戸美濃焼古瀬戸後様式が加わる。土師器皿は前段階のてづくね技法から再びロクロ成形へと変容する。タールや煤が付着し灯明皿として転用されたものも認められ、油の普及との関係性が注目される。調理具と貯蔵具は引き続き、珠洲焼が担っている。

包含層中や近世の遺構中からは、15世紀末から16世紀前半に位置付けられる瀬戸美濃大窯様式の製品(96・125・126)や同時期の龍泉窯系青磁碗(115)が散見されているが、Ⅳ期の下限を示すのか、断絶期後に新しい画期を構築するのかは不明である。いずれにしても調査範囲において主体的な活動痕跡は認められず、二次的な堆積物中の遺物である可能性が高い。

ここで、各期における土器・陶磁器の様相から流通について考えてみたい。

Ⅱ期の平安後期には、律令体制が崩壊しつつある〔坂井1999〕もの、須恵器の一部供給体制は機能しており、在地的な土師器碗と東西頸城丘陵産の須恵器が搬入される。一方、土師器は信州の影響を強く受けた黒色土器と北陸の伝統的な技法を用いた長胴甕の存在が両地域の交差点である本調査位置の地域性を表している。また、上越地域には施釉陶器が多く運ばれ〔若林2004〕ており、本遺跡でもその一端を見るようである。まさに上越地域の典型例といえよう。



第31図 用器・陶磁器の組み合わせ

Ⅲ・Ⅳ期に至ると「物資の流通、とりわけ遠隔地流通を担う商業・運送業の成長」〔橋本1995〕が著しい時代となる。供膳具は在地系の土師器に加えて、中国および瀬戸美濃で占められ、調理具・貯蔵具は珠洲焼で独占される等、遠隔地の製品が多く運ばれるようになる。瀬戸美濃焼がどのようにして本遺跡まで運ばれてきたのかは必ずしも明確ではないが、中国・珠洲の製品は明らかに日本海流通によって運ばれたと考えられ、直江津および関川等の大小河川の内陸水運により高田平野の奥深くまで張り巡らされた流通網により搬入されたものと考えられる。

### 3 用言寺遺跡における中世の集落構成

用言寺遺跡で検出された中世の遺構は、一部の溝が他のE区まで延伸する以外、すべてA区で検出されている。中でもA区を西から東へ横断する用水路を境に遺構の分布が大きく異なる。この用水路は、地形の大きな変換点となっている。用水路を境に南北で20cmの高低差があり、北側がより低く、南側がより高くなっている。この境界は、字境にもなっている。北側が「越中田」、南側が「用言寺」とされ、越中田周辺は水田として利用されてきた。用言寺遺跡における中世の集落構成は、この境界が重要な意味をもたらしている。ここでは、用水路を境に北側をエリア1、南側をエリア2と呼ぶこととする(第32図)。

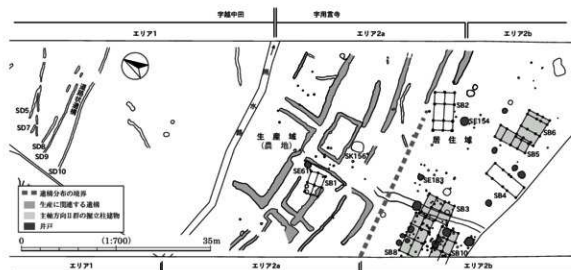
エリア1からは、溝8条が検出されたのみである。うち、SD9とSD10は、約3m(10尺)離れて並列しており、中世の道路状遺構の一般的な規模に近い。集落から離れて単独で存在することを勘案すれば、道路状遺構の側溝に相当すると考えるのが適当であろう。また、SD5・7・8も、これらと概ね平行関係にあり、道路状遺構が数度にわたり作り変えられた可能性がある。

エリア2は、遺構分布から大きく2つのエリアに細分することができる。エリア1に近い北側では方形に廻る浅い溝が、段丘崖に近い南側では掘立柱建物や井戸が偏って分布することが明らかになった。北側をエリア2a、南側をエリア2bと呼ぶこととした。

エリア2aからは、13世紀以降に形成された方形に廻る浅い溝が並んで検出された。方形に廻らない直線的な溝も検出されたが、規模(幅・深さ)や形状がよく似ており、相互の関連性を窺うことができる。溝の深度が浅いため、直線的なものも方形に廻る溝の一部が検出された結果ということができるかもしれない。また、溝の方位は、ほぼ東西南北を向いているうえ、用水路と平行する等高線と軸が一致しており、地形や方位を考慮したうえで構築された可能性が高いといえる。

これらの溝は、屋敷等を区画する規模の大きな溝とは形状を異にし、浅く幅広いほか、底面にしばしば凹凸がみられることが特徴的である。このような形状の遺構は、「堀田」と呼ばれる水田と共通しており、稲作に関する遺構の可能性が想定される。しかし、イネの珪酸体・花粉の出現率は一定量認められるものの、稲作を積極的に裏付けるほどの高率では検出されなかった。一方、同時期の井戸の分析結果からは周辺で集約的な稲作が行われていた可能性が高いと考えられ、居住域と稲作の生産域が隣接する状況が想定される。

方形に廻る溝の機能を考えるとき、エリア2aから建物や井戸等、居住に関する遺構はほとんど検出されていないことにも注意を払わなくてはならない。検出されたSB1・SE61・SK156は、いずれも12世紀に位置付けられる可能性が高く、溝が形成される以前の遺構と判断された。したがって、溝が構築された頃のエリア2aには、建物や井戸等、居住に関する遺構が皆無といえる。居住域が別個に設けられていることが明らかな状況を勘案すれば、方形に廻る浅い溝は、稲作との関係を断言することはできない



第32図 用言寺遺跡における中世の集落構成

でも「生産域」(農地)であった可能性がより高いものと評価できる。

エリア2bからは、掘立柱建物や井戸が多数検出されており、エリア2aとは極めて対照的な状況呈する。エリア2aの南端にあたるSD163・SD131を境に、ピットが出現しはじめる。最も北端に出現する建物がSB2であるが、多くはSB3・8・10周辺とSB4・5・6周辺に集中的に検出された。これらの掘立柱建物は、主軸方向により3群に分類することができた(第13図)が、最も多くの建物が属するII群(西偏 $10^{\circ}\sim 20^{\circ}$ )は、中世前期に位置付けられる可能性が高い。検出された掘立柱建物には、側柱(1間 $\times$ 4間)と総柱(2間 $\times$ 3間を基本とする)の構造があるが、いずれも床面積が $20\text{m}^2\sim 30\text{m}^2$ ほどと大型建物は検出されていない。また、似た構造の建物が隣接する傾向(SB4とSB5、SB8とSB10)を窺えることから、あるいは場の使い分けがあったのかもしれない。

建物と隣接するように検出される井戸は、出土遺物の年代等から12～15世紀の各時期に築かれたことがわかった。これら、時期を問わず、すべて基盤層であり透水層である粗砂層(VI層)にまで達するように掘り込まれていた。また、第四章1B1)で記述したとおり、埋め戻し時に廃棄儀礼が行われたとみられ、実際に井戸として機能したものと考えられる。これらは、切り合い関係の把握や出土遺物の年代から、並存したものとは考えられない。明らかになった井戸の年代観から、直径が小さくU字形の断面形を呈するものほど古く、開口部が広く階段状を呈するものほど新しい時期に位置付けられる傾向が窺えた。直径が小さいU字形の井戸が過半数を占めることから、中世前期に遺跡の最盛期を迎えた可能性を指摘できる。また、掘立柱建物と井戸の検出位置は重複しており、また両者をセット関係で捉えられるケース(SB1とSE61、SB2とSE154)を認めることができた。

以上のように、用言寺遺跡の中世集落は、中世前期に最盛期があったことが窺える。特に、13世紀には、「生産域」(エリア2a)と「居住域」(エリア2b)に明確に区分けされていた可能性が高く、集落が地形や方位を意識して計画的に構築されていたものと考えられた。両者を一体的かつ具体的に把握できる状況が確認できたことは、重要な成果といえることができる。

さらに詳細な集落構成を考える場合、まず12～15世紀に構築された多数の遺構を、詳細な時期ごとに解体する必要がある。今回の調査においては、概ねの段階差を把握することはできたが、詳細な結論を導き出すことはできなかった。しかし、遺構の数と遺物からみた年代幅を考えれば、一時期には数棟の建

物と井戸からなる屋敷地と農地から構成される集落が築かれていたものと考えられる。少なくとも多くの建物が集中するような景観を想定することはできず、どちらかといえば中世前期に特徴的な「散村的」な景観〔坂井1997〕を想定することができよう。用言寺遺跡では、12～15世紀にかけての遺物が出土しているが12～13世紀の遺物がより多く、遺跡の中心年代が中世前期にあることを集落構成からも窺い知ることができる。

一方、中世後期に特徴的に出現する、建物群を区画する溝は認められず、複数の屋敷地がまとまるような状況〔坂井1997〕にはない。15世紀代の遺構・遺物も認められるが、この時期に転換する集村化の流れを用言寺遺跡において読み取ることができなかった。しかし、中世後期の遺構は調査範囲南西側に偏在していることから、遺跡の中心は隣接地に広がっている可能性が高い。今後、隣接地の調査をとおして新たな所見を得られるものと考えられる。

このように遺構の分布状況からは、用言寺遺跡の中世集落が「散村的」な景観にあったことが想定されるが、遺跡の性格については必ずしも明らかでない。SE183から一括出土した白磁を見る限り、単純に一般的集落と評価することに課題が残ろう。字名が「用言寺」であり、次年度以降の調査結果を踏まえて、宗教遺跡との関係性についても検討を重ねる必要がある。

## 要 約

- 1 用言寺遺跡は、新潟県上越市大字今泉字用言寺586番地ほかに所在する。矢代川左岸の段丘上（高田面）、標高約19mに立地する。
- 2 調査は北陸新幹線の建設に伴い、平成17年度に実施した。調査面積は8,890m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、上層・中層・下層の3面にわたって遺跡が存在することが明らかになった。上層からは古代・中世の遺構・遺物が、中層からは古墳時代の遺構・遺物が、下層からは縄文時代後期の遺物が検出された。
- 4 上層で検出された遺構は、切り合い関係の把握から古代（Ⅱ期）、中世（Ⅲ・Ⅳ期）、近世（Ⅴ期）に区分することができた。
- 5 古代（Ⅱ期）の遺構は、多数の溝が並列するように検出された。切り合い関係を把握し、主軸方向を整理する過程から、これらが概ね3時期に掘削されていることが明らかになった。また、溝の覆土上層には、3時期とも細砂が厚く堆積していることから、洪水により埋積したものとみられる。検出された多数の溝は、洪水で埋積するたびに溝を掘削した結果を反映しているものと考えられた。なお、覆土の最上層から9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる土師器（椀・長胴甕）が、ほぼ完形の状態で出土することがあった。この出土状況は、溝の埋没年代を反映するとともに、土地を鎮めるための祭祀行為を意味する可能性がある。
- 6 中世の遺構は、掘立柱建物8棟、井戸18基、土坑13基、溝32条等が検出された。これらは12世紀～15世紀に位置付けられるが、切り合い関係の把握や出土物の年代観から、大きく中世前期（12～13世紀・Ⅲ期）と中世後期（15世紀・Ⅳ期）に区分することができた。なお、14世紀代資料はほとんど認められず、前期と後期の間に空白期間が存在した可能性がある。
- 7 中世の集落は、大きく生産域と居住域に区分される。遺跡の最盛期とみられる13世紀頃には、北側に生産域、南側に居住域が配置されていたものと想定された。居住域は、数棟の掘立柱建物・井戸から構成されるものとみられ、散碎的な景観を復元することができる。
- 8 中世の井戸においては、遺物の出土状況や上層の堆積状況から、埋め戻し時に祭祀が行われたことが想定された。特に注目されるSE183においては、白磁6個体と土師器皿34個体以上がまとまって出土しており、埋め戻し祭祀が行われた可能性が極めて高い。他所で意図的に割られた白磁や土師器が、一括して投げ込まれており、祭祀のありようを考える上で注目される。
- 9 SE183から一括出土した白磁は、残存状況が良好な優品である。これに在産の土師器皿が多数伴い、混入とみられる資料は存在しなかった。12世紀代中ごろの一括性の高い資料とみられ、該期の土器・陶磁器編年を考える上で、重要な指標になるものと考えられる。
- 10 古墳時代（Ⅰ期）の遺構は、前期の溝と後期の溝がそれぞれ1条検出されたのみである。周辺に他の遺構は認められず、遺物分布も極めて散漫な状況にあった。
- 11 確認調査において縄文時代後期中葉の土器1個体が出土したが、本発掘調査では該期の遺物は出土しなかった。

## 引用・参考文献

- 相沢 央 2004 『第三節 頸城郡の人々と暮らし』『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』上越市
- 荒川隆史・加藤 学 1999 『上信越自動車道関係発掘調査報告書V 和泉A遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第93集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀<sup>ほか</sup> 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡I (A地区)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第58集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石川智紀<sup>ほか</sup> 1998 『上信越自動車道関係発掘調査報告書III 旧得法寺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第86集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 稲荷弘信<sup>ほか</sup> 1986 『上越市旧高田市地区』『新潟県の地名』日本歴史地名大系第15巻 平凡社
- 井上説夫・奥田直梁<sup>ほか</sup> 1966 『御館跡緊急調査経過報告』新潟県教育委員会
- 岩本正二 2005 『草戸千軒町遺跡の井戸』『考古学ジャーナル』537 ニュー・サイエンス社
- 上田秀夫 1982 『14～16世紀の青磁碗の分類』『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁研究会
- 大塚厚順 1973 『永正年間の新井地方の真宗』『新井市史』上巻 新井市史編纂委員会編 新井市
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 岡田茂弘<sup>ほか</sup> 2000 『北国街道 関川関所跡』妙高高原町文化財調査報告書第11集 関川関所跡発掘調査会
- 岡本郁栄 1999 『新潟県の地形外観』『新潟県の考古学』高志書院
- 河西克造 2003 『城館概説—上越地域の中世城郭—』『考古—中・近世資料—』上越市史叢書8 上越市
- 春日真実 2005 『越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に—』『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 加藤晋平 1973 『中世の石塔と城館址』上巻 新井市史編纂委員会編 新井市
- 加藤 学 2002 『第四章 遺構と遺物 2遺物 C石器 (6) まとめ 石材組成と石材環境』『大久保遺跡発掘調査報告書』中郷村埋蔵文化財調査報告書第13集 中郷村教育委員会
- 加藤 学<sup>ほか</sup> 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第128集 仲田遺跡』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
- 金子拓男 2003 『今泉館 (No.217)』『上越市史叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 金子拓男・戸根与八郎 2003 『御館跡』『上越市史叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 亀井 功 1991 『加賀街道の概説』『加賀街道 松本街道』新潟県歴史の道調査報告書第一集 新潟県教育委員会
- 木村忠夫 1990 『中世粉食文化の背景』『古代中世史論集』九州大学国史学研究室編 吉川弘文館
- 小池義人<sup>ほか</sup> 1994 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 細池遺跡・寺道上遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第59集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島幸雄 1983 『伝至徳寺跡発掘調査報告書 越後府中における中世遺跡の調査』上越市教育委員会
- 小島幸雄<sup>ほか</sup> 1984 『本長者原伝 寺確認調査概要』上越市教育委員会
- 小島幸雄 1994 『伝至徳寺跡の調査』『日本歴史』556 吉川弘文館
- 小島幸雄<sup>ほか</sup> 1994 『横曽根1遺跡発掘調査報告書』上越市教育委員会
- 小島幸雄<sup>ほか</sup> 1996 『横曽根1遺跡ほか発掘調査報告書 (横曽根1遺跡・横曽根田遺跡・上押出遺跡)』上越市教育委員会
- 斎藤秀平編 1941 『中頸城郡誌』新潟県中頸城郡教育会
- 坂井秀弥<sup>ほか</sup> 1984 『第三章 今池遺跡の調査 4小結 B中世』『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1990 『越後における古代末、中世の土器様相と画期』『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』
- 坂井秀弥 1997 『中世集落の展開と城館の動向』『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 坂井秀弥 1999 『古代 総論』『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
- 笹澤正史・水澤幸一 2001 『伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半を中心として～』『上越市史研究』6 上越市
- 笹澤正史 2002 『上越地方最大の須臾器窯跡群—末野・日向窯跡群—』『三和村史 自然・考古編』三和村
- 笹澤正史 2003 『第5章 古代 第1節 時代概説』『上越市史 資料編2 考古』新潟県上越市



- 上越市教育委員会 1981 『上越市遺跡詳細分布調査報告書』
- 高田平原団体グループ 1962 「高田平原の沖積層について—高田平原の団体研究・そのⅣ—」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第7号 新潟大学教育学部高田分校
- 高田平原団体研究グループ 1965 「高田平原北部の第四系—高田平原の団体研究・そのⅤ—」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第9号 新潟大学教育学部高田分校
- 高田平原団体研究グループ 1981 「高田平原の第四系と形成史—新潟県の第四系・そのⅩⅣ—」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第25号 新潟大学教育学部高田分校
- 高田平野地盤沈下団体研究会 1973 「高田平野の浅層地下水—新潟県の第四系ⅩⅤⅡ—」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第18号 新潟大学教育学部高田分校
- 高野武男 2004 「古代の地形」『上越市史通史編1 自然・原始・古代』上越市
- 高橋 勉 1999 「頸城平野南部の集落」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
- 高橋照彦 1995 「輪軸陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 中世土器研究会編
- 田辺早苗 2001 「越後の塚相」『第14回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の井戸』北陸中世考古学研究会
- 鶴巻康志 1998 「寺町I遺跡の中世陶器」『上越市史研究』3 上越市
- 戸根与八郎 2003 「時代概説」『上越市史叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 新潟古砂丘研究グループ 1976 「新潟の砂丘—その研究史と問題点」『新潟大学理学部地質鉱物学教室研究報告』第4号 新潟大学理学部地質鉱物学教室
- 橋本久和 1995 「土器論から中世前期商業史への展望」『展望 考古学』考古学研究会
- 花ヶ前盛明 1986 「中世越後の歴史—武將と古城を探る—」新人物往来社
- 平川 南 1999 「古代地方都市論 多賀城とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集 都市における生活空間の史的研究 国立歴史民俗博物館
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇四』愛知県瀬戸市
- 藤澤良祐 1995 「中世陶器（古瀬戸）」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- 星野信明<sup>20)</sup> 1996 『磐越自動車道関係発掘調査報告書 沖ノ羽遺跡Ⅱ（B地区）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第80集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 水澤幸一 2003 「横曽根遺跡」『考古—中・近世資料—』上越市史叢書8 上越市
- 水澤幸一 2005a 「中世日本海域物流からみた地域性・境界性」『日本海域歴史大系 第三巻中世編』矢田俊文・工藤清泰編 清文堂
- 水澤幸一 2005b 「越後の中世土器」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 水澤幸一・笹澤正史 2003 「至徳寺遺跡」『上越市史叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 水澤幸一・鶴巻康志 2003 「至徳寺遺跡（伝至徳寺跡跡・至徳寺跡）」『上越市史叢書8 考古—中・近世資料—』上越市
- 水野和雄 2005 「越前城下町の井戸」『考古学ジャーナル』537 ニュー・サイエンス社
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 日本貿易陶磁学会
- 八峰 興 2001 「柱状高台寺」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』中世土器研究会
- 山下峰司 1995 「灰軸陶器・山茶碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 中世土器研究会編
- 山田英雄 1986 「国部制の成立・整備」『新潟県史 通史編1 原始・古代』新潟県
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 中世土器研究会編
- 山本信夫 2000 『太宰府糸紡跡ⅩⅤ—陶磁器分類編—』福岡県太宰府市教育委員会
- 山本幸俊 1991 「北国街道の概説」『北国街道 新潟県歴史の道調査報告書第二集 新潟県教育委員会
- 山本幸俊 1993 「北国街道Ⅱの概説」『北国街道 新潟県歴史の道調査報告書第五集 新潟県教育委員会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1994 『日本海域の土器・陶磁器 [中世編]』六興出版
- 西藤嘉章 1987 「西川島遺跡群における井戸祭祀」『西川島—能登における中世村落の発掘調査』石川県穴水町教育委員会
- 若林知美 2004 「新潟県出土の古代輪軸陶器」『新潟考古学談話会会報』28 新潟考古学談話会

観 察 表

据立柱建物 (1)

SB1

図版番号	8・9	グリッド	13L	桁行 (m)	2間 (4.23)	梁間 (m)	2間 (2.96)	床面積	13.55m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ	構造	柱材	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	非違 (m)	方位				N20° W	
56	横円	階段状	36	28	18.91	18.53	0.38	56-58	0.94	柱穴間隔				距離 (m)	
58	横円	U字状	32	24	18.84	18.59	0.25	58-240	1.2	249-247					1.1
65	円	箱状	30	26	18.86	18.66	0.2	240-247	1.68	65-249					2.3
69	円	箱状	26	24	18.86	18.73	0.13	247-238	1.94	249-58					1.5
231	円	U字状	28	26	18.92	18.65	0.27	238-65	1.36					切り合い関係	
238	円	U字状	30	26	18.81	18.59	0.22	65-231	1.08					SD233・SD332・SD75・SD209 (I期) < P239 (II期) < P238 P56<SK55 (I期) < SD38 (V期) P247・P240<SD37 (I期)	
240	円	U字状	20	18	18.8	18.62	0.18	231-69	1.92						
247	横円	U字状	24	20	18.77	18.57	0.2	69-56	1.6					出土遺物	
249	円	箱状	34	32	18.84	18.44	0.4	69-249	1.3					なし	

SB2

図版番号	14・15	グリッド	16J 15K 16K	桁行 (m)	3間 (7.56)	梁間 (m)	2間 (3.96)	床面積	29.94m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ~Ⅳ	構造	柱材	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	非違 (m)	方位				N31° W	
141	円	U字状	20	19	18.89	18.67	0.22	144-252	1.84	柱穴間隔				距離 (m)	
142	円	U字状	28	26	18.9	18.57	0.33	252-146	2.84	143-225					1.74
143	円	U字状	34	32	18.93	18.69	0.24	146-221	1.5	225-141					2.2
144	円	U字状	28	26	18.91	18.65	0.26	221-222	1.54	141-142					2.94
146	円	U字状	32	30	18.89	18.66	0.23	222-223	1.42	142-222					1.64
221	円	U字状	42	40	18.79	18.51	0.28	223-224	1.96	225-144					1.6
222	円	U字状	24	22	18.76	18.61	0.15	224-142	1.4					切り合い関係	
223	円	U字状	36	34	18.73	18.56	0.17	142-146	1.74						
224	円	平円状	40	38	18.79	18.63	0.16	224-251	1.4					SD128 (I期) <	
225	横円	U字状	32	24	18.92	18.74	0.18	251-141	1.64						
412	円	U字状	30	28	18.79	18.62	0.17	141-252	1.64					出土遺物	
252	円	U字状	40	36	18.91	18.75	0.16	251-143	2.06					なし	

SB3

図版番号	17・18	グリッド	14I 14J	桁行 (m)	3間 (5.92)	梁間 (m)	2間 (4.16)	床面積	24.63m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ~Ⅳ	構造	柱材	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	非違 (m)	方位				N18° W	
193	横円	U字状	10	8	18.89	18.75	0.14	193-200	1.8	柱穴間隔				距離 (m)	
194	円	U字状	18	18	18.89	18.61	0.28	200-199	2.6	194-282					1.8
195	円	U字状	20	19	18.94	18.63	0.31	199-198	2	282-198					1.7
196	横円	階段状	10	7	18.92	18.76	0.16	198-197	1.7	283-282					1.54
197	円	箱状	18	18	18.93	18.74	0.19	197-267	1.8	282-200					2.2
198	円	箱状	18	17	18.93	18.75	0.18	267-196	4					切り合い関係	
199	円	箱状	20	18	18.91	18.42	0.49	196-195	1.54						
200	円	箱状	18	18	18.85	18.7	0.15	195-194	1.52					SD184 (I期) <	
267	横円	U字状	30	26	18.91	18.65	0.26	194-193	1.74						
282	円	箱状	22	20	19	18.77	0.23	195-283	1.94					出土遺物	
283	円	箱状	18	16	19	18.76	0.24	283-197	1.6					なし	

SB4

図版番号	17・18	グリッド	15I 16I	桁行 (m)	4間 (7.6)	梁間 (m)	1間 (6.6)	床面積	50.16m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ~Ⅳ	構造	柱材	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	確認高 (m)	底面高 (m)	深さ (m)	柱穴間隔	非違 (m)	方位				ND°	
277	円	U字状	18	16	18.91	18.66	0.25	311-312	1.18					切り合い関係	
278	円	U字状	24	22	18.91	18.61	0.3	312-314	2.2					なし	
280	円	箱状	18	17	18.88	18.38	0.5	314-316	1					出土遺物	
281	円	U字状	18	18	18.86	18.63	0.23	316-317	1.88						
311	横円	U字状	34	30	18.87	18.6	0.27	317-321	2.14						
312	横円	箱状	24	16	18.89	18.71	0.18	321-277	1.84						
314	横円	U字状	28	26	18.91	18.73	0.18	277-278	1.06					なし	
316	円	U字状	30	26	18.92	18.75	0.17	278-280	1.7						
317	横円	U字状	40	30	18.86	18.64	0.22	280-281	1.9						
321	横円	U字状	26	22	18.88	18.6	0.28	281-311	2.3						

## 据立柱建物 (1)

## SB5

図版番号	22・23	グリッド	16I	16J	桁行(m)	4間(6.84)	梁間(m)	1間(2.68)	床面積	18.33m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ	構造	掘削	様方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	確認高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴間隔	非確(m)	方位	N31°W		距離(m)			
284	円	U字伏	26	24	18.91	18.68	0.23	318-324	1.04	柱穴間隔	距離(m)					
285	円	U字伏	28	28	18.89	18.67	0.22	324-285	1.9	342-341					1.28	
286	円	U字伏	18	16	18.9	18.61	0.29	285-343	1.24	341-318					2.16	
290	円	箱状	28	26	18.9	18.74	0.16	343-284	2.06	切り合い関係						
318	円	箱状	30	28	18.89	18.66	0.23	284-290	1.4	SB6との関係不明						
324	円	箱状	30	28	18.89	18.68	0.21	284-286	1.2							
341	円	箱状	28	26	18.86	18.66	0.2	286-285	2.06	出土遺物						
342	円	箱状	20	20	18.89	18.67	0.22	342-324	2.34							
343	円	箱状	28	26	18.89	18.75	0.14	286-342	1.9			60 (P318)				

## SB6

図版番号	22・23	グリッド	16I	17I	17J	桁行(m)	3間(5.92)	梁間(m)	3間(4.36)	床面積	25.81m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ~Ⅳ	構造	掘削	様方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	確認高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴間隔	非確(m)	方位	N11°W		距離(m)				
307	円	箱状	18	16	18.92	18.8	0.12	337-356	1.1	柱穴間隔	距離(m)						
319	円	箱状	28	26	18.9	18.6	0.3	356-355	1.3	319-320					2.2		
320	円	箱状	40	36	18.9	18.7	0.2	355-331	0.8	320-337					2.12		
331	円	箱状	26	26	18.9	18.72	0.18	331-332	1.82	切り合い関係							
332	楕円	箱状	40	34	18.86	18.62	0.24	332-408	0.68	SB5との関係不明		SD76 (日冊) <					
333	楕円	箱状	38	28	18.92	18.72	0.2	408-407	1.5								
334	円	箱状	24	22	18.94	18.77	0.17	407-320	1.08	出土遺物							
337	円	箱状	28	24	18.9	18.62	0.28	320-319	2.2								
351	円	箱状	26	24	18.96	18.75	0.21	319-360	1.68								
352	円	箱状	18	18	18.92	18.73	0.19	360-359	0.54								
355	円	箱状	30	28	18.9	18.72	0.18	359-333	1.1								
356	円	U字伏	22	22	18.9	18.76	0.14	333-334	0.74	なし							
359	円	箱状	48	46	18.91	18.65	0.26	334-351	1.26								
360	円	箱状	34	32	18.91	18.64	0.27	351-352	0.96								
407	円	弧状	32	30	18.89	18.62	0.27	352-307	1.56								
408	円	弧状	30	30	18.913	18.696	0.217	307-319	0.5								

## SB8

図版番号	17・19	グリッド	13I	13J	14J	桁行(m)	3間(8.0)	梁間(m)	2間(3.88)	床面積	31.04m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ~Ⅳ	構造	掘削	様方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	確認高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴間隔	非確(m)	方位	N16°W		距離(m)				
269	円	U字伏	20	20	18.87	18.68	0.19	271-272	2	柱穴間隔	距離(m)						
271	楕円	箱状	24	20	18.89	18.61	0.28	272-273	1.5	269-302					1.76		
272	楕円	U字伏	40	34	18.92	18.68	0.24	273-274	1.34	273-310					1.9		
273	楕円	U字伏	48	40	18.92	18.63	0.29	274-275	1.76	310-269					2.2		
274	円	階段状	46	44	18.93	18.54	0.39	275-310	1.7	切り合い関係							
275	円	箱状	50	44	18.93	18.62	0.31	310-271	1.58	SD139・SD184・SD181・SD172 (日冊) <							
302	円	U字伏	38	36	18.96	18.56	0.4	275-302	1.96	出土遺物							
310	円	U字伏	30	30	18.92	18.72	0.2	302-269	1.74	出土遺物							
410	円	弧状	32	30	18.85	18.704	0.146	269-410	2.8	なし							

## SB10

図版番号	17・19	グリッド	14I	桁行(m)	2間(4.64)以上	梁間(m)	2間(3.56)	床面積	16.52m <sup>2</sup>	時期	Ⅱ	構造	掘削	様方向	東西棟	
柱穴番号	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	確認高(m)	底面高(m)	深さ(m)	柱穴間隔	非確(m)	方位	N17°W		距離(m)			
288	円	箱状	34	30	18.93	18.49	0.44	327-288	1.76	柱穴間隔	距離(m)					
322	円	階段状	20	20	18.95	18.59	0.36	288-409	1.34	329-339					1.5	
323	円	階段状	26	26	18.92	18.56	0.36	409-322	2.4	288-339					2.1	
326	楕円	U字伏	22	18	18.95	18.51	0.44	322-339	1.24	326-327					2.3	
327	円	箱状	18	16	18.95	18.75	0.2	339-326	1.54	切り合い関係						
329	楕円	階段状	52	48	18.9	18.54	0.36	326-330	1.78	SD184 (日冊) <		P328 < P329 < S5180 (IV期)		P326 < P325		
330	円	U字伏	28	28	18.92	18.44	0.48	330-329	1.44							
339	円	箱状	38	34	18.94	18.56	0.38	329-323	1.08	出土遺物						
409	円	弧状	26	26	18.826	18.702	0.124	323-322	1.68	なし						





観察表

溝 (SD) (3)

案内番号	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ (m)	幅 (cm)	溝き (cm)	平面形	断面形	床土	方向と分數	時期	出土遺物	取り合い関係	
132	10	11	47	14M・15M・14L	東西15 南北 8.5	72	7	方形	弧状	単層	N4° W ~ N77° E I 群	Ⅲ	144 ・ 209	SD206 (V期) > SD75・SD176・SD209・SD161 (I期) < SD201 (I期) <	
136	10	-	-	15L		92	110	10	直線	弧状	単層	N69° E I 群	Ⅲ	-	SD229 (I期) <
163	12	13	47	12K・14K	東西10 南北5	100	27	L字	平円状	単層	N87° E I 群	Ⅲ	-	SD404 (I期) < SD75・SD161・SD176・SD182・SD222 (I期) <	
168	12	13	-	14I・14J・14K		22	100	18	直線	平円状	水平	N19° W I 群	Ⅲ	76・77 ・214	SD17・P17・P18・P19 (I期) > SD13・SD19・SD12・SD13・SD19・SD14 (I期) <
201	10	11	-	15M		4	41	5	直線	弧状	単層	N42° W II 群	Ⅲ	-	SD132 (I期) > SD176 (I期) <
202	6	7	-	15M		1.5	28	6	直線	弧状	単層	N14° W I 群	Ⅲ	-	SD176 (I期) <
251	12	13	47	14K		3	62	11	直線	弧状	単層	N82° E I 群	Ⅲ	90	-
12	5	5	46	10M・11M・ 11N・12N・ 12O・12P・12Q	東西 10 南北 3.5	52	13	直線	平円状	単層	N85° E ~N92° E	V	86・87 ・90 ・91 ・92	SD13 (V期) = S16・SD10・SK17・SD20 (Ⅲ・IV期) =	
13	5	5	-	12P・12O		9	150	5	直線	弧状	単層	N24° E	V	-	SD12 (V期) =
14	-	-	-	11N・11O・12O		11	40	8.3	直線	弧状	単層	N25° E	V	-	-
15	5	5	47	10N・10O・10P		32	40	10	直線	弧状	水平	N19° E	V	-	SD10・9 (I期) <
26	8	-	-	11M・12M		13	40	6	直線	弧状	単層	N74° E	V	183・ 227	SD27・SD33・SD34 (V期) = SD32 (I期) <
27	8	9	-	11L・11M・12M		7	22	3	直線・弧	弧状	単層	N86° E ~N15° W	V	-	SD26 (V期) = SD28 (I期) <
30	8	-	-	12M・13M		5.1	40	4.9	直線	弧状	単層	N82° E	V	-	-
32	8	-	-	12M・12L		4.5	32	5	直線	弧状	単層	N8° W	V	-	SD26 (V期) > SK54 (V期) <
33	8	9	-	12L・12M		8.5	68	6	直線	弧状	単層	N5° W	V	233	SD26 (V期) = SD28・SD29 (I期) <
34	8	-	-	12M		2	30	4	直線	弧状	単層	N9° W	V	-	SD26 (V期) =
38	8	9	-	12L		6	32	8	直線	弧状	単層	N80° E	V	-	SD75・SD232・SD233 (I期) < SK55 (Ⅲ・IV期) <
67	10	-	-	14L・15L・16L		25	40	11.4	直線	弧状	単層	N80° E	V	98	SD161・SD19・SD139・SD181・SD172 (I期) < SD68 (I期) <
106	10	-	-	13M・14M・ 15M		10.8	40	6.3	弧	弧状	単層	N84° E	V	-	SD22・209・21・75 (I期) > SD11・132 (I期) >

## 井戸 (SE)

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	総径(cm)	掘径(cm)	深さ(cm)	底面高(m)	形態	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係
61	8	9	40	13L10	円	U字状	130	115	168	17.22	素掘り	上:水平 下:斜め	Ⅲ	61・62	SD209(Ⅱ期) < SD62(Ⅲ期) <
150	17	20	40.41	1411・ 2・6・7	円	階段状	133	128	133	17.67	素掘り	レンズ状	Ⅳ	85・86・ 87・88	SE151(Ⅲ期) < <P152
151	17	20	40.41	1412・7	円	U字状	104	88	148	17.52	素掘り	斜め	Ⅲ	51・52・ 53・54・ 197・ 213	<SE150(Ⅴ期)
153	17	20	41	14J25	円	箱状	94	92	136	17.64	素掘り	レンズ状	Ⅲ	1・2	-
154	14	15	41	16J2・3	円	箱状	168	152	175	17.15	素掘り	レンズ状	Ⅳ	104・ 106	-
155	17	20	37.41	14119	円	階段状	176	164	232	17.62	素掘り	レンズ状	Ⅲ	69・70・ 71・72・ 73・74・ 222	SD133(Ⅱ期) <
157	22	24	42	16112	円	箱状	112	100	108	17.81 7	素掘り	レンズ状	Ⅲ	4	-
158	22	24	42	16112・ 17	円	箱状	136	128	197	17.03	素掘り	レンズ状	Ⅲ	101	-
159	22	24	42	16J22	円	U字状	116	96	137	17.53	素掘り	レンズ状	Ⅲ~Ⅳ	63・64・ 65・66・ 67	-
167	17	20	42.43	1426・9・ 13・14	円	階段状	180	160	193	17.07	素掘り	レンズ状	Ⅳ	92~95	SD181(Ⅱ期) < SD168(Ⅲ期) <
169	17	20	43.49	13314・ 15・19・20	円	階段状	105	100	126	17.74	素掘り	レンズ状	Ⅲ	56・ 215	SD139(Ⅱ期) <
170	17	20	43.49	13J20	円	U字状	85	80	146	17.54	素掘り	レンズ状	Ⅲ~Ⅳ	-	-
171	17	21	43.49	13J15	円	U字状	85	80	177	17.23	素掘り	レンズ状	Ⅲ~Ⅳ	-	SD139(Ⅱ期) <
173	17	21	43.44	14J11・16	円	U字状	130	115	196	17.04	素掘り	レンズ状	Ⅲ~Ⅳ	107・108	SD172(Ⅱ期) <
174	17	21	44	15J13	円	U字状	117	116	190	17.1	素掘り	水平	Ⅳ	89・ 90・91	-
180	17	21	44.45	14J3・8	円	箱状	168	152	145	17.55	素掘り	レンズ状	Ⅳ	78~84	P329 <
183	12	13	45	14J5・15J	円	U字状	120	104	181	17.19	素掘り	水平	Ⅲ	5~48	-
248	22	24	45	16J5・17J1	円	U字状	100	96	140	17.6	素掘り	水平	Ⅲ~Ⅳ	-	-

## 土坑 (SK)

報告番号	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	底面高(m)	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係
3	5	5	-	11R18	不整形	弧状	68	40	4	18.3	単層	Ⅲ~Ⅳ	-	SD2(Ⅱ期) <
4	5	5	-	10Q4	方形	弧状	76	60	21	16.5	単層	V	-	-
16	-	-	-	12O24・25	円	箱状	68	64	23	16.5	単層	V	-	-
17	5	5	-	12P23・ 23O3	方形	弧状	192	68	13	17.4	単層	Ⅲ~Ⅳ	-	SD13(Ⅴ期) >
54	8	-	-	12J2・3	楕円	弧状	112	52	21	16.8	水平	V	-	SD32(Ⅴ期) >
55	8	9	-	13L13・18	円	半円状	78	70	23	16.6	水平	Ⅲ	49	SK23(Ⅱ期) < SK6(Ⅲ期) <SK3<SK8<SK18(Ⅴ期)
57	8	-	-	11L5・12L1	楕円	弧状	100	44	14.3	18.7	単層	Ⅲ~Ⅳ	-	SD28(Ⅱ期) <
135	14	15	-	15L24	楕円	半円状	58	32	15	17.5	単層	Ⅲ~Ⅳ	-	SD172(Ⅱ期) < <SD131(Ⅲ期) <
137	14	-	-	16K25・ 17K21	楕円	半円状	96	86	12	17.8	水平	Ⅲ~Ⅳ	-	SD257(Ⅱ期) <
140	22	24	45	17J11・12	円	弧状	84	82	14	17.6	水平	Ⅲ~Ⅳ	-	-
148	17	21	-	15J16	円	箱状	155.2	136	36	15.4	水平	Ⅳ	-	-
149	17	21	40	14J3	円	箱状	104	92	69	18.31	レンズ状	Ⅳ	104	-
156	10	11	45	14L19・24	方形	箱状	232	198	42	14.8	水平	Ⅲ	59	SD161(Ⅱ期) <
175	12	13	46	13J5・14J1	円	箱状	98	96	32	15.8	水平	Ⅲ~Ⅳ	-	-
213	10	11	-	15M15	方形	弧状	102	100	12	17.7	単層	Ⅲ~Ⅳ	-	-
220	14	15	46	16K20・25	方形	弧状	148	112	13	17.6	単層	Ⅲ	57	SD257(Ⅱ期) <
250	22	24	46	18J17・18・ 21・22	方形	弧状	276	148	20	16.9	水平	Ⅲ~Ⅳ	-	-

観察表

土器・陶磁器観察表(1)

(制作時期) ロク口成器=Ⅱ, テヅク成器=下, 渡部町未定形器=両系  
(胎土) 石=石瓦, 白=白色胎土, 赤=赤色胎土, 黒=黒色胎土, 灰=灰胎土, 黄=黄色胎土, チョウ=チャート, 白=白胎土, 黒=黒胎土

報告番号	分類		通称	グリッド		順位	口径mm	高さmm	底径mm	色調		胎土	製作技術	消費燃料	備考				
	種別	器形		種別番号	大					小	外面					内面	注: ①=②=③=④		
1	白磁	碗(N-1型)	SE	153	14	J	25	2	-	-	灰白	灰白(厚織)	(外) 刷部 ツズリ	環形 藍色胎土	山本C期 福建系				
2	白磁	碗(N-7型?)	SE	153	14	J	25	8	-	-	白	白	灰白(厚織)	環形 藍色胎土	山本C期				
3	白磁	皿	P	291	17	I	11	1	99	-	灰白	灰白	灰白・石・白	口縁部面取		山本C期 広東系			
4	土師器	皿	SE	157	16	I	12		99	23	48	褐灰	灰黄褐	にぶい黄橙 白・長・雲・チヤ・礫	R		注: 刷部手 泥物も多く含む 土層から出土		
5	白磁	碗(V-3a型)	SE	183	14	J	5	9	147	63	48	灰白	灰白	灰白(細織・堅) 白	(内) 刷部 (外) 刷部 ツズリ	高台打ち 欠き	山本C期 福建系		
6	白磁	碗(II-1型)	SE	183	14	J	5	9	154	-	-	明オリ ープ灰	明オリ ープ灰	灰白→黄白 (軟質) 白	玉縁口縁 被熱		山本C期 広東系		
7	白磁	碗(IV-1a型)	SE	183	14	J	5	9	162	59	67	灰白	灰白	白(厚織) 白・黒	刷部が 口縁部ツズリ 玉縁	赤・黒・ 口縁 被熱	山本C期 福建系		
8	白磁	碗(II-3 or IV型)	SE	183	14	J	5	2	136	-	-	灰白	灰白	黄白(軟質) 白			山本C期 広東系		
9	白磁	碗(N-II-1a型)	SE	183	14	J	5	7.9	118	-	-	明オリ ープ灰	明オリ ープ灰	灰白(軟質) 灰白		被熱	山本C期 広東系		
10	白磁	碗(IV-1a型)	SE	183	14	J	5	7	120	-	-	灰オリ ープ	灰オリ ープ	灰白(厚織) 白・黒			山本C期 福建系		
11	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	9	98	-	-	灰黄褐	黒褐	浅黄橙 白・雲・礫	R		(内外) 燻	12C中燻	
12	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	8	96	-	-	灰黄褐	灰黄褐	にぶい黄橙 白・雲・礫	R		(内外) 燻	12C中燻	
13	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	4	94	17	38	黒	黒	にぶい黄橙 白・雲・礫	R		(内外) 燻	12C中燻	
14	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	2	86	16	50	灰黄褐	灰黄褐	橙 白・雲・礫	R+同系		(内) 燻	12C中燻	
15	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	8	85	24	44	黒褐	黒灰	浅黄橙 雲・チヤ・礫	R+同系			12C中燻	
16	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	7	88	18	50	褐灰	浅黄橙	浅黄橙 石・白・雲・礫	R			12C中燻	
17	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	9	88	20	44	灰黄	灰黄	黄白・長・雲・礫	R+同系			12C中燻	
18	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	2.8	95	19	52	にぶい 橙	にぶい 橙	にぶい 橙 石・白・長・雲・礫	R+同系			(内面) 燻	12C中燻
19	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	7	96	18	62	にぶい 橙	にぶい 橙	浅黄橙 石・白	R+同系			(口縁) 燻	12C中燻
20	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	7	94	18	62	褐灰	灰黄褐	灰黄褐 白・雲・礫	R+同系			(外) 燻	12C中燻
21	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	9	88	18	54	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	橙 白・長・雲・チヤ	R+同系				12C中燻
22	土師器	皿(A-a型)	SE	183	14	J	5	9	94	20	49	黒	黒	黄白・長・雲・礫	R+同系			(内外) 燻	12C中燻
23	土師器	皿(A-a型)	SE	183	14	J	5	8.9	87	18	43	黒	黒	にぶい黄橙 白・長・雲・礫	R+同系				12C中燻
24	土師器	皿(A-a型)	SE	183	14	J	5	7	89	18	52	黒褐	灰黄褐	黄白・長・雲・チヤ・礫	R+同系			(内外) 燻	12C中燻
25	土師器	皿	SE	183	14	J	5	8	-	-	51	橙	橙	黄白・長・雲・チヤ・礫	R+同系			(外) 燻	12C中燻
26	土師器	皿	SE	183	14	J	5	9	-	-	44	にぶい 黄橙	黒	にぶい黄橙 白・長・雲・礫	R+同系			(内外) 刷部 燻	12C中燻
27	土師器	皿	SE	183	15	J	1	8	-	-	56	橙	橙	黄白・長・雲・チヤ・礫	R+同系			(内外) 燻	12C中燻
28	土師器	皿	SE	183	14	J	5	2	-	-	52	灰黄褐	灰黄褐	黄白・長・雲・チヤ・礫	R+同系			(内外) 燻	12C中燻
29	土師器	皿	SE	183	14	J	5	2.8	-	-	56	橙	橙	橙 長・雲・チヤ	R+同系				12C中燻
30	土師器	皿	SE	183	14	J	5	7	-	-	44	にぶい 黄橙	灰黄褐	橙 白・長・雲・チヤ	R+同系			(内外) 燻	12C中燻
31	土師器	皿	SE	183	14	J	5	2.7	-	-	50	褐灰→ にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	橙 白・長・雲・チヤ	R+同系			(内外) 燻	12C中燻
32	土師器	皿	SE	183	14	J	5	2	-	-	54	にぶい 黄橙	浅黄橙	橙 白・長・雲・礫	R+同系				12C中燻
33	土師器	皿(A-b型)	SE	183	14	J	5	9	88	24	62	黒	黒	褐灰 白・長・雲・礫	R+同系			(全) 燻	12C中燻
34	土師器	柱状高台皿	SE	183	14	J	5	9	-	-	50	橙	橙	にぶい黄橙 白・長・雲・チヤ・礫	R+同系			(外) 燻	12C中燻
35	土師器	柱状高台皿	SE	183	14	J	5	9	-	-	47	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	にぶい黄橙 白・長・雲・礫	R+同系			(内外) 刷部 燻	12C中燻
36	土師器	皿	SE	183	14	J	5	7	130	-	-	橙	橙	にぶい黄橙 白・雲・礫	R			(外) 燻	12C中燻



土器・陶磁器観察表(2)

(※土器=石灰、白=白色粘土、赤=赤色粘土、黒=黒色粘土、灰=灰石、灰=灰石、チャート、チャート)

(製作痕跡) ロウカ成焼=瓦、テブコ成焼=土、窯跡(表裏両面)=両面、(片)=片焼跡、(裏)=裏焼跡

報告 番号	分 類		通機 種類	番号	グリッド		順位	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色調		胎土	製作痕跡	消費 燃料	備考	
	種別	器形			大	小					外面	内面					
37	土器器	皿	SE	183	15	J	1	8	112	-	-	橙	橙	黄 白・長・赤・チャ	瓦		12C中焼
38	土器器	皿	SE	183	14	J	5	2	122	-	-	浅黄橙	灰白	浅黄橙 白・長・赤・チャ	瓦		12C中焼
39	土器器	皿	SE	183	14	J	5	8	122	-	-	橙	橙	橙 白・赤・チャ	瓦	(外) 煤	12C中焼
40	土器器	皿	SE	183	14	J	5	2	130	-	-	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	にぶい・橙 白・長・赤・チャ	瓦	(外) 煤	12C中焼
41	土器器	碗	SE	183	14	J	5	7.8	143	53	72	にぶい 黄橙	灰黄陶	橙 白・長・赤・チャ	瓦+両面		12C中焼
42	土器器	碗	SE	183	14	J	5	-	-	-	70	黄橙	黄橙	黄橙色 石・白・長・赤	瓦+両面	(外) 煤	12C中焼
43	土器器	碗	SE	183	14	J	5	9	-	-	66	浅黄橙	黄灰	浅黄橙 白・赤・チャ	瓦+両面	(内外) 煤	12C中焼
44	土器器	碗	SE	183	14	J	5	9	-	-	62	にぶい 黄橙	明黄陶	にぶい 黄橙 白・長・赤・チャ	瓦+両面	(外) 煤	12C中焼
49	土器器	皿	SK	55	13	L	17	1	-	-	48	にぶい 黄橙	黒陶	浅黄橙 石・白・長	瓦+両面	片所 5 半能	12C第3四 半能
50	古磁	碗(1-4期)	SD	251	14	K	5	1	104	-	-	オリー ブ灰	灰白	刺花文			鎌倉末 11世紀中-後
51	土器器	柱状高白皿	SE	151	14	J	2	5	-	-	36	橙	橙	橙 石・白・長・赤	瓦		
52	土器器	皿	SE	151	14	J	2	1	-	-	48	橙	橙	橙 長・赤・チャ	瓦	(外) 煤	
53	珠洲焼	片口鉢	SE	151	14	J	7	3	199	-	-	灰	灰	灰 石・白・赤			古陶12~1 3期(12C末)
54	珠洲焼	片口鉢	SE	151	14	J	7	3	-	-	-	灰白	灰白	灰 石・赤			(内外) 煤
55	土器器	皿	P	191	14	J	1	1	-	-	52	橙	橙	橙 白・赤・長・赤	瓦+両面		11C後半~ 12C
56	土器器	柱状高白皿	SE	109	13	J	19	1	-	-	34	橙	橙	黄 白・赤・赤・赤	瓦+両面		11C後半~ 12C
57	土器器	柱状高白皿	SK	220	16	K	20	1	-	-	38	にぶい 黄橙	浅黄陶	浅黄橙 白・長・赤	瓦+両面		11C後半~ 12C
58	土器器	皿	SD	67	15	L	7	1	-	-	36	黄灰	黄灰	黄灰 黒・長・赤	瓦+両面		11C後半~ 12C
59	土器器	柱状高白皿	SK	156	14	L	24	3	-	-	34	灰黄陶	灰黄陶	にぶい・黄 橙 白・長・赤	瓦+両面		11C後半~ 12C
60	白磁	皿(V or VI期)	P (SB)	318 5)	16	J	18	1	-	-	34	明オリ ブ灰	明オリ ブ灰	灰白	内面赤黒・漆 灰(片所)に 赤・白	漆 灰(裏面) 黒色化	山本C期 黒磁産
61	土器器	皿	SE	61	13	L	10	4	98	-	-	にぶい 橙	橙	橙 白・長・赤	瓦		12C
63	土器器	皿	SE	159	16	J	21	4	88	-	-	浅黄橙	灰黄陶	にぶい・橙 石・白・長	T	(内) 煤	
64	土器器	皿	SE	159	16	J	21	6	114	-	-	灰黄陶	にぶい 橙	橙 白・長・赤・チャ	T+11線端 部面取り		
65	土器器	不明	SE	159	16	J	22	1	-	-	60	にぶい 黄橙	橙	橙 石・長・赤・チャ			崩滅
66	白磁	皿	SE	159	16	J	21	3	-	-	-	灰白	灰白	黄白(軟質)	(外面割部 下手) 無胎		
68	瀬戸焼	瓶子	SD	39	13	K	6	1	-	-	-	オリー ブ灰	灰白	灰白・緑	(外) 灰胎		古瀬戸前期 様式
69	古磁	碗(IIb期)	SE	155	14	J	19	5	-	-	-	オリー ブ	灰白(積層)	片方縁部弁 白			鎌倉末 13C初~中
70	珠洲焼	片口鉢	SE	155	14	J	19	19	210	-	-	灰	灰	黄灰 白・赤・赤・チャ	(11線端) 縁目透花文		古陶12~1 4期(12C末)
71	珠洲焼	片口鉢	SE	155	14	J	19	12	-	-	-	灰白	灰白	灰白・白・赤・赤	脚目12条 一単位以上	(内) 摩耗	
72	珠洲	片口鉢	SE	155	14	J	19	13	-	-	-	灰白	灰白	灰白・赤・赤	脚目18条 一単位以上		
75	土器器	皿	P	188	14	J	14	2	88	-	-	黄灰 にぶい 黄橙	浅黄橙	浅黄橙 石・長・赤・チャ	T+11線端 部面取り		13C
76	珠洲焼	片口鉢	SD	168	14	J	24	1	292	-	-	灰	灰白	灰白 石・白・黒・赤			古陶II~III 期(13C)
77	珠洲焼	雲母甕	SD	168	14	J	2	1	-	-	98	灰	灰	灰白・灰 白・黒・赤・チャ	(底面)へ クマズリ		
78	土器器	皿	SE	180	14	J	3	2	106	-	-	橙	浅黄陶	浅黄橙 石・白・長・赤	T		14C
79	土器器	皿	SE	180	14	J	3	10	-	-	56	にぶい 橙	黒	浅黄橙 石・白・赤・チャ	瓦+両面	(内) タール	15C
83	珠洲焼	雲	SE	180	14	J	3	2	-	-	-	黄灰	灰	灰 石・白・赤	タタキ		
85	珠洲焼	片口鉢	SE	150	14	J	7	1	-	-	-	灰	灰	灰白 石・赤・赤	脚目6条一 単位以上		



土器・陶磁器観察表 (4)

(製作用語) ロウロ成焼⇒B、テフク成焼⇒F、普通成焼⇒C、低温成焼⇒S、低温成焼⇒N、低温成焼⇒R、低温成焼⇒T、低温成焼⇒U、低温成焼⇒V、低温成焼⇒W、低温成焼⇒X、低温成焼⇒Y、低温成焼⇒Z、低温成焼⇒AA、低温成焼⇒AB、低温成焼⇒AC、低温成焼⇒AD、低温成焼⇒AE、低温成焼⇒AF、低温成焼⇒AG、低温成焼⇒AH、低温成焼⇒AI、低温成焼⇒AJ、低温成焼⇒AK、低温成焼⇒AL、低温成焼⇒AM、低温成焼⇒AN、低温成焼⇒AO、低温成焼⇒AP、低温成焼⇒AQ、低温成焼⇒AR、低温成焼⇒AS、低温成焼⇒AT、低温成焼⇒AU、低温成焼⇒AV、低温成焼⇒AW、低温成焼⇒AX、低温成焼⇒AY、低温成焼⇒AZ、低温成焼⇒BA、低温成焼⇒BB、低温成焼⇒BC、低温成焼⇒BD、低温成焼⇒BE、低温成焼⇒BF、低温成焼⇒BG、低温成焼⇒BH、低温成焼⇒BI、低温成焼⇒BJ、低温成焼⇒BK、低温成焼⇒BL、低温成焼⇒BM、低温成焼⇒BN、低温成焼⇒BO、低温成焼⇒BP、低温成焼⇒BQ、低温成焼⇒BR、低温成焼⇒BS、低温成焼⇒BT、低温成焼⇒BU、低温成焼⇒BV、低温成焼⇒BW、低温成焼⇒BX、低温成焼⇒BY、低温成焼⇒BZ、低温成焼⇒CA、低温成焼⇒CB、低温成焼⇒CC、低温成焼⇒CD、低温成焼⇒CE、低温成焼⇒CF、低温成焼⇒CG、低温成焼⇒CH、低温成焼⇒CI、低温成焼⇒CJ、低温成焼⇒CK、低温成焼⇒CL、低温成焼⇒CM、低温成焼⇒CN、低温成焼⇒CO、低温成焼⇒CP、低温成焼⇒CQ、低温成焼⇒CR、低温成焼⇒CS、低温成焼⇒CT、低温成焼⇒CU、低温成焼⇒CV、低温成焼⇒CW、低温成焼⇒CX、低温成焼⇒CY、低温成焼⇒CZ、低温成焼⇒DA、低温成焼⇒DB、低温成焼⇒DC、低温成焼⇒DD、低温成焼⇒DE、低温成焼⇒DF、低温成焼⇒DG、低温成焼⇒DH、低温成焼⇒DI、低温成焼⇒DJ、低温成焼⇒DK、低温成焼⇒DL、低温成焼⇒DM、低温成焼⇒DN、低温成焼⇒DO、低温成焼⇒DP、低温成焼⇒DQ、低温成焼⇒DR、低温成焼⇒DS、低温成焼⇒DT、低温成焼⇒DU、低温成焼⇒DV、低温成焼⇒DW、低温成焼⇒DX、低温成焼⇒DY、低温成焼⇒DZ、低温成焼⇒EA、低温成焼⇒EB、低温成焼⇒EC、低温成焼⇒ED、低温成焼⇒EE、低温成焼⇒EF、低温成焼⇒EG、低温成焼⇒EH、低温成焼⇒EI、低温成焼⇒EJ、低温成焼⇒EK、低温成焼⇒EL、低温成焼⇒EM、低温成焼⇒EN、低温成焼⇒EO、低温成焼⇒EP、低温成焼⇒EQ、低温成焼⇒ER、低温成焼⇒ES、低温成焼⇒ET、低温成焼⇒EU、低温成焼⇒EV、低温成焼⇒EW、低温成焼⇒EX、低温成焼⇒EY、低温成焼⇒EZ、低温成焼⇒FA、低温成焼⇒FB、低温成焼⇒FC、低温成焼⇒FD、低温成焼⇒FE、低温成焼⇒FF、低温成焼⇒FG、低温成焼⇒FH、低温成焼⇒FI、低温成焼⇒FJ、低温成焼⇒FK、低温成焼⇒FL、低温成焼⇒FM、低温成焼⇒FN、低温成焼⇒FO、低温成焼⇒FP、低温成焼⇒FQ、低温成焼⇒FR、低温成焼⇒FS、低温成焼⇒FT、低温成焼⇒FU、低温成焼⇒FV、低温成焼⇒FW、低温成焼⇒FX、低温成焼⇒FY、低温成焼⇒FZ、低温成焼⇒GA、低温成焼⇒GB、低温成焼⇒GC、低温成焼⇒GD、低温成焼⇒GE、低温成焼⇒GF、低温成焼⇒GG、低温成焼⇒GH、低温成焼⇒GI、低温成焼⇒GJ、低温成焼⇒GK、低温成焼⇒GL、低温成焼⇒GM、低温成焼⇒GN、低温成焼⇒GO、低温成焼⇒GP、低温成焼⇒GQ、低温成焼⇒GR、低温成焼⇒GS、低温成焼⇒GT、低温成焼⇒GU、低温成焼⇒GV、低温成焼⇒GW、低温成焼⇒GX、低温成焼⇒GY、低温成焼⇒GZ、低温成焼⇒HA、低温成焼⇒HB、低温成焼⇒HC、低温成焼⇒HD、低温成焼⇒HE、低温成焼⇒HF、低温成焼⇒HG、低温成焼⇒HH、低温成焼⇒HI、低温成焼⇒HJ、低温成焼⇒HK、低温成焼⇒HL、低温成焼⇒HM、低温成焼⇒HN、低温成焼⇒HO、低温成焼⇒HP、低温成焼⇒HQ、低温成焼⇒HR、低温成焼⇒HS、低温成焼⇒HT、低温成焼⇒HU、低温成焼⇒HV、低温成焼⇒HW、低温成焼⇒HX、低温成焼⇒HY、低温成焼⇒HZ、低温成焼⇒IA、低温成焼⇒IB、低温成焼⇒IC、低温成焼⇒ID、低温成焼⇒IE、低温成焼⇒IF、低温成焼⇒IG、低温成焼⇒IH、低温成焼⇒IJ、低温成焼⇒IK、低温成焼⇒IL、低温成焼⇒IM、低温成焼⇒IN、低温成焼⇒IO、低温成焼⇒IP、低温成焼⇒IQ、低温成焼⇒IR、低温成焼⇒IS、低温成焼⇒IT、低温成焼⇒IU、低温成焼⇒IV、低温成焼⇒IW、低温成焼⇒IX、低温成焼⇒IY、低温成焼⇒IZ、低温成焼⇒JA、低温成焼⇒JB、低温成焼⇒JC、低温成焼⇒JD、低温成焼⇒JE、低温成焼⇒JF、低温成焼⇒JG、低温成焼⇒JH、低温成焼⇒JI、低温成焼⇒JJ、低温成焼⇒JK、低温成焼⇒JL、低温成焼⇒JM、低温成焼⇒JN、低温成焼⇒JO、低温成焼⇒JP、低温成焼⇒JQ、低温成焼⇒JR、低温成焼⇒JS、低温成焼⇒JT、低温成焼⇒JU、低温成焼⇒JV、低温成焼⇒JW、低温成焼⇒JX、低温成焼⇒JY、低温成焼⇒JZ、低温成焼⇒KA、低温成焼⇒KB、低温成焼⇒KC、低温成焼⇒KD、低温成焼⇒KE、低温成焼⇒KF、低温成焼⇒KG、低温成焼⇒KH、低温成焼⇒KI、低温成焼⇒KJ、低温成焼⇒KK、低温成焼⇒KL、低温成焼⇒KM、低温成焼⇒KN、低温成焼⇒KO、低温成焼⇒KP、低温成焼⇒KQ、低温成焼⇒KR、低温成焼⇒KS、低温成焼⇒KT、低温成焼⇒KU、低温成焼⇒KV、低温成焼⇒KW、低温成焼⇒KX、低温成焼⇒KY、低温成焼⇒KZ、低温成焼⇒LA、低温成焼⇒LB、低温成焼⇒LC、低温成焼⇒LD、低温成焼⇒LE、低温成焼⇒LF、低温成焼⇒LG、低温成焼⇒LH、低温成焼⇒LI、低温成焼⇒LJ、低温成焼⇒LK、低温成焼⇒LL、低温成焼⇒LM、低温成焼⇒LN、低温成焼⇒LO、低温成焼⇒LP、低温成焼⇒LQ、低温成焼⇒LR、低温成焼⇒LS、低温成焼⇒LT、低温成焼⇒LU、低温成焼⇒LV、低温成焼⇒LW、低温成焼⇒LX、低温成焼⇒LY、低温成焼⇒LZ、低温成焼⇒MA、低温成焼⇒MB、低温成焼⇒MC、低温成焼⇒MD、低温成焼⇒ME、低温成焼⇒MF、低温成焼⇒MG、低温成焼⇒MH、低温成焼⇒MI、低温成焼⇒MJ、低温成焼⇒MK、低温成焼⇒ML、低温成焼⇒MN、低温成焼⇒MO、低温成焼⇒MP、低温成焼⇒MQ、低温成焼⇒MR、低温成焼⇒MS、低温成焼⇒MT、低温成焼⇒MU、低温成焼⇒MV、低温成焼⇒MW、低温成焼⇒MX、低温成焼⇒MY、低温成焼⇒MZ、低温成焼⇒NA、低温成焼⇒NB、低温成焼⇒NC、低温成焼⇒ND、低温成焼⇒NE、低温成焼⇒NF、低温成焼⇒NG、低温成焼⇒NH、低温成焼⇒NI、低温成焼⇒NJ、低温成焼⇒NK、低温成焼⇒NL、低温成焼⇒NM、低温成焼⇒NO、低温成焼⇒NP、低温成焼⇒NQ、低温成焼⇒NR、低温成焼⇒NS、低温成焼⇒NT、低温成焼⇒NU、低温成焼⇒NV、低温成焼⇒NW、低温成焼⇒NX、低温成焼⇒NY、低温成焼⇒NZ、低温成焼⇒OA、低温成焼⇒OB、低温成焼⇒OC、低温成焼⇒OD、低温成焼⇒OE、低温成焼⇒OF、低温成焼⇒OG、低温成焼⇒OH、低温成焼⇒OI、低温成焼⇒OJ、低温成焼⇒OK、低温成焼⇒OL、低温成焼⇒OM、低温成焼⇒ON、低温成焼⇒OO、低温成焼⇒OP、低温成焼⇒OQ、低温成焼⇒OR、低温成焼⇒OS、低温成焼⇒OT、低温成焼⇒OU、低温成焼⇒OV、低温成焼⇒OW、低温成焼⇒OX、低温成焼⇒OY、低温成焼⇒OZ、低温成焼⇒PA、低温成焼⇒PB、低温成焼⇒PC、低温成焼⇒PD、低温成焼⇒PE、低温成焼⇒PF、低温成焼⇒PG、低温成焼⇒PH、低温成焼⇒PI、低温成焼⇒PJ、低温成焼⇒PK、低温成焼⇒PL、低温成焼⇒PN、低温成焼⇒PO、低温成焼⇒PP、低温成焼⇒PQ、低温成焼⇒PR、低温成焼⇒PS、低温成焼⇒PT、低温成焼⇒PU、低温成焼⇒PV、低温成焼⇒PW、低温成焼⇒PX、低温成焼⇒PY、低温成焼⇒PZ、低温成焼⇒QA、低温成焼⇒QB、低温成焼⇒QC、低温成焼⇒QD、低温成焼⇒QE、低温成焼⇒QF、低温成焼⇒QG、低温成焼⇒QH、低温成焼⇒QI、低温成焼⇒QJ、低温成焼⇒QK、低温成焼⇒QL、低温成焼⇒QN、低温成焼⇒QO、低温成焼⇒QP、低温成焼⇒QQ、低温成焼⇒QR、低温成焼⇒QS、低温成焼⇒QT、低温成焼⇒QU、低温成焼⇒QV、低温成焼⇒QW、低温成焼⇒QX、低温成焼⇒QY、低温成焼⇒QZ、低温成焼⇒RA、低温成焼⇒RB、低温成焼⇒RC、低温成焼⇒RD、低温成焼⇒RE、低温成焼⇒RF、低温成焼⇒RG、低温成焼⇒RH、低温成焼⇒RI、低温成焼⇒RJ、低温成焼⇒RK、低温成焼⇒RL、低温成焼⇒RN、低温成焼⇒RO、低温成焼⇒RP、低温成焼⇒RQ、低温成焼⇒RR、低温成焼⇒RS、低温成焼⇒RT、低温成焼⇒RU、低温成焼⇒RV、低温成焼⇒RW、低温成焼⇒RX、低温成焼⇒RY、低温成焼⇒RZ、低温成焼⇒SA、低温成焼⇒SB、低温成焼⇒SC、低温成焼⇒SD、低温成焼⇒SE、低温成焼⇒SF、低温成焼⇒SG、低温成焼⇒SH、低温成焼⇒SI、低温成焼⇒SJ、低温成焼⇒SK、低温成焼⇒SL、低温成焼⇒SN、低温成焼⇒SO、低温成焼⇒SP、低温成焼⇒SQ、低温成焼⇒SR、低温成焼⇒SS、低温成焼⇒ST、低温成焼⇒SU、低温成焼⇒SV、低温成焼⇒SW、低温成焼⇒SX、低温成焼⇒SY、低温成焼⇒SZ、低温成焼⇒TA、低温成焼⇒TB、低温成焼⇒TC、低温成焼⇒TD、低温成焼⇒TE、低温成焼⇒TF、低温成焼⇒TG、低温成焼⇒TH、低温成焼⇒TI、低温成焼⇒TJ、低温成焼⇒TK、低温成焼⇒TL、低温成焼⇒TN、低温成焼⇒TO、低温成焼⇒TP、低温成焼⇒TQ、低温成焼⇒TR、低温成焼⇒TS、低温成焼⇒TT、低温成焼⇒TU、低温成焼⇒TV、低温成焼⇒TW、低温成焼⇒TX、低温成焼⇒TY、低温成焼⇒TZ、低温成焼⇒UA、低温成焼⇒UB、低温成焼⇒UC、低温成焼⇒UD、低温成焼⇒UE、低温成焼⇒UF、低温成焼⇒UG、低温成焼⇒UH、低温成焼⇒UI、低温成焼⇒UJ、低温成焼⇒UK、低温成焼⇒UL、低温成焼⇒UN、低温成焼⇒UO、低温成焼⇒UP、低温成焼⇒UQ、低温成焼⇒UR、低温成焼⇒US、低温成焼⇒UT、低温成焼⇒UU、低温成焼⇒UV、低温成焼⇒UW、低温成焼⇒UX、低温成焼⇒UY、低温成焼⇒UZ、低温成焼⇒VA、低温成焼⇒VB、低温成焼⇒VC、低温成焼⇒VD、低温成焼⇒VE、低温成焼⇒VF、低温成焼⇒VG、低温成焼⇒VH、低温成焼⇒VI、低温成焼⇒VJ、低温成焼⇒VK、低温成焼⇒VL、低温成焼⇒VN、低温成焼⇒VO、低温成焼⇒VP、低温成焼⇒VQ、低温成焼⇒VR、低温成焼⇒VS、低温成焼⇒VT、低温成焼⇒VU、低温成焼⇒VV、低温成焼⇒VW、低温成焼⇒VX、低温成焼⇒VY、低温成焼⇒VZ、低温成焼⇒WA、低温成焼⇒WB、低温成焼⇒WC、低温成焼⇒WD、低温成焼⇒WE、低温成焼⇒WF、低温成焼⇒WG、低温成焼⇒WH、低温成焼⇒WI、低温成焼⇒WJ、低温成焼⇒WK、低温成焼⇒WL、低温成焼⇒WN、低温成焼⇒WO、低温成焼⇒WP、低温成焼⇒WQ、低温成焼⇒WR、低温成焼⇒WS、低温成焼⇒WT、低温成焼⇒WU、低温成焼⇒WV、低温成焼⇒WW、低温成焼⇒WX、低温成焼⇒WY、低温成焼⇒WZ、低温成焼⇒XA、低温成焼⇒XB、低温成焼⇒XC、低温成焼⇒XD、低温成焼⇒XE、低温成焼⇒XF、低温成焼⇒XG、低温成焼⇒XH、低温成焼⇒XI、低温成焼⇒XJ、低温成焼⇒XK、低温成焼⇒XL、低温成焼⇒XN、低温成焼⇒XO、低温成焼⇒XP、低温成焼⇒XQ、低温成焼⇒XR、低温成焼⇒XS、低温成焼⇒XT、低温成焼⇒XU、低温成焼⇒XV、低温成焼⇒XW、低温成焼⇒XX、低温成焼⇒XY、低温成焼⇒XZ、低温成焼⇒YA、低温成焼⇒YB、低温成焼⇒YC、低温成焼⇒YD、低温成焼⇒YE、低温成焼⇒YF、低温成焼⇒YG、低温成焼⇒YH、低温成焼⇒YI、低温成焼⇒YJ、低温成焼⇒YK、低温成焼⇒YL、低温成焼⇒YN、低温成焼⇒YO、低温成焼⇒YP、低温成焼⇒YQ、低温成焼⇒YR、低温成焼⇒YS、低温成焼⇒YT、低温成焼⇒YU、低温成焼⇒YV、低温成焼⇒YW、低温成焼⇒YX、低温成焼⇒YY、低温成焼⇒YZ、低温成焼⇒ZA、低温成焼⇒ZB、低温成焼⇒ZC、低温成焼⇒ZD、低温成焼⇒ZE、低温成焼⇒ZF、低温成焼⇒ZG、低温成焼⇒ZH、低温成焼⇒ZI、低温成焼⇒ZJ、低温成焼⇒ZK、低温成焼⇒ZL、低温成焼⇒ZN、低温成焼⇒ZO、低温成焼⇒ZP、低温成焼⇒ZQ、低温成焼⇒ZR、低温成焼⇒ZS、低温成焼⇒ZT、低温成焼⇒ZU、低温成焼⇒ZV、低温成焼⇒ZW、低温成焼⇒ZX、低温成焼⇒ZY、低温成焼⇒ZZ

報告番号	分類	通称	グリッド	形状	口径mm	高さmm	底径mm	色調	色調	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考					
種別	器形	種別	番号	大	小			外面	内面	(注)色 質 形状								
133	珠洲焼	片口鉢	-	-	11	Q	I	-	-	明褐色-灰白 赤-白、赤、緑			古銅Ⅲ類 (13C後)					
134	珠洲焼	片口鉢	-	-	10	R	5	I	255	-	緑	浅黄緑	古銅Ⅲ類 (14C前)					
135	珠洲焼	片口鉢	-	-	Ⅹ区		Ⅱ	244	-	灰	灰	灰白	古銅Ⅱ・Ⅲ類 (14C中) ⅡC					
136	珠洲焼	片口鉢	-	-	10	R	2	I	242	-	灰	灰	灰白 石・白、黒、青、緑	古銅Ⅴ類 (15C)				
137	珠洲焼	片口鉢	-	-	15	J	Ⅱ	Ⅱ	-	-	灰	灰	灰 灰 灰・白、黒、青、緑	朝日Ⅴ系一 単位				
138	珠洲焼	片口鉢	-	-	12	N	2	Ⅱ	-	-	灰白	灰白	灰白 石・白、赤	朝日Ⅴ系 一単位以上				
139	珠洲焼	片口鉢	-	-	2	Z	I	-	-	106	灰白	灰	灰白 石・白、黒、赤	朝日Ⅴ系9段 石・白、黒、赤 (注)へんろ	DT+			
140	珠洲焼	壺	-	-	3	Y	Ⅱ	108	-	-	灰	灰	灰 灰 灰 石・白、赤、青、緑	R	朝日Ⅴ系 一単位以上			
141	珠洲焼	壺	-	-	13	M	19	Ⅱ	88	-	灰	灰	灰 灰 灰 石・黒、緑	R	古銅ⅣⅠ類			
142	珠洲焼	壺or瓶	-	-	11	R	14	Ⅱ	-	-	120	灰	灰	黒色 石・白、赤	(底)ヘラ ケズリ			
143	珠洲焼	壺	-	-	15	K	Ⅱ	Ⅱ	-	-	灰	灰白	灰白 石・赤、緑	回糸	漆			
144	珠洲焼	壺	-	-	18	F	16	I	-	-	灰	灰	灰白 石・赤、緑	タタキ				
145	珠洲焼	壺	SD	403	4	Y	6	I	-	-	灰	灰	灰白 石・白、赤、緑	タタキ				
146	珠洲焼	壺	-	-	C区		I	-	-	-	灰	灰	灰白 石・赤、緑	タタキ				
147	珠洲焼	転用磁器具	-	-	13	L	15	Ⅱ	-	-	灰	灰	灰白 石・白、黒、青、緑		2面を 転用	壺又は壺の側 部を転用		
148	土器器	皿	-	-	16	I	16	Ⅱ	94	12	74	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 長・赤、緑	T	(外)黒 色付着	13C末～ 14C	
149	土器器	皿	-	-	16	J	13	Ⅲ	89	-	-	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 長・赤、緑	T+煎道 正 規		13C～14C	
150	土器器	皿	-	-	12	K	Ⅱ	Ⅱ	100	-	-	に 赤い 黄緑	明黄緑	明黄緑 白・赤、緑	T		13C～14C	
151	土器器	皿	-	-	14	M	3	Ⅱ	94	-	-	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 白・赤、緑	T+煎道 正 規		13C～14C	
152	土器器	皿	-	-	16	J	Ⅱ	Ⅱ	112	-	-	に 赤い 黄緑	に 赤い 黄緑	に 赤い 黄緑	石・赤、緑	T+煎道 正 規		13C～14C
153	土器器	皿	-	-	12	K	Ⅱ	Ⅱ	106	-	-	浅黄緑	に 赤い 黄緑	浅黄緑 白・赤、赤、青、緑	T		13C～14C	
154	土器器	皿	-	-	12	M	Ⅱ	I	114	-	-	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 石・白、長、緑	T		13C～14C	
155	土器器	皿	-	-	14	J	20	Ⅲ	130	23	72	浅黄緑	浅黄緑	黄 白・長・赤、緑	T+煎道 正 規		12C末～ 13C前	
156	土器器	皿	-	-	13	L	18	Ⅱ	140	-	-	灰白	浅黄緑	浅黄緑 白・長・赤、緑	T+煎道 正 規		14C	
157	土器器	皿	-	-	16	J	Ⅱ	Ⅱ	122	-	-	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 石・長・赤、緑	T+煎道 正 規		14C	
158	土器器	皿	-	-	10	O	25	Ⅱ	136	-	-	に 赤い 黄緑	に 赤い 黄緑	浅黄緑 白・赤、緑			15C?	
159	土器器	皿	SD	9	11	P	4	I	-	-	72	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 石・白・長、緑	R		15C	
160	瀬戸焼	皿	-	-	13	P	7	Ⅱ	-	-	52	黄白	黄白	黄白 長	回糸。(外) 灰胎			
161	土器器	皿	SD	31	14	M	7	I	-	-	74	黄灰	黄灰	黄 白・赤・長・赤、緑	R+回糸			
162	土器器	皿	-	-	15	J	Ⅱ	Ⅱ	-	-	76	緑	緑	緑 白・赤、赤、緑	R+回糸			
163	土器器	皿	-	-	C区		I	-	-	-	80	浅黄緑	浅黄緑	に 赤い 黄緑	赤、緑	R+回糸		
164	土器器	皿	SD	132	14	M	18	I	-	-	84	浅黄緑	緑	浅黄緑 石・白・赤、長	R+回糸			
165	土器器	皿or椀	-	-	14	L	20	Ⅱ	-	-	74	に 赤い 黄緑	に 赤い 黄緑	灰黄緑～に 赤い 黄緑	石・白、長	R		12C
166	土器器	無台椀	SD	403	4	Y	1	1	148	47	68	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 石・赤、赤、緑	R+回糸		春日Ⅴ-3～ Ⅴ-1類	
167	土器器	無台椀	SD	101	18	J	2.2	1	128	45	56	黄緑 ～ 赤	に 赤い 黄緑	に 赤い 黄緑	白・赤、緑	R+回糸		春日Ⅴ-3～ Ⅴ-2類
168	土器器	無台椀	SD	101	18	J	6.11	1	136	57	60	緑	浅黄緑	浅黄緑 白・長、赤、緑	R+回糸		春日Ⅴ-3～ Ⅴ-3類	
169	土器器	椀	SD	176	14	L	12	1	130	-	-	浅黄緑	緑	浅黄緑 石・白、長	R		春日Ⅴ-3～ Ⅴ-4類	
170	土器器	無台椀	SD	403	4	Y	1	122	42	52	浅黄緑	浅黄緑	浅黄緑 石・白、長、緑	R+回糸		春日Ⅴ-3～ Ⅴ-5類		

観 察 表

土器・陶磁器観察表 (5)

(製作痕跡) ロウカ成焼⇒白、テブク成焼⇒下、普通焼成赤褐色⇒褐色、  
 (胎土) 赤石、灰、白・白色胎子、赤・赤色胎子、黒・黒色胎子、灰・灰白、茶⇒茶色、チャ⇒チャート、  
 ◎⇒高粘結、●⇒低粘結

報告 番号	分 類		通橋	グリッド		順位	口径 mm	高さ mm	底径 mm	色調 外面	色調 内面	胎土 (注)七良 積 込 進	製作痕跡	消費 痕跡	備考			
	種別	器形		種別	番号											大	小	
171	土器器	碗	SD	133	16	J	13	3	144	-	-	橙	浅黄橙	橙 石・赤・緑	R	春日VI-3 VII-6期頃		
172	土器器	無台碗	SD	18	12	K	10	1	-	-	54	浅黄橙	明黄褐	浅黄橙 石・長・赤・緑	R+同系	春日VI-3 VII-7期頃		
173	黒色土 器	無台碗	SD	139	14	J	2	1	142	46	58	浅黄橙	黒	浅黄橙～黒 石・白・長・チ ヤ・緑 (内)七良 胎 製 (胎)茶⇒茶色	(内)七良 胎 製 (胎)茶⇒茶色	(底)へラ横 洗痕	春日VI-3 VII-6期頃	
174	黒色土 器	蓋	SD	276	18	J	6	2	-	-	-	灰	灰	灰赤 石・白・緑			東照城古窯 春日VI期	
175	黒色土 器	蓋	SD	233	13	K	11	1	130	-	-	青灰	灰	灰白				東照城古窯 春日VI期
176	緑胎陶 器	皿 (A2型)	SD	104	16	K	4	1	132	-	-	淡緑灰	淡緑灰	黄灰白				東海産 BC後半
177	土器器	長胴壺	SD	139	14	K	13	1	226	-	-	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 長・赤・緑				BC?
178	土器器	長胴壺	SD	161	14	K	2.3	1	200	340	(測)236	浅黄橙 →灰褐	浅黄橙	明黄褐 長・赤・緑	(土)カキメ (下)タタキ	(外) 横		春日VII期頃 丸底
179	土器器	長胴壺	SX	103	16	J	2.3	II	228	314	(測)230	に赤い 黄橙 →灰黄	橙	に赤い橙 赤・緑	(赤)ハケメ ハケメ (外)ハケメ			BC末 丸 底
180	土器器	碗	-	-	16	K	11	I	154	-	-	橙	橙	橙 石・白・緑	R			
181	土器器	碗	-	-	13	L	5	II	132	-	-	橙	橙	橙 石・白・赤・長・緑	R			
182	土器器	無台碗	-	-	15	L	2.2	II	128	42	60	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 石・長・白・緑	R+同系			
183	土器器	碗	SD	26	12	M	2.2	2	112	-	-	橙	橙	橙 白・黒・長・赤	R			
184	土器器	碗	SD	10	12	P	6	1	105	-	-	橙	に赤い 黄橙	橙 石・白・緑	R			
185	土器器	碗	-	-	13	L	8	II	-	-	-	橙	浅黄橙	橙 白・赤・黒・長・赤	R			
186	土器器	碗	-	-	11	P	19	II	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 長・赤	R			
187	土器器	無台碗	SD	31	12	M	19	1	-	-	62	浅黄橙	橙	橙 石・白・赤・長	R+同系			
188	土器器	無台碗	-	-	13	L	4	II	-	-	68	浅黄橙	橙	浅黄橙 石・白・長	R+同系			
189	土器器	無台碗	-	-	16	L	2.2	1'	-	-	55	橙	に赤い 黄橙	橙 石・白・赤・緑	R+同系			
190	土器器	無台碗	-	-	13	L	7	II	-	-	45	浅黄橙	橙	橙 白・赤・赤・緑	R+同系			
191	土器器	無台碗	-	-	14	L	12	II	-	-	64	浅黄橙	橙	橙 白・長・石・緑	R+同系		(外) 黒染?	
192	土器器	無台碗	SD	12	12	O	2	1	-	-	44	灰白	灰白	淡黄 石・長・緑	R+同系			
193	土器器	小甕?	-	-	12	L	20	II	98	-	-	暗灰黄	浅黄	浅黄 石・長・緑				
194	灰胎陶 器	皿	SK	149	14	I	3	5	144	-	-	灰オリーブ →白	灰オリーブ →白	灰白	(内)灰胎 (ハケメ?)		福岡(90)東大 池田2号	
195	灰胎陶 器	碗	-	-	16	I	5	IIIa	-	-	-	灰白	明オリーブ →灰	灰白	(内)灰胎 (ハケメ?)		福岡(90)東大 池田3号	
196	灰胎陶 器	碗	-	-	13	M	16	II	-	-	72	灰黄	オリーブ →灰	灰白	(内)灰胎		福岡(90)東大 池田3号	
197	土器器	小壺	SF	151	14	I	2	1	126	-	-	に赤い 黄橙	に赤い 黄橙	灰白 白・赤・長・赤	R?			
198	土器器	小壺	-	-	17	J	2.5	II	-	-	(測)158	灰黄褐	に赤い 黄橙	緑 石・赤・赤・赤・赤	ヨコナテ			
199	黒色土 器	蓋	-	-	15	L	21	II	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 白・長	(外)ケズリ		焼成不良	
200	土器器	長胴壺	-	-	2	X	18	IVa	198	288	96	淡黄	淡黄	淡黄 赤・緑	(内外)ハ ケメ		元山-北東 藤川(90)東大 池田3号	
201	黒色土 器	無台坪	-	-	CIX			I	114	28	66	灰	灰白	灰白 白・緑	(底)回転 へラ切り		東照城古窯 産	
202	黒色土 器	坪	-	-	CIX			II	119	-	-	灰白	灰白	灰白 石・白			焼成不良 flr	
203	黒色土 器	杯	-	-	13	M	5	II	116	-	-	灰白	灰白	灰白 石・白・緑			東照城古窯 産	
204	黒色土 器	坪	-	-	2	Y	20	II	129	-	-	灰白	灰白	灰白 石・白・長			東照城古窯 産	
205	黒色土 器	有台坪	-	-	2	Y	20	I	-	-	81	灰	灰	灰白 白・緑			東照城古窯 産?	
206	黒色土 器	杯	-	-	18	I	6	II	130	-	-	灰	灰黄	灰 石・白・緑			東照城古窯 産?	

土器・陶磁器観察表 (6)

(製作痕跡) ロウロ成型⇒丸、テブクね成型⇒下、貫流成形⇒右⇒回赤、  
 (胎土色) 石=石灰、白=白色胎子、赤=赤色胎子、黒=黒色胎子、灰=灰色胎子、茶=茶色胎子、チヤータート、白⇒高純度白、黒⇒研削

報告 番号	分 類		通橋		グリッド		順位		口径 mm	高さ mm	底径 mm	色調		胎土 (注: 七色 項: 回赤)	製作痕跡	消費 痕跡	備考		
	種別	器形	種別	番号	大	小	外面	内面											
207	瓶	杯	-	-	13	K	6	II	141	-	-	灰白	灰白	灰白 石・白・緑			東陽城百餘 産		
208	瓶	杯	-	-	14	J	20	III	147	-	-	灰白	灰白	灰白			東陽城百餘 産		
209	瓶	杯	SD	132	15	M	17	I	134	-	-	灰	灰	暗灰 白・緑			東陽城百餘 産		
210	瓶	有台杯	-	-	2	X	10	I	-	-	-	78	灰	灰白	灰白			西陽城百餘 産?	
211	瓶	無台杯	-	-	10	O	10	II	-	-	-	72	灰白	灰白	灰白 石・白・緑	回赤		西陽城百餘 産	
212	瓶	無台杯	-	-	13	L	8	II	-	-	-	76	灰白	灰白	灰白 赤・緑		(全) 摩耗		
213	瓶	壺	SE	151	14	I	2	3	-	-	-	-	灰オリーブ	灰白	灰白 長・緑	(外) 薄く 自然胎			東陽城百餘 産
214	瓶	壺	SD	168	14	J	10	I	-	-	-	-	黄灰	灰	灰白 黒・黄・緑			西陽城百餘 産?	
215	瓶	壺	SE	169	13	J	19	I	-	-	-	-	黄灰白	灰白	黄灰白 石・緑			西陽城百餘 産?	
216	瓶	壺	-	-	13	M	16	II	-	-	-	-	灰白	灰白	灰白 石・白・緑			東陽城百餘 産	
217	瓶	横瓶	-	-	16	L	12	III b	122	265	(幅) 394		橙 に赤い 橙	橙 長・雲・緑		III部 277 III部 311/319		東陽城百餘 産	
218	瓶	横瓶	-	-	表採			I	-	-	-	-	褐灰	灰	灰~に赤い 石・白			西陽城百餘 産	
219	瓶	長頸瓶	-	-	16	J	11	II	164	-	-	-	灰	灰	灰白 白・長・緑			西陽城百餘 産?	
220	瓶	長頸瓶	-	-	14	L	20	II	-	-	-	-	オリーブ灰	緑灰	黄灰 白・長	(外) 自然 胎		西陽城百餘 産?	
221	瓶	瓶	-	-	表採			I	-	-	-	-	91	灰	灰 白・白			西陽城百餘 産	
222	瓶	蓋	SE	155	14	I	19	I	-	-	-	-	70	灰白	灰白	灰白 石・白・緑		(全) 摩耗	
223	瓶	蓋	SD	39	13	K	9	I	140	-	-	-	灰	灰白	灰白 石・白・赤	(外) ケメ リ		西陽城百餘 産	
226	土製品	輪切口	-	-	C区			I	-	-	-	-	オリーブ 黄橙	橙~浅黄 橙	浅黄橙 白・長・雲			(外) 被熱	
229	土器器 (古墳)	有段(鉢鉢)	SD	404	14	K	13	I	100	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	暗 石・白・長				
230	土器器 (古墳)	高坪	SD	404	14	K	12	I	-	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 石・白・赤・雲			東陽城百餘 産	
231	土器器 (古墳)	坪	SD	401	10	S	14	IV	156	-	-	-	浅黄橙 ~黒	黒	黄灰 石・長・雲・緑	内面: ミガキ (黒色処理)			
232	土器器 (古墳)	壺	-	-	18	I	6	II	118	-	-	-	黒褐	黄灰 黒褐	黄灰 雲・緑				
233	土器器 (古墳)	壺	SD	33	12	L	1	I	-	-	-	-	浅黄橙	浅黄橙	灰白 長・雲・緑				
235	土器器 (古墳)	壺	-	-	18	I	1	II	-	-	-	-	68	浅黄橙	黒	黄灰 赤・長・雲・緑	底部充填法		
236	土器器 (古墳)	壺	-	-	17 18	J J	19 22	II IV	-	-	-	-	56	に赤い 黄褐	に赤い 黄橙	黄白 白・雲・緑			(内外) ハ ケメ
237	縄文土 器	深鉢(加曾利 B1式)	-	-	3	W			114	-	-	-	灰黄褐	黒褐	黒 雲・緑	卑路LR? →磨消	(11鉢) 煤	確認調査2T	

観 察 表

石製品・鉄製品観察表

( ) 内は推定

報告番号	種類	分類	メタル痕/石材	出土位置			長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ (g)	備考			
				遺構番号	層位	グリッド								
45	鉄製品	螺番	-	SE	183	8	14	J	5	42	13	(3)	9.6	
46	鉄製品	螺番	-	SE	183	2	14	J	5	29	5	(3)	2.6	
47	鉄製品	不明	-	SE	183	2	14	J	5	24	17	(3)	3.3	
48	鉄製品	釘	-	SE	183	2	14	J	5	24	3	(5)	4.2	
80	鉄洋	腕型洋	-	SE	180	2	14	I	3	50	26	15	25.6	
81	鉄洋	腕型洋	-	SE	180	2	14	I	3	40	27	18	20.3	
82	鉄製品	釘?	-	SE	180	2	14	I	3	33	28	(5)	10.5	
84	鉄製品	石突?	-	SE	180	2	14	I	3	126	24	23	166.9	
94	石製品	大形砥石	砂岩	SE	167	7	14	J	8	260	191	115	7500	
98	鉄洋	腕型洋	-	SD	12	1	12	O	12	61	42	42	76.2	
102	鉄製品	釘	-	P	294	1				24	4	(4)	2.7	
103	石製品	砥石	砂岩	SD	105	1	16	K	10	110	90	42	640	床直上
104	鉄洋	腕型洋	-	SE	154	1	16	J	2	47	34	26	54.9	
107	石製品	凹石	角閃石安山岩	SE	173	下部	14	J	11	133	129	60	1160	
108	石製品	凹石	角閃石安山岩	SE	173	下部	14	J	11	205	194	117	3840	
224	石製品	不明	-	-	-	1	15	K	13	37	29	14	17.7	
225	鉄製品	釘	-	-	-	1	17	J	16	26	4	2	0.8	
227	鉄洋	鉄洋	-	SD	26	1	12	M	17	58	56	16	41.3	
228	石製品	砥石	凝灰岩	包含層	Ⅲ	18	J	22	97	35	34	160.5		
234	石製品	片刃石斧	凝灰岩	包含層	Ⅱa	12	N	24	33	25	7	7.9		

※ No.94 は500g単位、No.107・108は1kg単位、それ以外は0.1g単位のはかりを使用

木製品観察表

報告番号	分析番号	種類	部位	樹種	木取り	出土位置			長さ・ 口徑 mm	幅・ 底 mm	厚さ・ 断面高 mm	備考			
						遺構番号	層位	グリッド							
62	-	杭	-	トチノキ	芯持	SE	61	9	13	L	10	680	132	103	地下層
67	1	樁	-	イスノキ	縦木取り	SE	159	10	16	J	22	46	92	11	地下層
73	5	遺物	銅板	スギ	椀目	SE	155	13	14	I	19	169	164	135	地下層
	底板		スギ	椀目	地下層										
	結束帯	榎皮	榎皮	地下層											
74	4	遺物	紙板	サワラ	椀目	SE	155	13	14	I	19	162	38	8	床直上
85	3	銅	-	コナラ属コナラ属	板目	SE	167	7	14	J	8	334	117	18	地下層
101	2	箸	-	スギ	割り出し	SE	158	17	16	I	12	196	6	4	地下層
105	-	杭状	-	ブナ科(タリ?)	芯持樹皮付き	SE	154	13	16	J	2	109	27	29	床直上

## 図 版

### 凡例

1 遺構個別図においては、井戸覆土を次のように分類してスクリーントーンを貼付した。

⊘	地山ブロック多量	■	腐植物多量
▨	焼土ブロック多量	▨	炭化物多量
■	黒褐色シルト	▨	粗砂・細砂

2 遺構分割図において、掘立柱建物を構成するピットにスクリーントーンを貼付した。

3 遺構個別図（セクション図・エレベーション図）において、掘立柱建物を構成するピットに●記号を付した。

4 土器は、須恵器を断面塗りつぶし、土器・土師器・珠洲焼を白抜き、緑軸陶器・灰軸陶器にはスクリーントーンを貼付した。また、実測図番号の隣に、種別の略号を付した。

（白）白磁、（青）青磁、（珠）珠洲焼、

（瀬）瀬戸・美濃焼、（灰）灰軸陶器、（緑）緑軸陶器

5 石製品、木製品に付したスクリーントーンの凡例は、実測図とともに個別に示した。

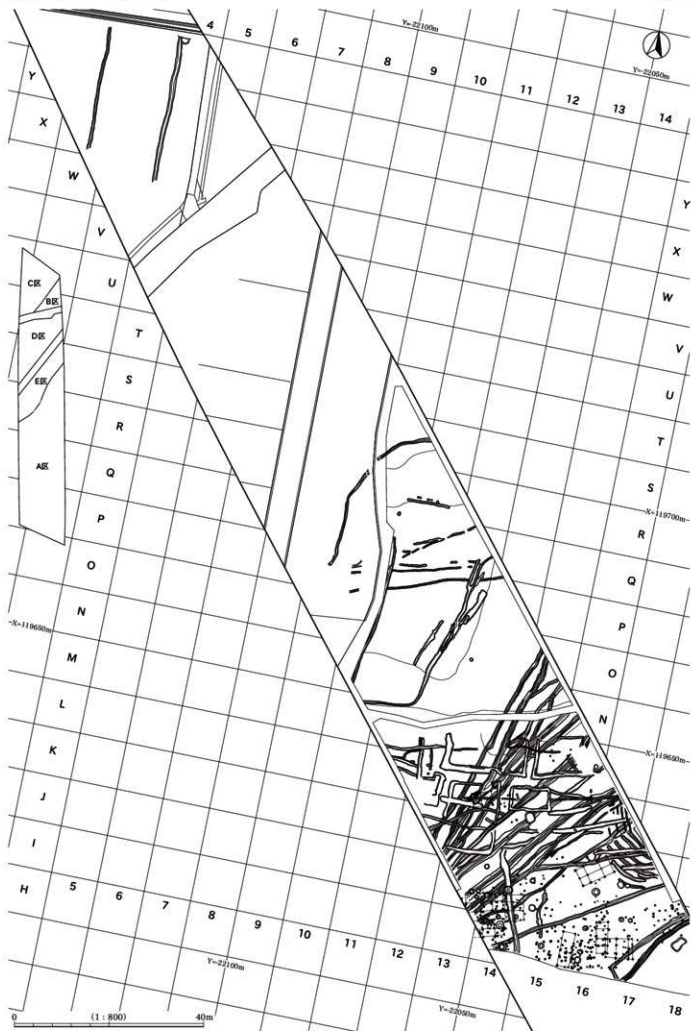
6 木製品の木目は、木取りを表示したものであり、実際の年輪幅とは異なる。

7 遺物写真図版の縮尺は、図面図版と概ね同じである。

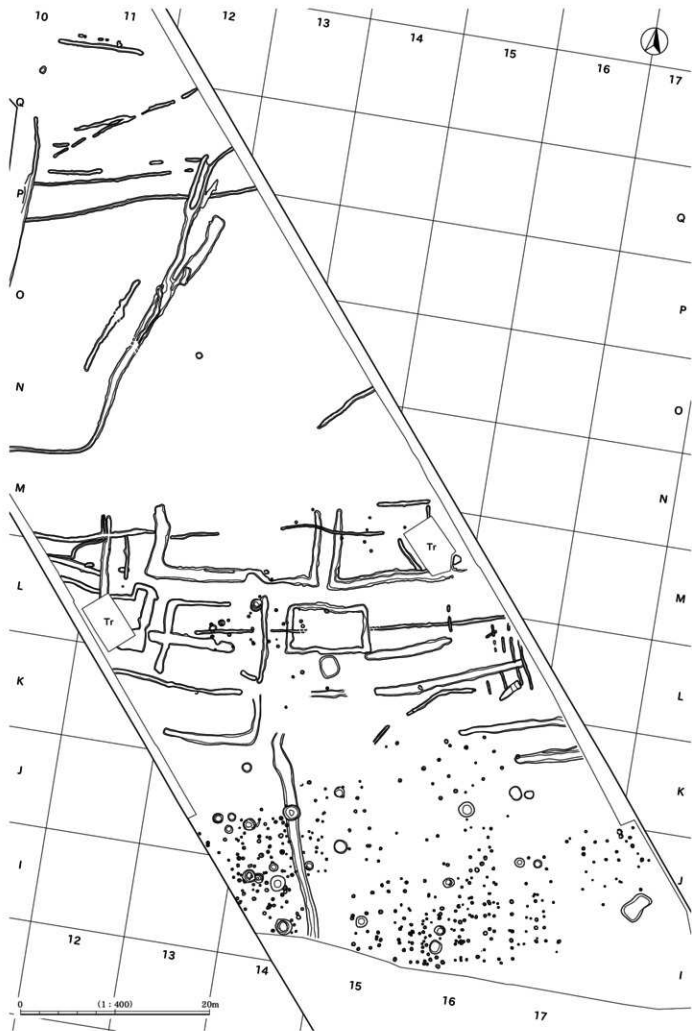
8 上層完備写真（カラーページ）におけるラインの色の相違は時期差を示している。

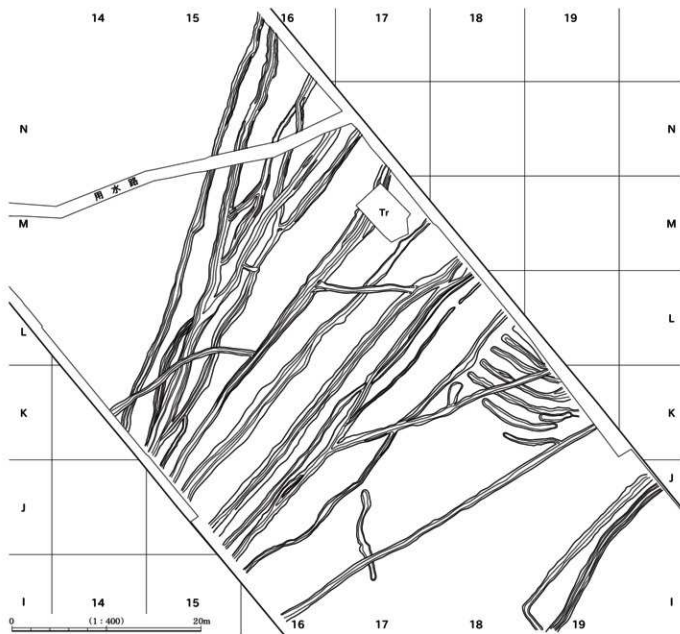
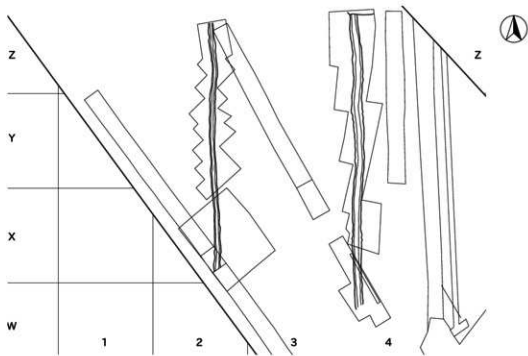
黄色：古代（Ⅱ期）、白色：中世（Ⅲ・Ⅳ期）、

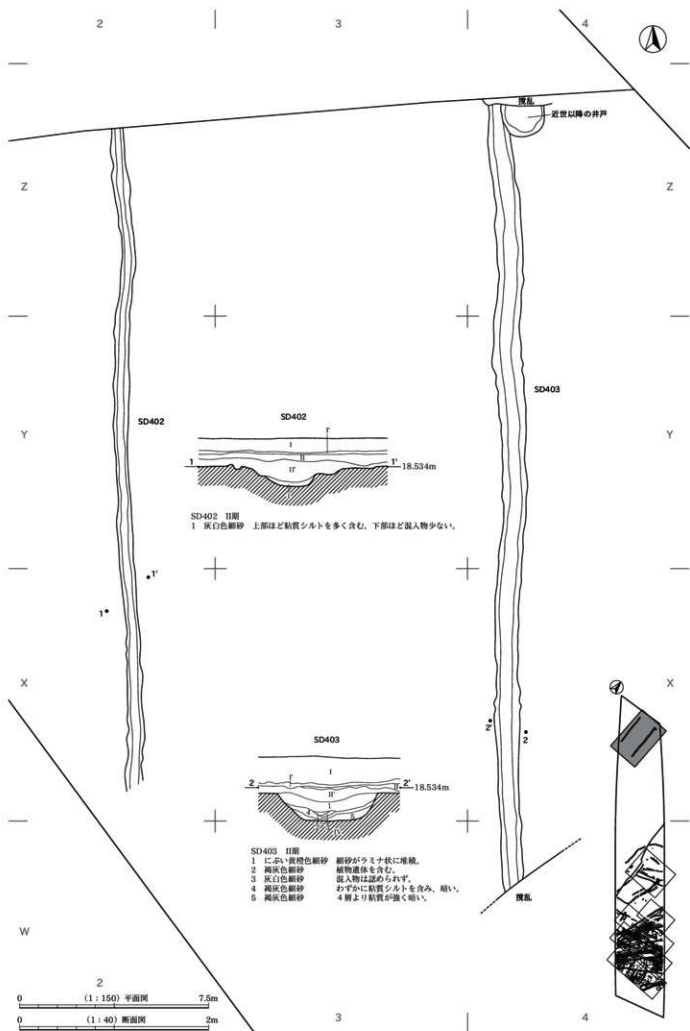
赤色：近世（Ⅴ期）

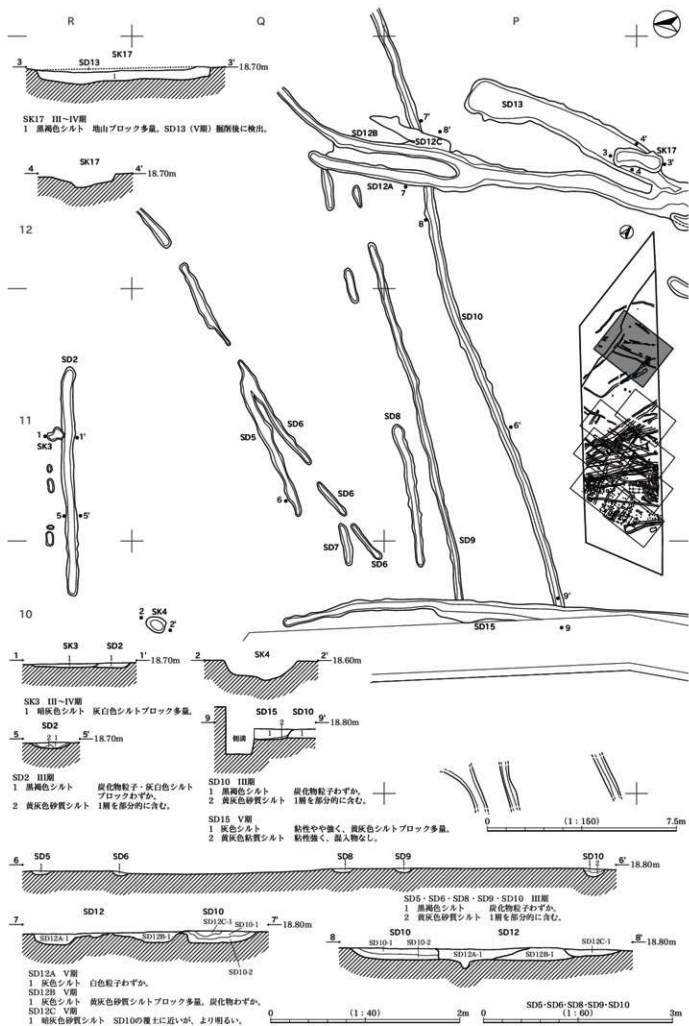


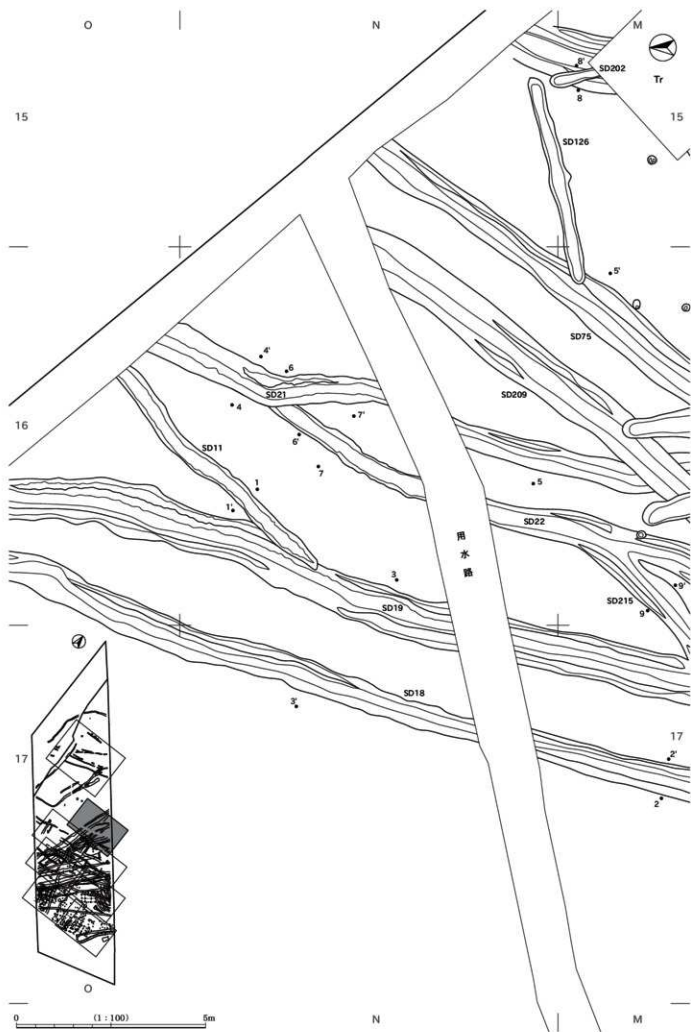


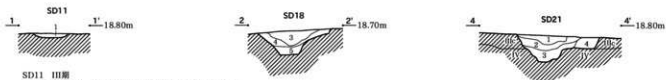






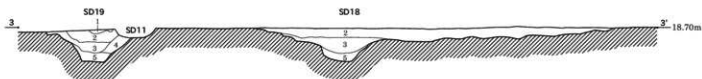






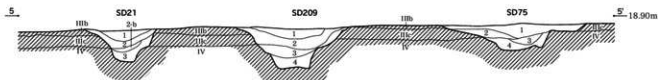
SD11 III期

1 黒褐色シルト 炭化物粒子・灰白色シルトブロック多量。



SD18・SD19 II期

1 淡黄色砂質シルト 砂質が強く、細砂層としてもよい。SD101の覆土によく共通し、混入物なし。  
 2 灰白色シルト 混入物含まず均質。  
 3 褐色粘質シルト 下部に灰白色シルトブロックと見られる淡黄色シルトを多量に含む。  
 4 灰色シルト 3層と共通するが、より細く、灰白色シルトブロックが少ない。  
 5 褐色粘質シルト 暗みが強く、粘性強い。上部に灰白色シルトブロックをわずかに含む。



SD21 II期

1 黄灰色細砂  
 2 灰黄褐色シルト  
 2-b 明黄褐色粘質シルト  
 3 灰黄褐色粘質シルト  
 4 褐色シルト  
 5 暗オリーブ褐色粘質シルト

灰白色シルトブロックを含む。  
 色調が2層よりやや暗い。  
 II期に類似し、3層を多く含む。  
 鉄分の沈着がわずか。

SD75 II期

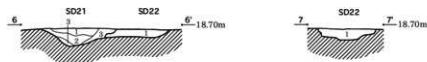
1 黄灰色細砂  
 2 にぶい黄褐色シルト  
 3 暗黄褐色シルト  
 4 オリーブ褐色粘質シルト  
 5 明黄褐色粘質シルト  
 6 黒褐色粘質シルト  
 7 灰黄褐色粘質シルト  
 8 灰黄褐色粘質シルト

明黄褐色細砂をマール状に多く含む。  
 地山をブロック状にごくわずか。  
 2層よりも粘質太さい。地山をブロック状にごくわずかに含む。(2層よりも拡散的)  
 地山ブロック(大)・地山粒子わずか。  
 鉄分の沈着が見られる。IIに層より明るい色調。  
 粘性が極めて強い。底面とIV層との境に弧を描くように鉄分の沈着が見られる。  
 2層より粘性強い。  
 褐色粘質シルトブロック多い。垂直方向に重れる。

SD209 II期

1 明黄褐色細砂  
 2 黄灰色砂質シルト  
 3 オリーブ褐色粘質シルト  
 3-b オリーブ褐色粘質シルト  
 4 黒褐色粘質シルト

2層より粒径が小さく、粘性強い、均質。  
 地山ブロックごくわずか。  
 地山ブロック(2層より大)わずか、鉄分の沈着著しい。  
 3層より色調が暗く、粘性強い。鉄分の沈着極めて多量。3層より地山ブロック多量。  
 粘性は3-b層と同程度。地山ブロックわずか(層縁の傾斜に沿って入る)。鉄分の沈着がわずか。  
 灰白色シルトブロックをごくわずかに含む。地山より色調がうすい。



SD22 II期

1 灰黄色細砂  
 1-b 暗褐色粘質シルト  
 2 オリーブ褐色粘質シルト  
 3 黒褐色粘質シルト

暗褐色粘質シルトをマール状にわずかに含む。  
 灰黄色細砂をブロック状に多く含む。  
 地山粒子ごくわずか。  
 地山粒子及び地山ブロックを多く含む。

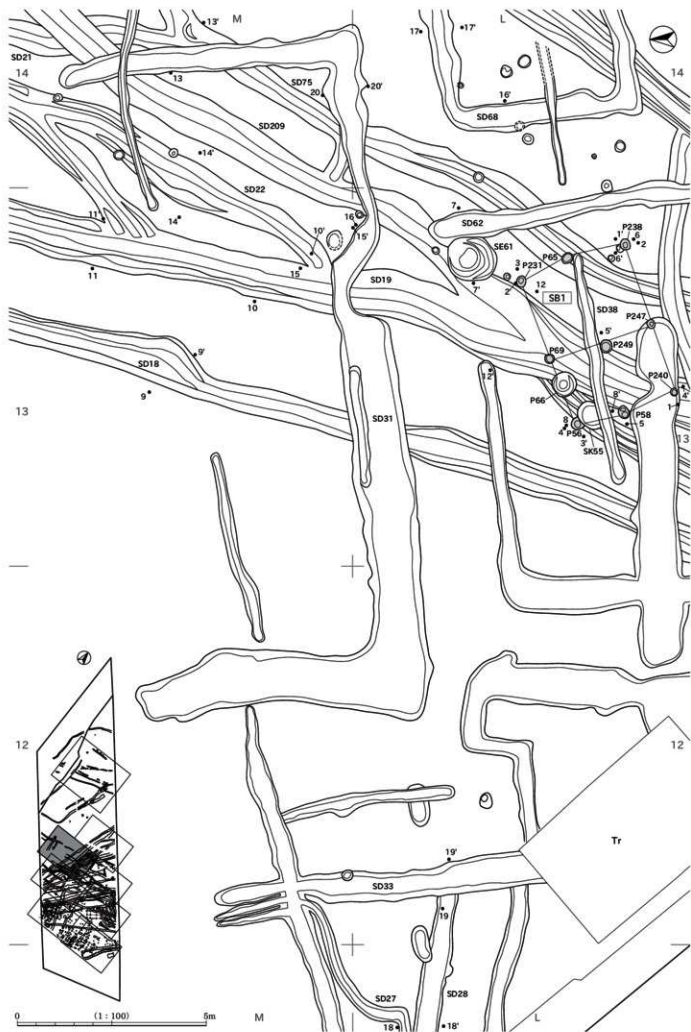


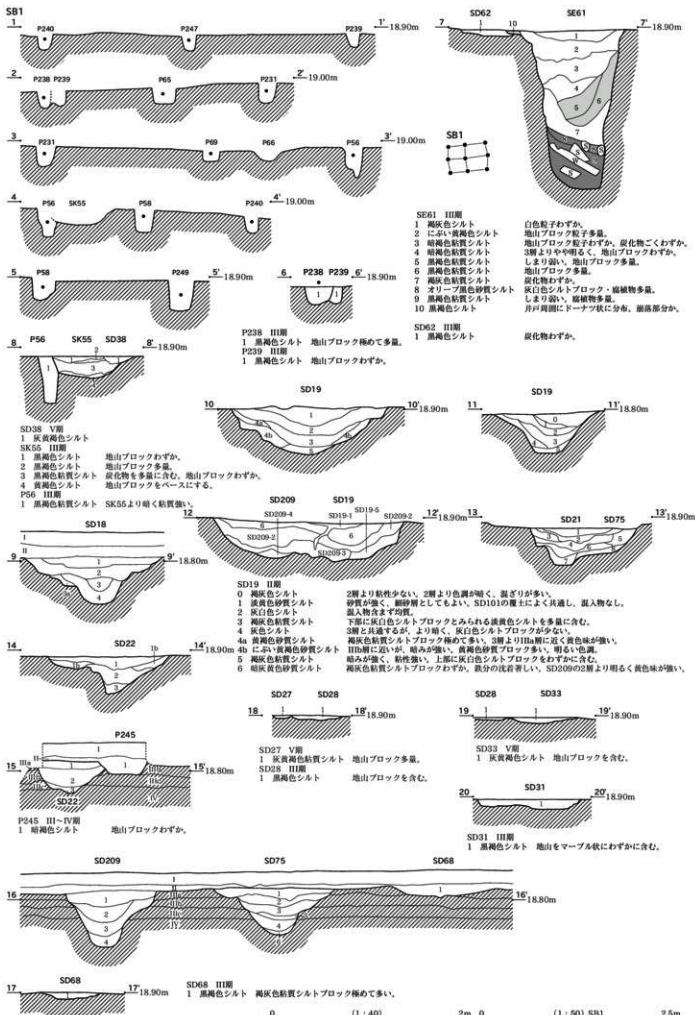
SD202 III期

1 黒褐色シルト 地山ブロックをマール状に多く含む。

SD215 II期

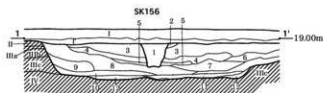
1 淡黄色砂質シルト  
 2 暗褐色シルト 地山ブロック少量。SD22の覆土に類似。











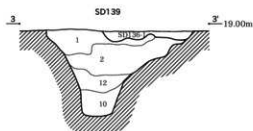
SK156 Ⅱ期

- 1 灰黄色シルト 地山ブロック粒子多量。ピットの覆土か。
- 2 黒褐色シルト 直径1mmの炭化物をごくわずかに含む。
- 3 灰黄色シルト 1層より薄い。地山ブロック粒子わずか。
- 4 灰白色粘質シルト 直径1mmの炭化物粒子ごくわずか。
- 5 黒灰色シルト 炭化物ごくわずか。
- 6 灰黄色シルト 3層と似るが地山ブロック極めて多量。
- 7 黄灰色シルト 地山ブロックわずか。炭化物ごくわずか。
- 8 黒灰色シルト 5層より明るく。炭化物ごくわずか。
- 9 灰黄色シルト 地山ブロック多量。炭化物わずか。
- 10 灰白色粘質シルト 炭化物粒子ごくわずか。
- 11 灰白色粘質シルト 地山ブロックわずか。炭化物粒子ごくわずか。
- 12 にがい黄褐色シルト 地山ブロック極めて多量。鉄分沈着著しい。



SK213 III~IV期

- 1 黒褐色シルト 地山をマール状におわずかに含む。

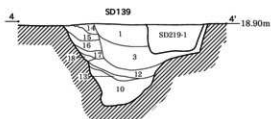


SD139 Ⅱ期

- 1 明黄褐色粘質シルト 鉄分の沈着がみられ。地山ブロック粒子わずか。
- 2 にがい黄褐色粘質シルト 灰を多く含み。短期間に埋まったものと考えられる。混入物なし。
- 3 灰白色粘質シルト 2層と共通するが、より明るい色調。
- 4 灰黄色シルト 地山ブロック粒子わずか。
- 5 黒褐色シルト 鉄分の沈着がみられる。
- 6 明黄褐色粘質シルト 地山ブロック多量。
- 7 黄褐色粘質シルト 鉄分の沈着著しい。混入物なし。
- 8 灰白色粘質シルト 鉄分の沈着著しい。
- 9 灰白色粘質シルト 粘質シルトブロックわずか。
- 10 灰白色粘質シルト 粘性が極めて強い。部分により、縮みを帯びる。
- 11 黒褐色シルト 黒褐色シルトブロック多量。
- 12 灰白色粘質シルト 10層より明るく、細砂を介在する。
- 13 にがい黄褐色粘質シルト 混入物のない粘質シルト。
- 14 にがい黄褐色粘質シルト 地山ブロック多量。IIbと共通するが、混ざりがあり、より薄い。
- 15 黒褐色シルト 地山ブロックを基調とする。
- 16 明黄褐色シルト 地山ブロックを基調とする。
- 17 にがい黄褐色粘質シルト 地山ブロック多量。
- 18 黒褐色粘質シルト IVaを基調とするがより薄い。

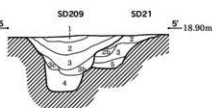
SD136 Ⅲ期

- 1 黒褐色シルト 炭化物粒子わずか。



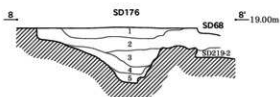
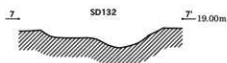
SD219 Ⅱ期

- 1 にがい黄褐色粘質シルト 炭化物ごくわずか。SD139を切っている。
- 2 オリーブ褐色粘質シルト 地山をマール状に多く含む。黒灰色粘質シルトをマール状に多く含むと混ざり混ざりが多い。



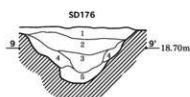
SD132 Ⅲ期

- 1 黒褐色シルト 地山をマール状に少量含む。



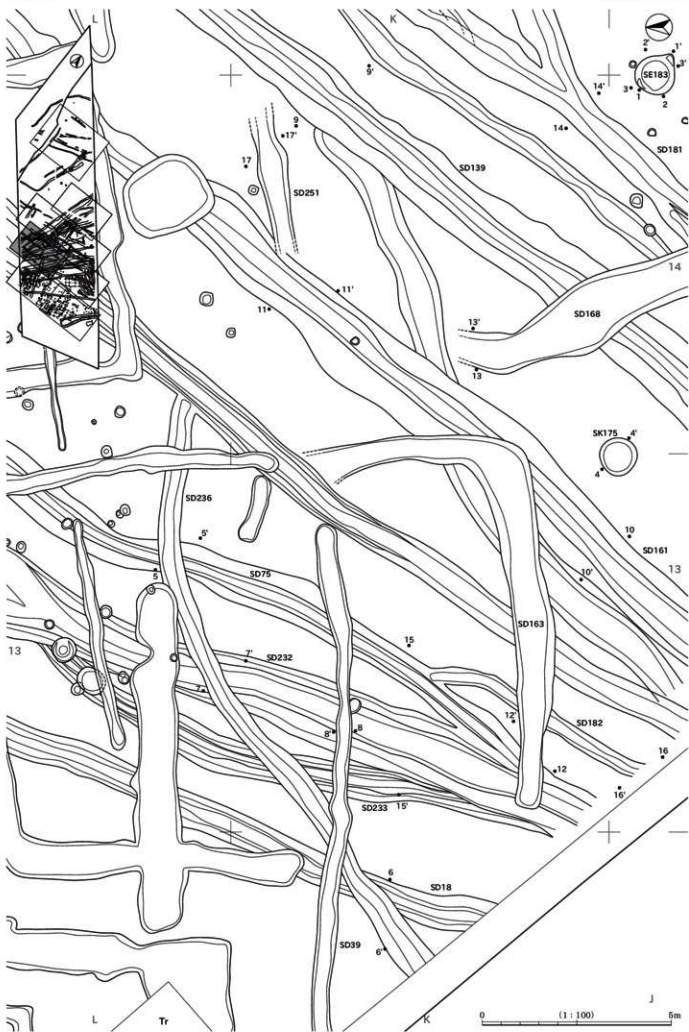
SD176 Ⅱ期

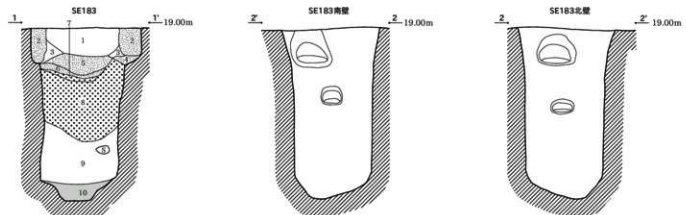
- 1 黄褐色シルト しまり強い。鉄分の沈着わずか。
- 2 灰黄色粘質シルト 均質。鉄分の沈着著しい。
- 3 灰黄色粘質シルト 地山をマール状に多く含む。直径0.3mmの炭化物粒子ごくわずか。
- 4 黒灰色粘質シルト 地山ブロックわずか。
- 5 黒褐色粘質シルト 鉄分の沈着が著しい。特に底面と壁に張り付くように付着。



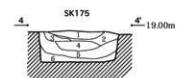
SD201 Ⅲ期

- 1 黒褐色シルト 地山ブロックを多く含む。

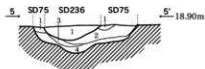
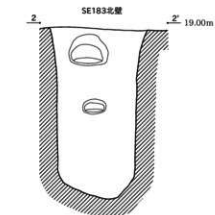




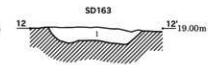
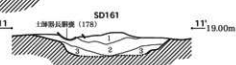
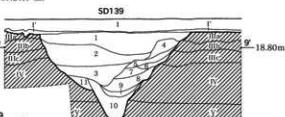
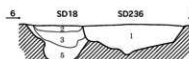
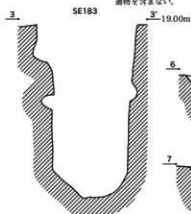
- SE183 田圃**  
 1 におい黄褐色シルト 炭化物・白色粒子ごくわずか。  
 2 黒褐色シルト 炭化物極めて多量。地山ブロック  
 粒子多量。  
 3 灰黄褐色粘質シルト 地山・地山ブロック粒子ごくわずか。  
 4 灰黄褐色粘質シルト 炭化物・地山ブロック粒子多量。  
 5 暗灰色粘質シルト 炭化物・地山ブロック粒子多量。  
 6 黒色シルト 炭化物多量。  
 7 におい黄褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。  
 8 黒色シルト 炭化物わずか。白磁・土師陶器  
 が散在から多量出土。  
 9 暗灰色粘質シルト 灰白色シルトブロック多量。  
 10 黒色粘質シルト 炭化物を含まない。



- SK175 III~IV期**  
 1 黒褐色シルト 地山ブロック少量。  
 2 黒褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 3 灰黄褐色シルト 地山ブロック多量。  
 4 灰黄褐色粘質シルト 地山ブロック多量。  
 5 灰黄褐色シルト 地山粒子わずか。炭分の沈着著しい。  
 6 灰黄褐色粘土 地山粒子わずか。炭化物少量。



- SD236 田圃**  
 1 オリーブ褐色砂質シルト やや緑がかった色調。炭分  
 の沈着が見られる。

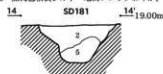


- SD161 田圃**  
 1 黄灰色砂質シルト 灰色粘質シルトブロックわずか。  
 2 灰色粘質シルト 炭分の沈着著しい。  
 3 黒褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。

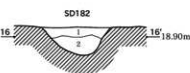


- SD168 田圃**  
 1 黒褐色シルト 地山ブロック粒子ごくわずか。炭分の沈着少し。  
 2 黒褐色粘質シルト 炭化物多量。地山ブロック多量。  
 3 灰黄褐色粘質シルト 炭化物極めて多量。

- SD163 田圃**  
 1 黒褐色シルト 地山ブロックわずか。炭化物わずか。



- SD181 田圃**  
 1 黄褐色シルト SD259の1層に似ているが、より黄色味を帯び、暗灰色粘質シルトブロック及び黒褐色粘質シルトブロックを極めて多く含む。  
 2 暗灰色粘質シルト SD259の2層より色調が暗く、炭分の沈着をわずかに含む。砂質が強い。  
 3 黒褐色粘質シルト 地山粒子。ブロック (小) を多く含む黄白色粘土をラミナ状に含む。  
 4 暗褐色粘質シルト 地山ブロック (大) を多く含む。  
 5 黄褐色粘質シルト 4層及び地山ブロック (小) をわずかに含む。



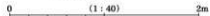
- SD182 田圃**  
 1 黒褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 2 灰黄褐色シルト 炭分の沈着が見られる。

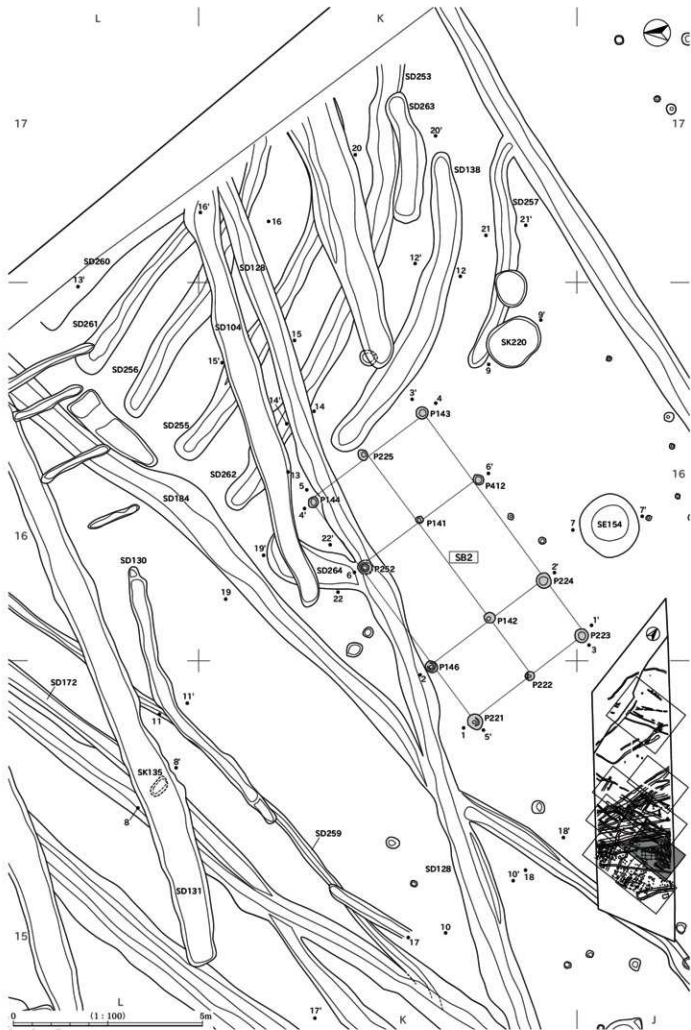
- SD232 田圃**  
 1 におい黄褐色粘質シルト 暗灰色粘質シルトブロックわずか。  
 2 黄褐色砂質シルト 炭分の沈着著しい。  
 3 暗灰色粘質シルト 4層との境に炭分の沈着著しい。  
 4 オリーブ褐色粘質シルト 地山をブロック状にわずかに含む。炭分の沈着著しい。

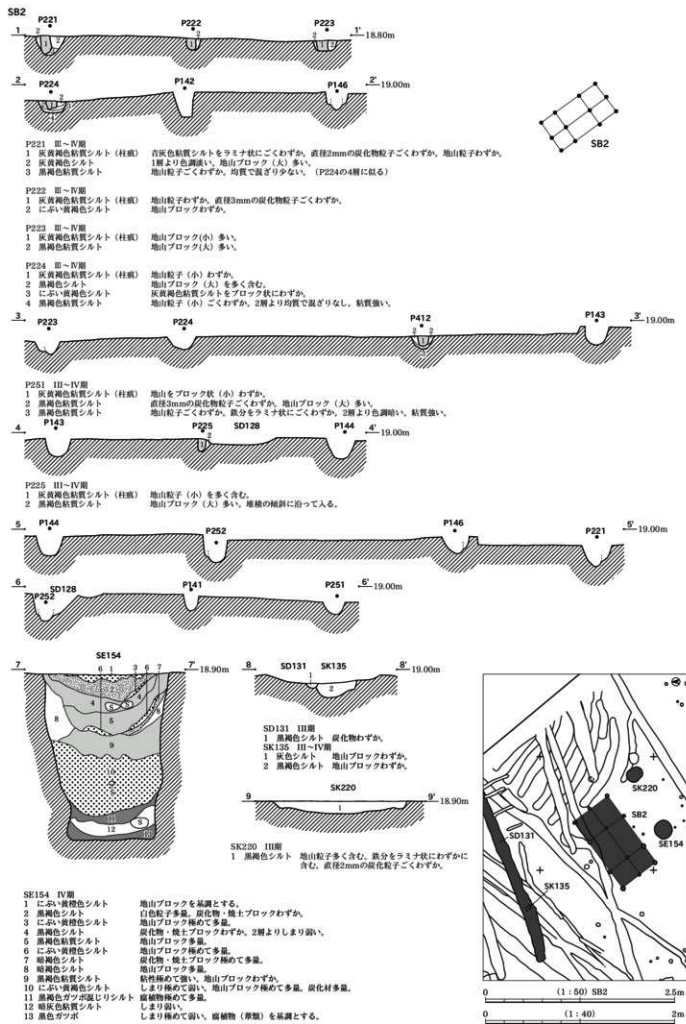


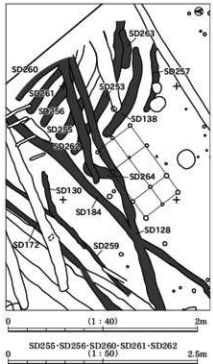
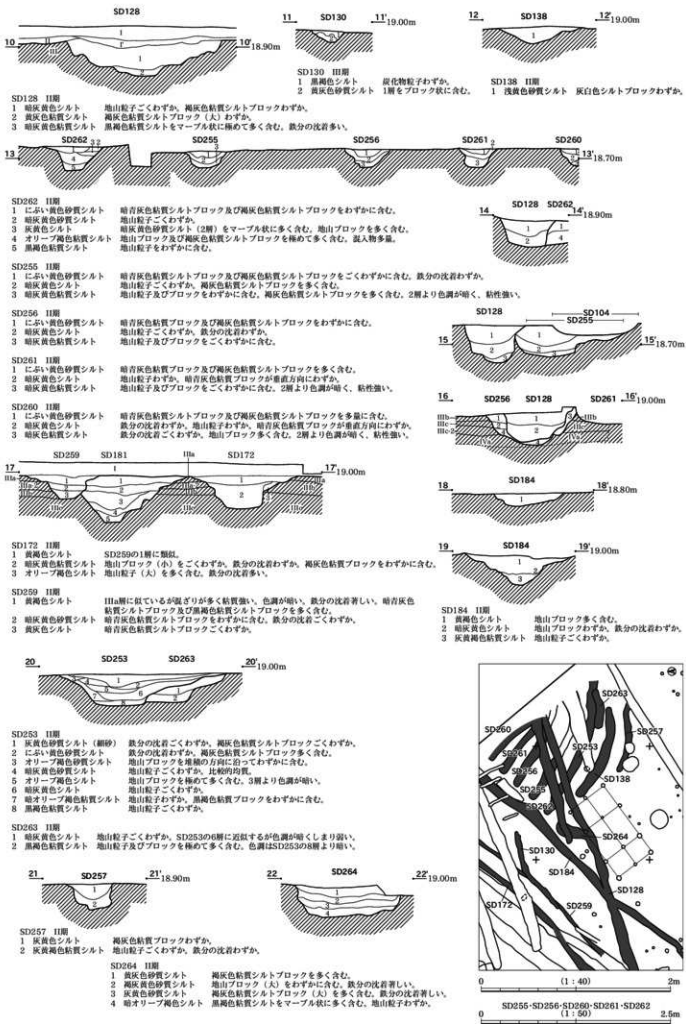
- SD233 田圃**  
 1 黄褐色砂質シルト 暗灰色粘質シルトブロック極めて多量。  
 2 におい黄褐色シルト 4より明るい。暗灰色粘質シルトブロック多量。垂直方向に陥状に入る。  
 3 黄褐色粘質シルト 4より明るい色調で粘性強い。1辺5cm大の四角い黄褐色粘質シルトブロックを2つ含む。  
 4 におい黄褐色粘質シルト 地山との境に暗灰色粘質シルトブロックの陥状の落ち込みを伴う。

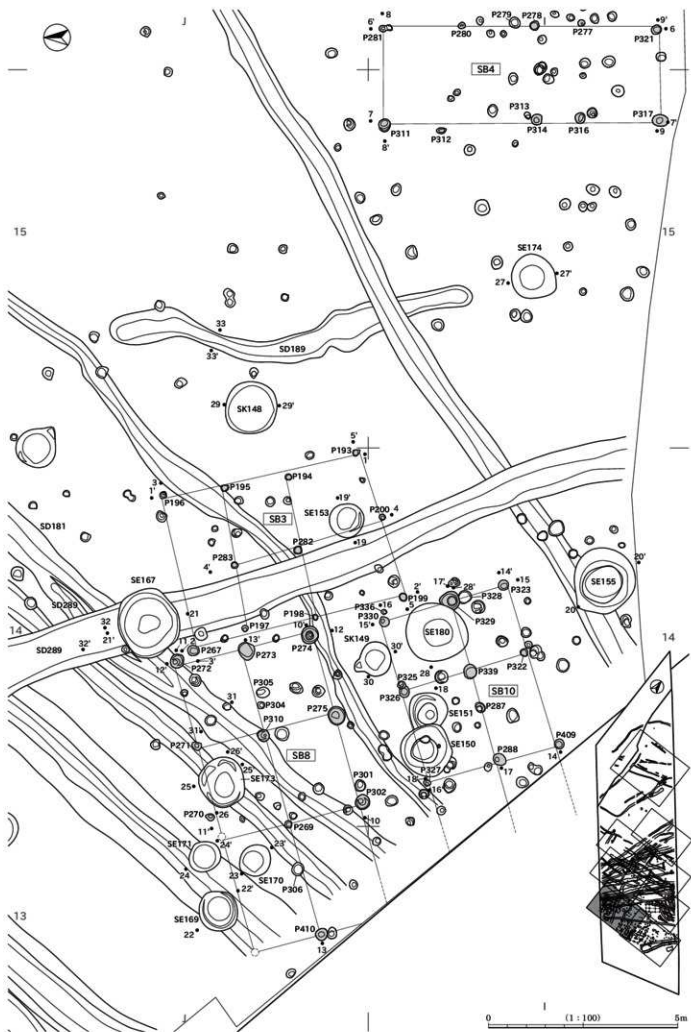
- SD251 田圃**  
 1 黒褐色シルト 地山ブロックわずか。暗灰色粘質シルト  
 ブロックごくわずか。



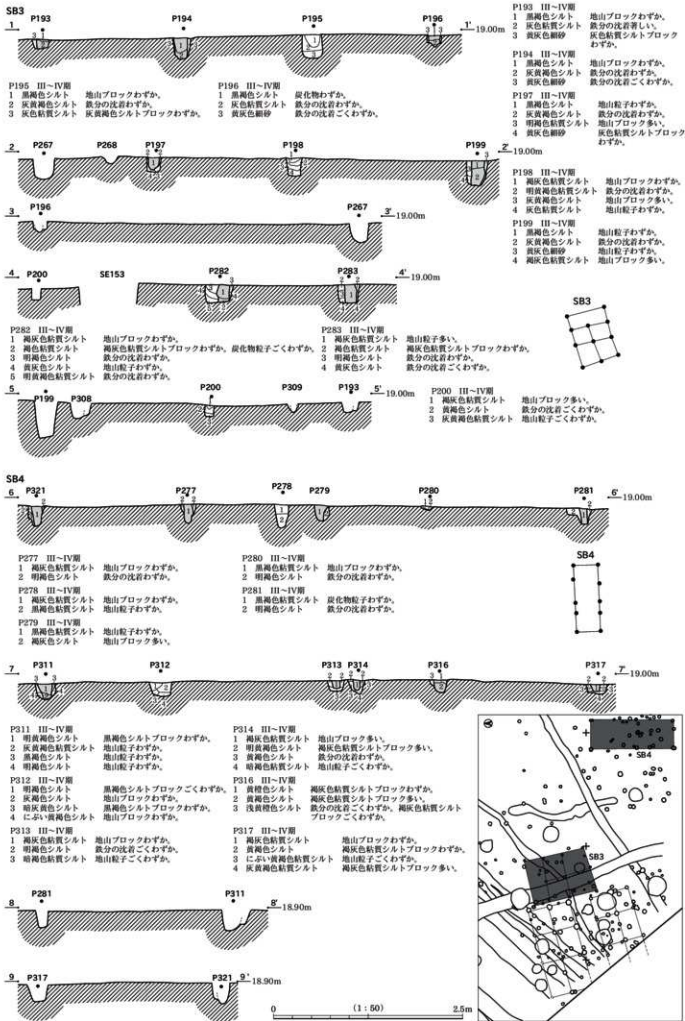




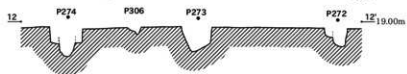
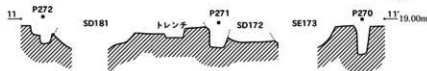
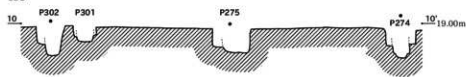






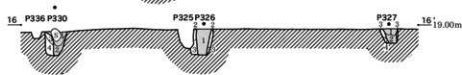
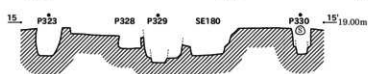
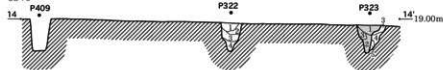


SB8



P269 III~IV期  
 1 黄褐色粘質シルト 炭化物ブロックわずか、薄灰色粘質ブロック多い。  
 2 明黄褐色シルト 炭分の沈着わずか。  
 3 暗褐色粘質シルト 炭分の沈着ごくわずか。

SB10



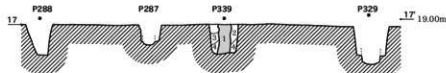
P322 III期  
 1 薄灰色粘質シルト 炭化物ブロックわずか、地山ブロック多い。  
 2 暗褐色粘質シルト 炭化物ブロック多い、地山ブロックわずか。  
 3 灰黄褐色粘質シルト 地山ブロックわずか、炭化物粒子ごくわずか。  
 4 黒褐色粘質土 炭分の沈着ごくわずか。

P323 III期  
 1 薄灰色粘質シルト 炭化物粒子ごくわずか、炭分の沈着わずか。  
 2 灰黄褐色粘質シルト 地山ブロックごくわずか。  
 3 明黄褐色粘質シルト 地山ブロック多い、薄灰色粘質シルトブロックわずか。  
 4 黄褐色シルト 灰黄褐色粘質シルトブロック多い。  
 5 灰黄褐色シルト 地山粒子ごくわずか。

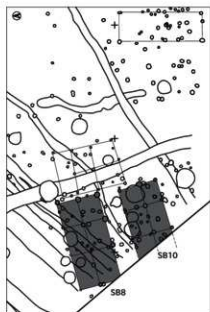
P330 III期  
 1 暗褐色粘質シルト 地山ブロック多い、炭化物ブロックわずか。  
 2 暗褐色シルト 地山ブロックわずか。  
 3 薄灰色粘質シルト 地山ブロックをマール状に多く含む。  
 4 灰褐色シルト 地山粒子わずか、炭分の沈着わずか。

P326 III期  
 1 灰黄褐色粘質シルト 地山ブロック多い、炭化物粒子ごくわずか。  
 2 薄灰色シルト 地山ブロックわずか。  
 3 灰褐色シルト 地山ブロック多い。

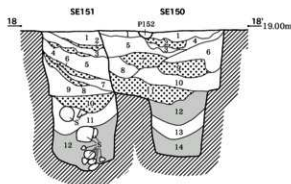
P327 III期  
 1 暗褐色粘質シルト 地山粒子わずか。  
 2 にぶい黄褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 3 黄褐色粘質シルト 地山ブロック多い。  
 4 明黄褐色シルト 地山ブロックわずか、炭分の沈着ごくわずか。



P339 III期  
 1 暗褐色粘質シルト 炭化物粒子わずか。  
 2 黄褐色粘質シルト 暗褐色粘質シルトブロックわずか。  
 3 薄灰色粘質シルト 地山ブロックわずか、炭化物ブロックごくわずか。  
 4 灰黄褐色粘質シルト 地山ブロックごくわずか。



0 (1:50) 2.5m



SE151 III期

- 1 暗褐色シルト
- 2 明褐色シルト
- 3 灰黄色シルト
- 4 明褐色シルト
- 5 灰黄色シルト
- 6 明褐色シルト
- 7 灰黄色シルト
- 8 明褐色シルト
- 9 暗褐色シルト
- 10 にがい黄褐色粘質シルト
- 11 暗褐色粘質シルト
- 12 黒褐色粘質シルト

地山ブロック粒子・白色粒子わずか。  
地山ブロックを基礎とする。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロックを基礎とする。  
地山ブロックごくわずか。  
地山ブロックを基礎とする。  
地山ブロックごくわずか。  
地山ブロックを基礎とする。  
しまり強い。地山ブロックごくわずか。  
地山ブロック極めて多量。  
地山ブロック多量。幸人一人頭大の礫。極めて多量。  
灰白色粘質シルトブロックわずか。幸人一人頭大の礫多量。

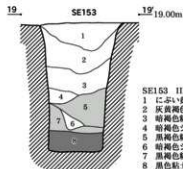
SE150 IV期

- 1 灰黄色シルト
- 2 にがい黄褐色シルト
- 3 にがい黄褐色シルト
- 4 灰黄色シルト
- 5 暗褐色シルト
- 6 褐色シルト
- 7 黄褐色シルト
- 8 灰黄色シルト
- 9 にがい黄褐色シルト
- 10 褐色粘質シルト
- 11 黄褐色粘質シルト
- 12 黒褐色粘質シルト
- 14 黒褐色粘質シルト

白色粒子極めて多量。地山ブロック粒子多量。  
地山ブロック極めて多量。  
地山ブロック多量。2層と1単位の埋め直し。  
1層と共通するが、白色粒子よりわずか。  
白色粒子・地山ブロック多量。炭化物わずか。  
地山ブロック粒子・炭化物わずか。  
地山ブロックを基礎とする。  
地山ブロック多量。7層と1単位の埋め直し。  
地山ブロック極めて多量。  
しまり弱く、崩壊しやすい。地山ブロック多量。  
地山ブロック極めて多量。炭化物ごくわずか。  
地山ブロック多量。  
地山ブロック多量。  
灰白色シルトブロック多量。

P152 V期

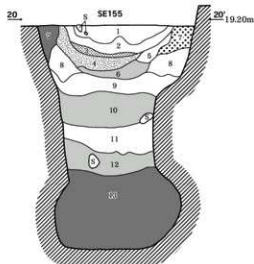
1 褐色粘質シルト 覆土の周囲に鉄分沈着。白色粒子多量。炭化物わずか。



SE153 III期

- 1 にがい黄褐色砂質シルト
- 2 灰黄色シルト
- 3 暗褐色シルト
- 4 暗褐色粘質シルト
- 5 暗褐色シルト
- 6 暗褐色シルト
- 7 黒褐色粘質シルト
- 8 黒色粘土

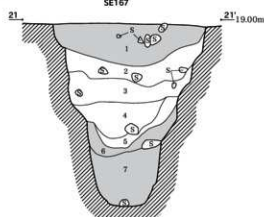
地山ブロック多量。  
地山ブロック粒子・炭化物わずか。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロックわずか。  
炭植物を含み、しまり極めて弱い。



SE155 III期

- 1 灰黄色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 灰色粘砂
- 4 暗褐色シルト
- 5 灰黄色シルト
- 6 黒褐色粘質シルト
- 7 暗褐色シルト
- 8 褐色シルト
- 9 にがい黄褐色粘質シルト
- 10 暗褐色粘質シルト
- 11 黒褐色シルト
- 12 黒褐色粘質シルト
- 13 黒色シルト

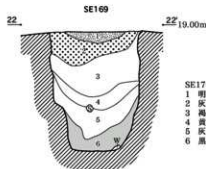
白色粒子多量。炭化物わずか。  
しまり弱い。地山ブロック粒子・炭化物ごくわずか。  
直径1cm程度の礫わずか。  
地山ブロック・炭化物多量。  
しまり弱い。地山ブロック粒子わずか。  
粘砂多量。炭化物わずか。  
地山ブロックを基礎とする。  
地山ブロック多量。  
粘性極めて強い。地山ブロック多量。  
地山ブロック多量。  
地山ブロック多量。鉄分の沈着著しい。  
地山ブロック多量。鉄分の沈着著しい。  
しまり弱く、粘性極めて強い。  
しまり極めて弱く、炭植物多量。溝片口・木炭出土。



SE167 IV期

- 1 黒褐色砂質シルト
- 2 灰黄色砂質シルト
- 3 黒褐色シルト
- 4 にがい黄褐色シルト
- 5 褐色粘質シルト
- 6 褐色シルト
- 7 黒褐色粘質シルト

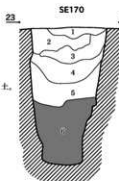
炭化物わずか。  
鉄分の沈着わずか。  
鉄分の沈着が多く見られる。  
しまり弱い。地山ベースの黄色土が主体。  
しまり弱い。灰白色シルトブロックわずか。  
粘性やや強く、しまり弱い。人頭大の礫を多量に含む。  
しまり極めて弱い。人頭大の礫を多量に含む。



SE169 III期

- 1 黒褐色砂質シルト
- 2 灰黄色砂質シルト
- 3 灰黄色砂質シルト
- 4 暗褐色粘質シルト
- 5 灰白色粘土
- 6 黒褐色粘土

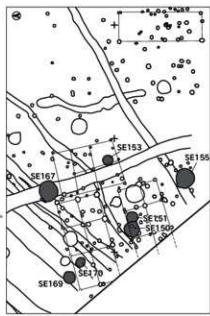
炭化物・黄土ブロック・白色粒子多量。  
地山ブロック極めて多量。炭化物わずか。  
地山ブロック。炭化物わずか。  
やや砂質を帯びる部分あり。  
鉄分の沈着わずか。基礎の砂質は硬化しており段差あり。  
粘性極めて強い。井戸最下層。周囲の砂質は透水層。

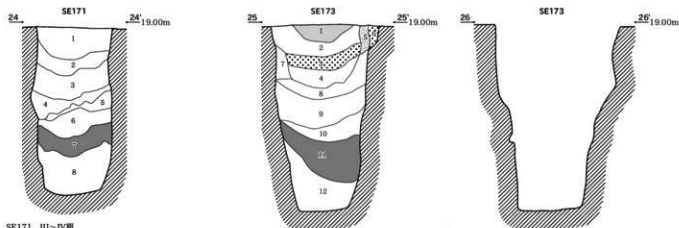


SE170 III-IV期

- 1 明褐色砂質シルト
- 2 灰黄色砂質シルト
- 3 褐色砂質シルト
- 4 黄褐色シルト
- 5 灰黄色粘質シルト
- 6 黒褐色粘質シルト

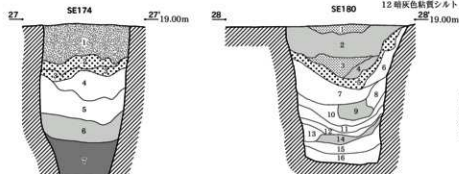
地山ブロックわずか。  
地山ブロック多量。炭化物わずか。  
黒褐色砂質シルトブロック多量。地山ブロック少量。  
地山ブロックわずか。明褐色シルトブロックわずか。  
地山ブロックわずか。鉄分の沈着わずか。  
しまり弱い。炭植物多量。





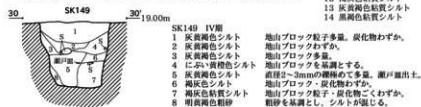
SE171 III~IV期  
 1 赤褐色シルト 地山ブロック多量。  
 2 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 3 赤褐色粘質シルト 直径5mm以下の砂礫多量。  
 4 灰黄色粘質シルト 砂多量。  
 5 赤褐色粘質シルト 灰土シルトブロックわずか。鉄分の沈着著しい。  
 6 赤褐色粘質シルト 5層よりしり深い。  
 7 赤褐色粘質シルト 腐植物わずか。しり深い。  
 8 赤褐色粘質シルト 水分を多量に含む。しり深くて弱い。

SE173 III~IV期  
 1 黒褐色シルト 地山ブロック多量。炭化物わずか。  
 2 赤褐色粘質シルト 中や砂質で他の土層と比べると均質。  
 3 赤褐色粘質シルト 地山ブロックを基調とする。  
 4 赤褐色粘質シルト 地山ブロック・炭化物わずか。  
 5 黒褐色シルト 地山ブロック粘り・炭化物多量。  
 6 赤褐色粘質シルト 地山ブロック極めて多量。地山の崩壊部分か。  
 7 赤褐色粘質シルト 8層より粘り強く。地山ブロック粘りわずか。  
 8 赤褐色粘質シルト 地山ブロックを基調とする。  
 9 赤褐色粘質シルト 8層より中や強く。しり深い。人頭大の礫多量。  
 10 赤褐色粘質シルト しり深い。赤褐色粘質シルトブロック多量。  
 11 赤褐色粘質シルト 腐植物多量。  
 12 赤褐色粘質シルト しり深い。11層より明るい。



SE174 IV期  
 1 赤褐色シルト 白色粘り極めて多量。礫・塊土わずか。  
 2 赤褐色シルト 地山ブロックを基調とする。  
 3 明黄色粘質シルト 地山ブロックを基調とする。2層より粘り強い。  
 4 赤褐色シルト 地山ブロック多量。部分的に粘性強い。  
 5 赤褐色シルト しり深い。礫多量。  
 6 赤褐色粘質シルト 腐植物の少ない粘質土層。  
 7 黒色シルト しり深い。腐植物主体。  
 8 黒褐色粘質シルト しり深い。7層よりは中や強い。部分的に砂を含む。

SK148 IV期  
 1 赤褐色粘質シルト 地山ブロック粘り多量。炭化物わずか。  
 2 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 3 赤褐色粘質シルト 鉄砂を部分的に含む。  
 4 黒褐色シルト 地山ブロック粘りこくわずか。  
 5 赤褐色粘質シルト 地山ブロックを基調。  
 6 赤褐色粘質シルト 炭化物こくわずかに含む。  
 7 赤褐色粘質シルト 直径2cmほどの礫多量。地山ブロック多量。  
 8 赤褐色粘質シルト 地山ブロック多量。  
 9 黒褐色シルト しり深く。直径5mmほどの礫多量。  
 10 赤褐色粘質シルト 直径5mmほどの礫わずか。  
 11 赤褐色粘質シルト 10層より強く。礫を含まない。  
 12 赤褐色粘質シルト 鉄分の沈着が著しい。  
 13 赤褐色粘質シルト 鉄分の沈着が著しい。  
 14 黒褐色粘質シルト しり深い。部分的に砂質。



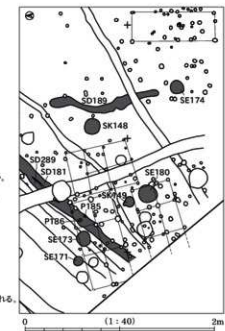
SK149 IV期  
 1 赤褐色粘質シルト 地山ブロック粘り多量。炭化物わずか。  
 2 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 3 赤褐色粘質シルト 地山ブロック多量。  
 4 赤褐色粘質シルト 地山ブロックを基調とする。  
 5 赤褐色粘質シルト 直径2~3mmの礫極めて多量。瀬戸面出土。  
 6 赤褐色粘質シルト 地山ブロック・炭化物わずか。  
 7 赤褐色粘質シルト 地山ブロック粘り・炭化物こくわずか。  
 8 明黄色粘質シルト 粗砂を基調とし。シルトが混じる。

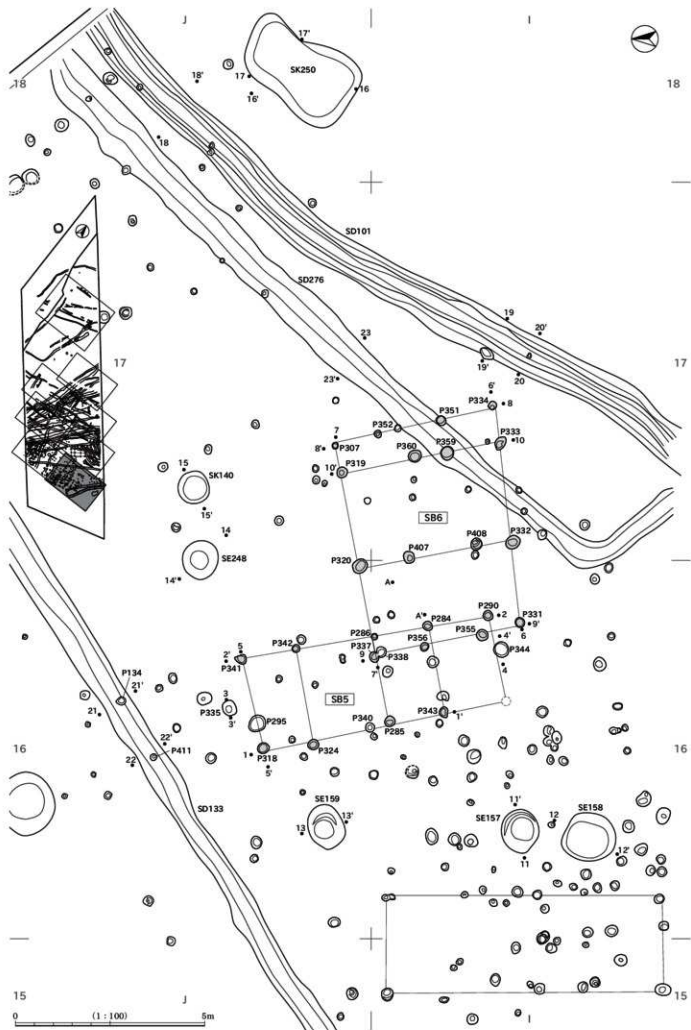
SD289 II期  
 1 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。鉄分の沈着著しい。  
 2 赤褐色粘質シルト 地山粘り多量。  
 3 赤褐色粘質シルト 地山粘り多量。鉄分の沈着著しい。

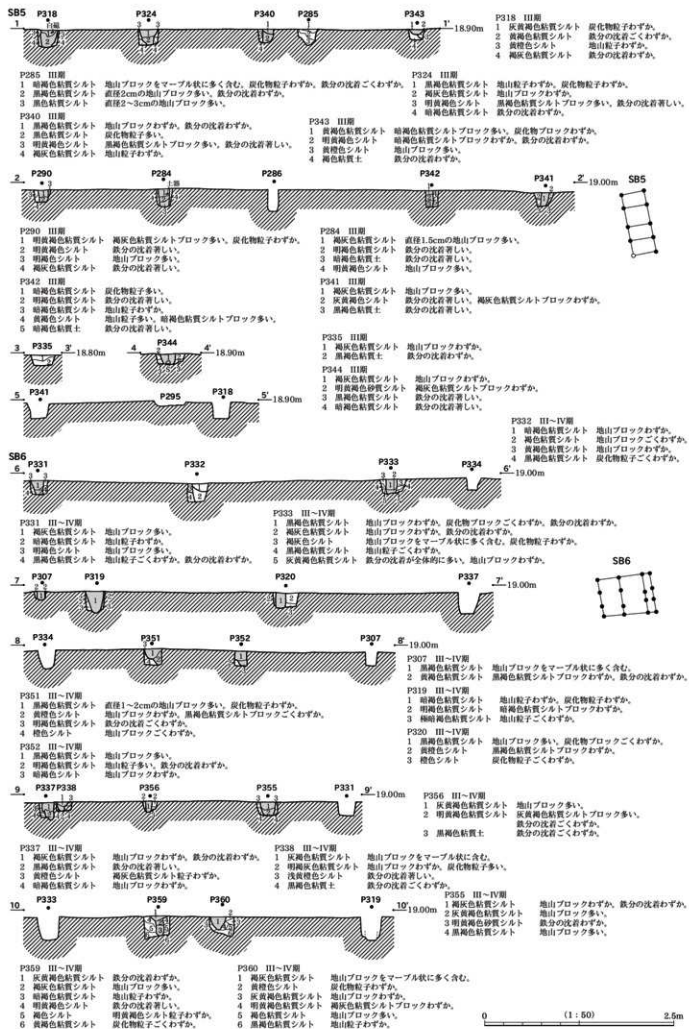
P185 III~IV期  
 1 黒褐色シルト 地山ブロックわずか。  
 P186 III~IV期  
 1 赤褐色粘質シルト 鉄分の沈着わずか。  
 2 赤褐色粘質シルト 鉄分の沈着著しい。  
 3 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。  
 4 黒褐色シルト 地山ブロックわずか。

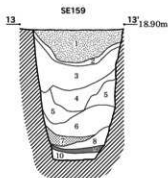
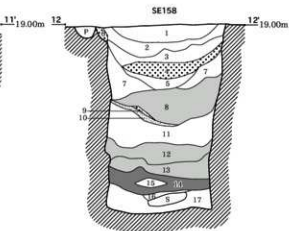
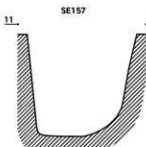
SD189 II期  
 1 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。明黄色粘質シルトブロック極めて多く。鉄分の沈着見られる。  
 2 赤褐色粘質シルト 2層より粘り強い。赤褐色粘質シルトブロック極めて多く。4層との境に多く回っている。  
 3 赤褐色粘質シルト 地山粘りこくわずか。

SD189 II期  
 1 赤褐色粘質シルト 地山ブロックわずか。明黄色粘質シルトブロック極めて多く。鉄分の沈着見られる。  
 2 赤褐色粘質シルト 2層より粘り強い。赤褐色粘質シルトブロック極めて多く。4層との境に多く回っている。  
 3 赤褐色粘質シルト 地山粘りこくわずか。







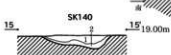
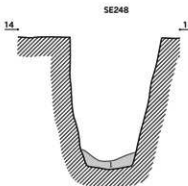


- SE158 III期
- 1 灰黄褐色シルト
  - 2 灰黄褐色粘質シルト
  - 3 にぶい黄褐色粘質シルト
  - 4 にぶい黄褐色粘質シルト
  - 5 灰黄褐色粘質シルト
  - 6 明灰褐色砂質シルト
  - 7 灰黄褐色粘質シルト
  - 8 黒褐色粘質シルト
  - 9 明灰褐色粘質シルト
  - 10 黒色シルト
  - 11 灰黄褐色シルト
  - 12 黒褐色粘質シルト
  - 13 黒色粘質シルト
  - 14 暗褐色ガツボ
  - 15 灰褐色土
  - 16 灰褐色土
  - 17 オリーブ黒色粘質シルト

- SE158 III期
- 地山ブロック多量。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロックわずか。  
地山ブロック極めて多量。炭化物多量。  
地山ブロック多量。炭化物わずか。  
地山ブロックを基調とする。  
地山ブロック。炭化物わずか。  
地山ブロックを基調とする。  
炭化物極めて多量。  
砂礫・地山ブロック多量。  
灰白色シルトブロック多量。  
植物遺体わずか。  
植物遺体 (ゴキ) を基調。  
ガツボ中に部分的に存在。  
混入物見られず。礫の直上のみ分布。  
植物遺体わずか。

SE159 III~IV期

- 1 暗褐色シルト
  - 2 にぶい黄褐色シルト
  - 3 暗褐色シルト
  - 4 にぶい黄褐色粘質シルト
  - 5 暗褐色粘質シルト
  - 6 暗灰褐色シルト
  - 7 黄褐色砂質シルト
  - 8 灰褐色土
  - 9 灰オリーブ褐色ガツボ
  - 10 灰褐色土
- 炭化物・地山ブロック粒子多量。  
地山ブロック多量。  
炭化物・地山ブロック粒子わずか。  
地山ブロック多量。  
地山ブロックわずか。  
炭化物わずか。  
粗砂を多量に含む。  
灰白色シルトブロックわずか。  
アシ類が一括して投げ込まれており、  
灰白色シルトブロックわずか。



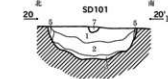
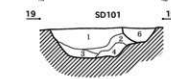
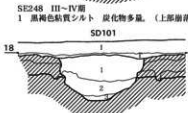
SK140 III~IV期

- 1 黒褐色シルト
- 2 黄褐色砂質シルト

1層をマール状に含む。

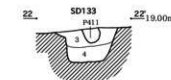
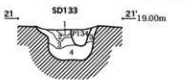
SK250 III~IV期

- 1 にぶい暗褐色粘質シルト
  - 2 黄褐色砂質シルト
  - 3 暗褐色粘質シルト
  - 4 にぶい黄褐色粘質シルト
  - 5 黄褐色砂質シルト
- 暗褐色粘質シルトブロックわずか。地山ブロックわずか。土層断片多い。炭化物粒子ごくわずか。  
直径2cmほどの地山ブロック多い。炭化物ブロック多い。  
地山ブロック。黒褐色粘質シルトブロックマール状に多い。炭化物粒子わずか。  
暗褐色粘質シルトブロックわずかに含む。地山ブロックわずか。炭化物粒子ごくわずか。土層断片多い。  
黒褐色粘質シルトブロック。地山ブロックマール状に多い。炭化物粒子わずか。



SD101 II期

- 1 灰褐色粘質シルト
  - 2 灰黄褐色粘質シルト
  - 3 黄褐色砂質シルト
  - 4 灰黄褐色粘質シルト
  - 5 明灰褐色砂質シルト
  - 6 明灰褐色シルト
  - 7 黒褐色シルト
- 細砂に混入物ほとんどない。土層断片出土。  
鉄分の沈着が著しい。粘性が強く、しりぞい。  
部分的に細砂~粗砂の部分あり。  
鉄分の沈着が著しい。2層よりやや暗い色調。  
地山ブロックを基調とする。断面部分のみ。  
ピットの層土。地山ブロックを基調とする。黒褐色シルトブロックわずか。  
ピットの層土。炭化物わずか。

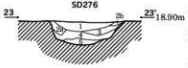


SD133 II期

- 1 灰褐色粘質シルト
  - 2 暗褐色粘質シルト
  - 3 灰黄褐色粘質シルト
  - 4 灰白色粘質シルト
- 灰褐色シルトブロック混在。  
直径1mmを超える粗砂を基調とする。  
粘質シルト混在。ほとんどの層の暗褐色土層。  
粘性極めて強く、炭化物粒子ごくわずか。

P134-P411 III~IV期

- 黒褐色シルト 炭化物粒子わずか。

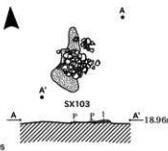


SD276 II期

- 1 灰黄褐色砂質シルト
  - 2a 灰黄褐色砂質シルト
  - 2b 灰褐色砂質シルト
  - 3 明灰褐色砂質シルト
  - 4 灰黄褐色シルト
  - 5 灰黄褐色粘質シルト
- 鉄分の沈着が著しい。  
底面に沿って鉄分の沈着が見られる。  
明灰褐色砂質シルトブロック多量。  
2aより明るく緑色がかかる。  
2bより赤みがかる。1層よりは少ないが、  
鉄分の沈着がやや見られる。  
0層より赤みが強い。  
明灰褐色砂質シルトブロック極めて多量。

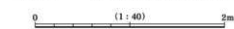
SX103

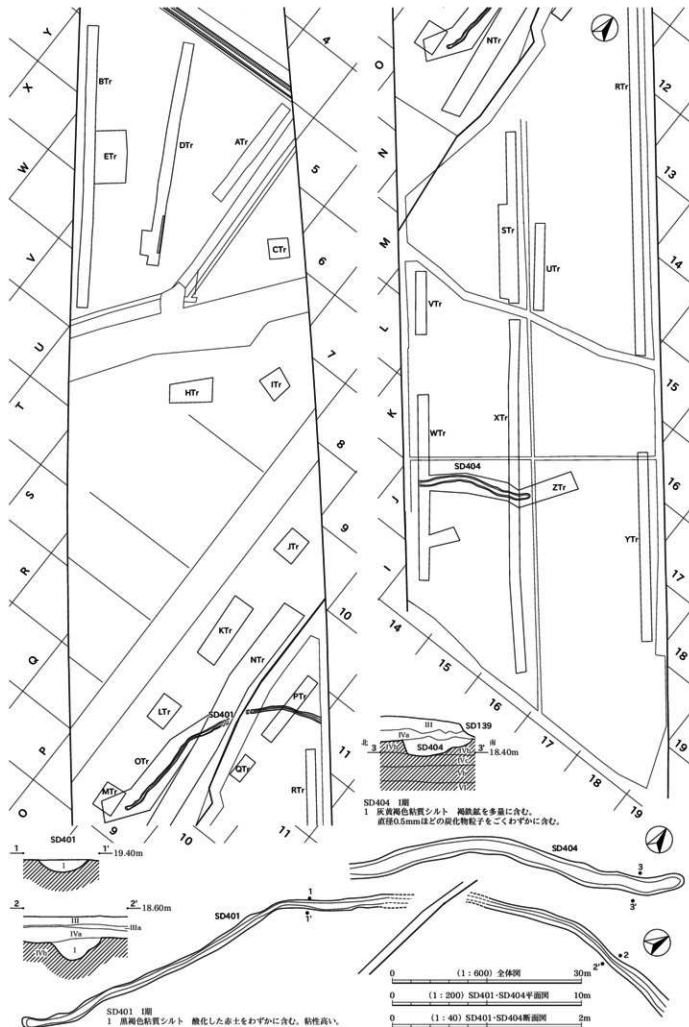
- 1624 1625  
164 165
- 1625 1721  
165 1711



SX103 III期

- 1 白色土
- しりぞき、硬化している。混入物なし。



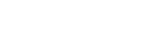
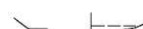
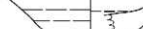
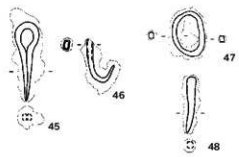
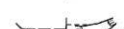
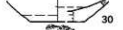
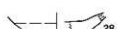
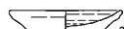
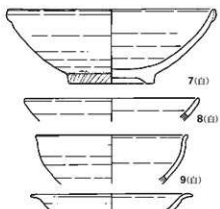
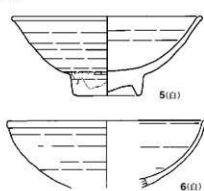
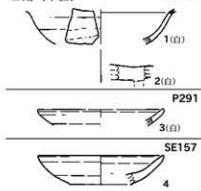




Ⅲ期 (中世)

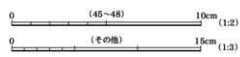
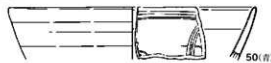
SE153

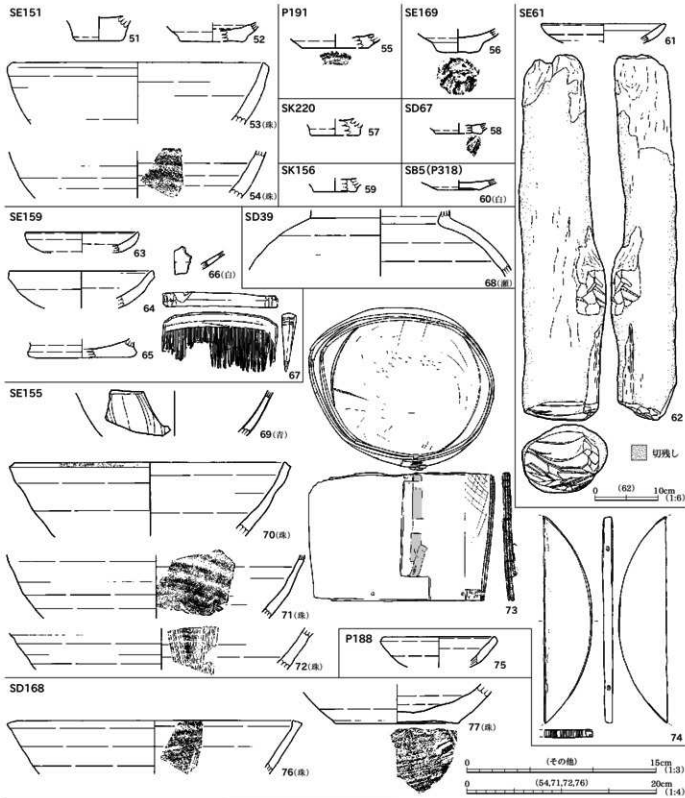
SE183



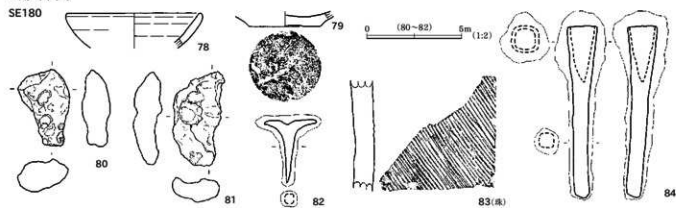
SK55

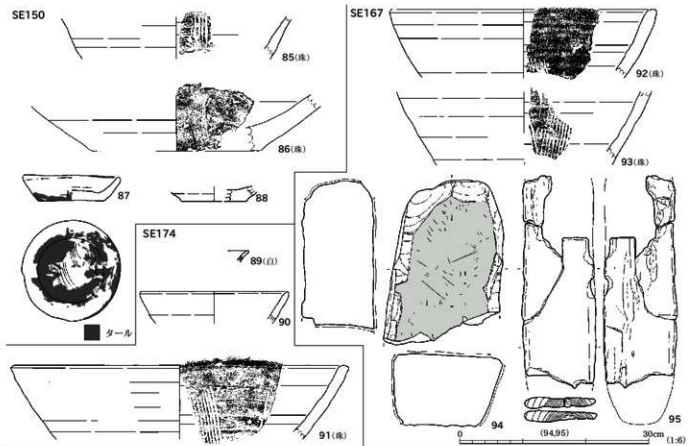
SD251



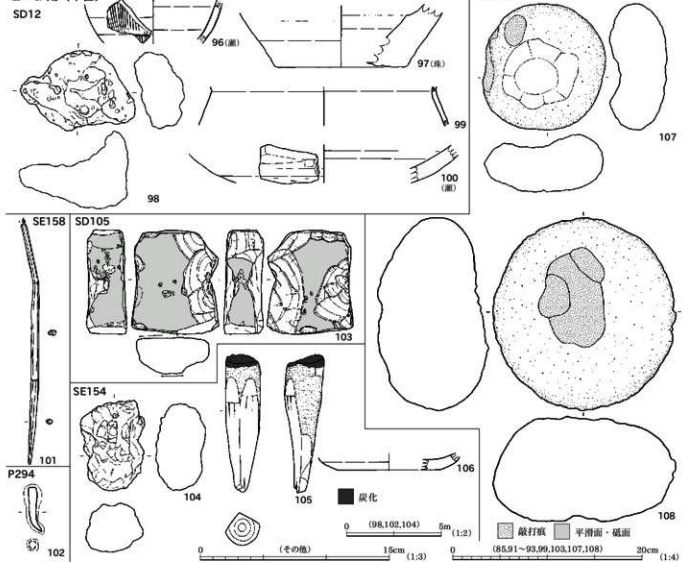


Ⅳ期 (中世)

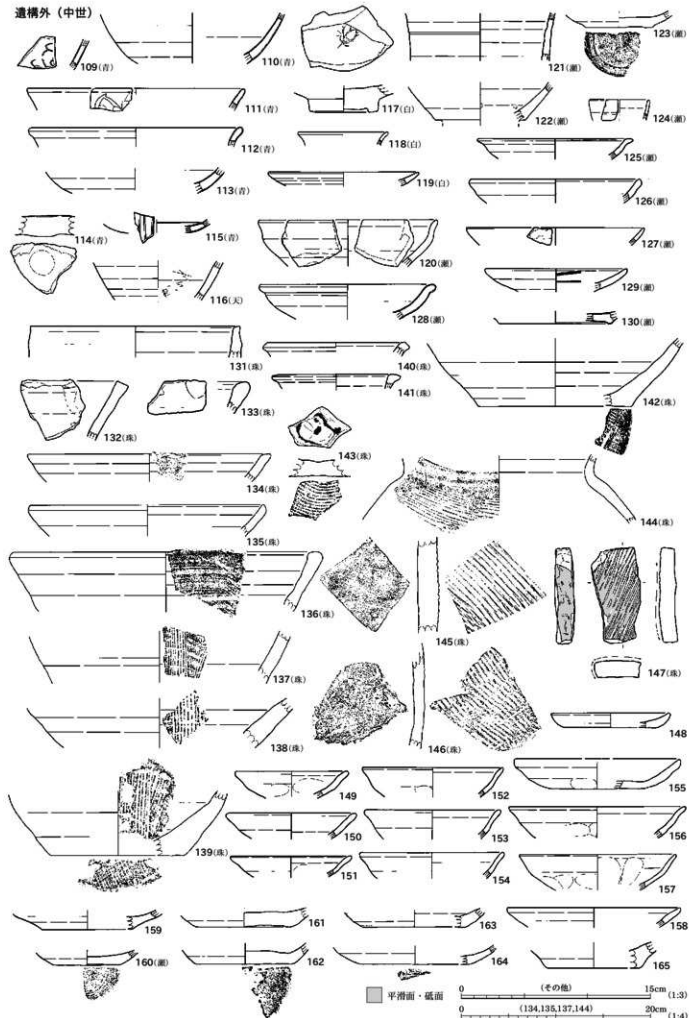




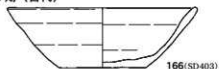
Ⅲ～Ⅳ期 (中世)



遺構外 (中世)



II期 (古代)



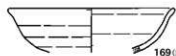
166(SD403)



167(SD101)



168(SD101)



169(SD176)



170(SD403)



171(SD139)



172(SD18)



173(SD139)



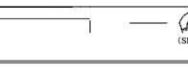
■ 黒色処理



174(SD276)



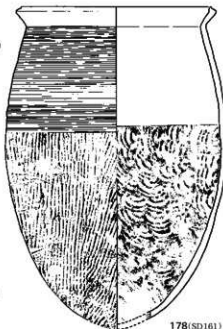
175(SD233)



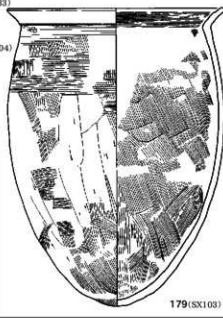
176(緑)(SD104)



177(SD139)

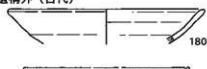


178(SD161)



179(SX103)

遺構外 (古代)



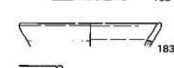
180



182



181



183



184



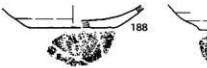
185



186



187



188



189



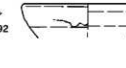
190



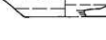
191



192



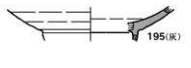
193



194(黒)



197



195(黒)



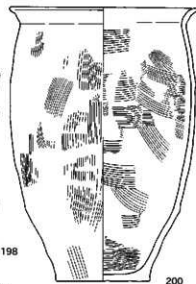
198



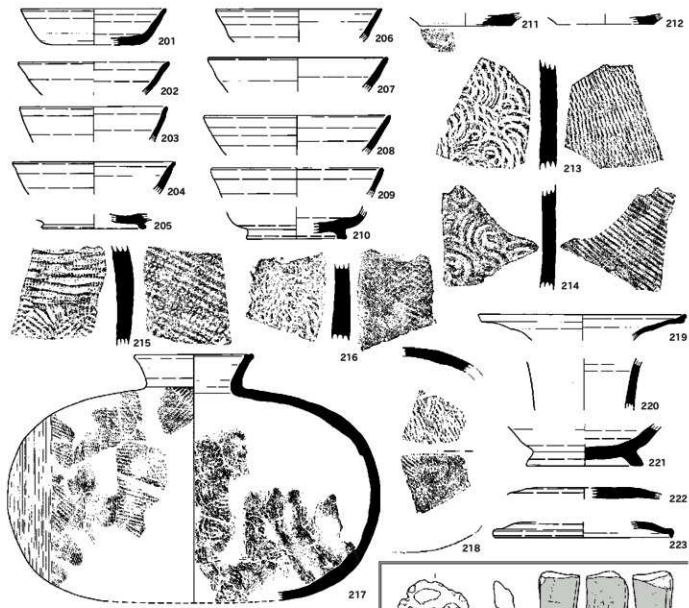
196(黒)



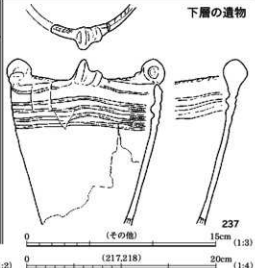
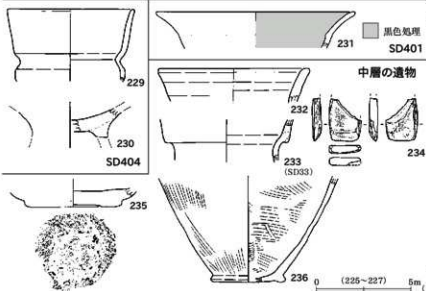
199



200



上層の遺物(時代の詳細不明)



■ 黒色処理 SD401

□ 平滑面・砥面

中層の遺物

下層の遺物

0 (225~227) 5m (1:2)

0 (217,218) 20cm (1:4)



上空から見た用言寺遺跡と周辺の地形

(調査範囲右はJR信越本線協野田駅)



上空から見た用言寺遺跡



遺跡近景 (南東から)



中世の掘立柱建物群 (SB3・SB8・SB10) (西から)





古代の清集中域 (13K、14K、13J、14Jグリッド) (南西から)



SE183 白磁一括資料



調査前近景（東から、右の段差が段丘産）



調査前近景（東から、奥右手が南葉山）



遺跡遠景（南葉山より、矢印の交点が遺跡位置）



上空から見た遺跡



中世の掘立柱建物群（SB3・SB8・SB10）（南西から）



中世の掘立柱建物群（SB4・SB5・SB6）（南東から）



中世の掘立柱建物（SB6）（北西から）



中世の掘立柱建物（SB2）（南東から）



中世の掘立柱建物 (SB2) と古代の溝 (東から)



中世の掘立柱建物 (SB1) (南から)



中世の生産域 (11L, 11M, 12L, 12M グリッド) (西から)



中世の生産域 (15L, 15M グリッド) (北東から)



中世の道路状遺構 (SD9・SD10) (北東から)



古代の溝集中域 (14N, 14O グリッド) (北東から)



古代の大溝 (SD139) (南西から)



古代の大溝 (SD139) (南西から)



古代の溝 (SD101) 遺物 (168) 出土状況 (南西から)



古代の溝 (SD161) 遺物 (178) 出土状況 (南から)



中世の井戸 (SE183) 検出状況 (北から)



中世の井戸 (SE183) セクション (南から)



中世の井戸 (SE183) 究掘 (南から)



中世の井戸 (SE155) 遺物 (73) 出土状況 (北東から)



15J9 グリッド 基本層序 (第7図9号地点、南西から)



12L22 グリッド 基本層序 (第7図9号地点、北東から)



調査前近景 (東から、奥左手が鈴高山)



調査前近景 (西から)



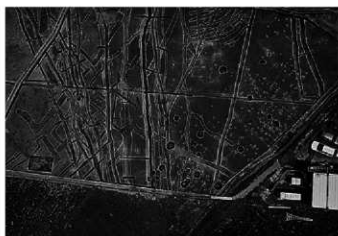
調査前近景 (西から)



調査前近景 (南西から)



上空から見た用雲寺遺跡と周辺の地形



上空から見た用雲寺遺跡



SB3~10 完掘 (南東から)



SB2 完掘 (南から)



SB3・SB8・SB10 完掘 (東から)



中世の生産域 (南東から)



中世の生産域 (北東から)



中世の生産域 (南から)



SD139 完掘 (北東から)



道跡近景 (北西から)



古代の湧集中城 (14N、15N) 完掘 (北東から)



SD402・SD403 完掘 (南から)



SE61 セクション (北から)



SE61 完掘 (北から)



SE61 完掘 (北から)



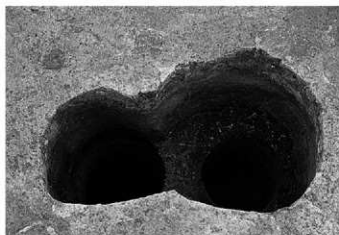
SK149 セクション (南から)



SE150・SE151 横出状況 (北から)



SE150・SE151 セクション (北から)



SE150・SE151 完掘 (北から)



SE150 セクション (北から)



SE150 遺物 (87) 出土状況 (北から)



SE151 セクション (南東から)



SE153 セクション (南東から)



SE153 完掘 (東から)



SE154 セクション (南から)



SE154 完掘 (西から)



SE155 セクション (南から)



SE155 完掘 (北から)





SE157 完掘 (北西から)



SE157・SE158 完掘 (西から)



SE158 セクション (南から)



SE158 完掘 (東から)



SE159 A-A'セクション (南西から)



SE159 B-B'セクション (西から)



SE159 完掘 (西から)



SE167 セクション (南から)



SE167 完掘 (西から)



SE169 セクション (南西から)



SE169 完掘 (北から)



SE169・SE170・SE171・SE173 完掘 (西から)



SE170 セクション (南西から)



SE170 完掘 (南西から)



SE171 セクション (南西から)



SE171 完掘 (東から)



SE173 セクション (北から)



SE173 究掘 (北から)



SE174 遺物 (91) 出土状況 (南から)



SE174 セクション (東から)



SE174 究掘 (北から)



SE180 検出状況 (西から)



SE180 セクション (北から)



SE180 セクション (北から)



SE180 発掘 (北から)



SE183 遺物 (10) 出土状況 (北西から)



SE183 セクション (南から)



SE183 発掘 (北から)



SE183 発掘 (東から)



SE248 発掘 (東から)



SK140 セクション (東から)



SK156 セクション (東から)



SK175 セクション (北から)



SK220 セクション (西から)



SK250 セクション (西から)



SK250 完掘 (南から)



SB4 (P314) セクション (西から)



SB5 (P318) セクション (西から)



SD8・SD9・SD10・SD12 検出状況 (東から)



SD10 セクション (西から)



SD10・SD15 セクション (南から)



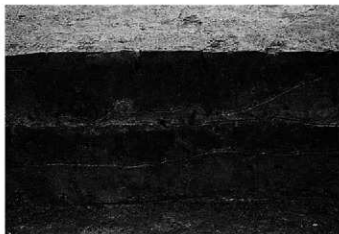
SD68 セクション (西から)



SD132 セクション (南から)



SD163 セクション (南から)



SD251 セクション (西から)



SD18 セクション (南から)



SD18 セクション (北から)



SD18・236 セクション (北東から)



SD19 A-A'セクション (西から)



SD19 B-B'セクション (南から)



SD21 セクション (南から)



SD22 セクション (南から)



SD75 セクション (南から)



SD75 セクション (西から)



SD101 遺物 (167) 出土状況 (南から)



SD101 B-B'セクション (北から)



SD101 C-Cセクション (南から)



SD133 A-Aセクション (南から)



SD133 B-Bセクション (南から)



SD138 セクション (東から)



SD139, SE169・SE170・SE171 横出状況 (南西から)



SD133・289, SE155 横出状況 (北東から)



SD139 遺物 (173) 出土状況 (北から)



SD139 セクション (南西から)





SD161, P162 セクション (西から)



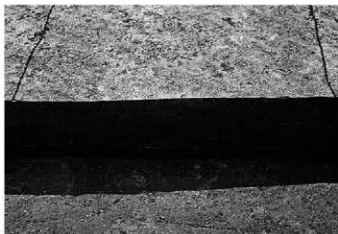
SD172 セクション (東から)



SD176 セクション (西から)



SD181・SD259 セクション (東から)



SD184 セクション (西から)



SD184 セクション (西から)



SD184・SD255・SD256・SD260・SD261・SD262 (16Lグリッド) 様出状況 (東から)



SD189 セクション (南から)



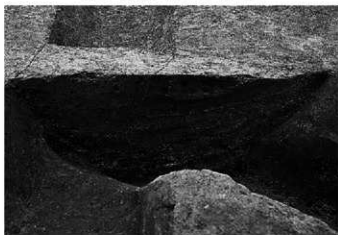
SD209 A-Aセクション (西から)



SD21・SD209 セクション (南から)



SD232 セクション (北から)



SD232・SD236 セクション (西から)



SD75・SD236 セクション (西から)



SD253 セクション (西から)



SD128・SD255 セクション (東から)



SD255 セクション (南から)



SD257 セクション (西から)



SD261 セクション (南から)



SD262 セクション (南から)



SD403 検出状況 (南東から)



SD403 セクション (南から)



SX103 遺物 (179) 出土状況 (南から)



SD401 セクション (西から)



SD401 セクション (西から)



SD401 検出状況 (南西から)



SD401 完掘 (南西から)



SD401 完掘 (南西から)



SD404 セクション (南西から)



SD404 完掘 (南西から)



10R23 グリッド IVa層からの遺物出土状況 (西から)



2X18 グリッド 遺物 (200) 出土状況 (北から)



作業風景 (表土はぎ)



Aトレンチ 完掘 (南から)



Aトレンチ セクション (南から)



Cトレンチ 完掘 (北から)



Dトレンチ 完掘 (西から)



Hトレンチ セクション (東から)



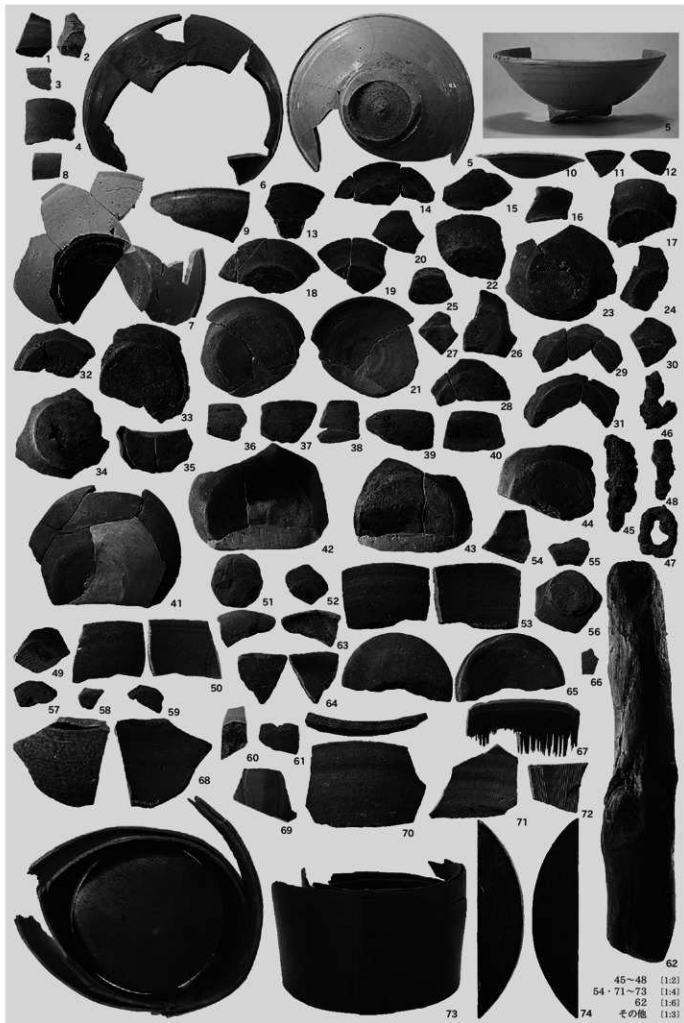
Nトレンチ (SD9・SD10) 検出状況 (西から)



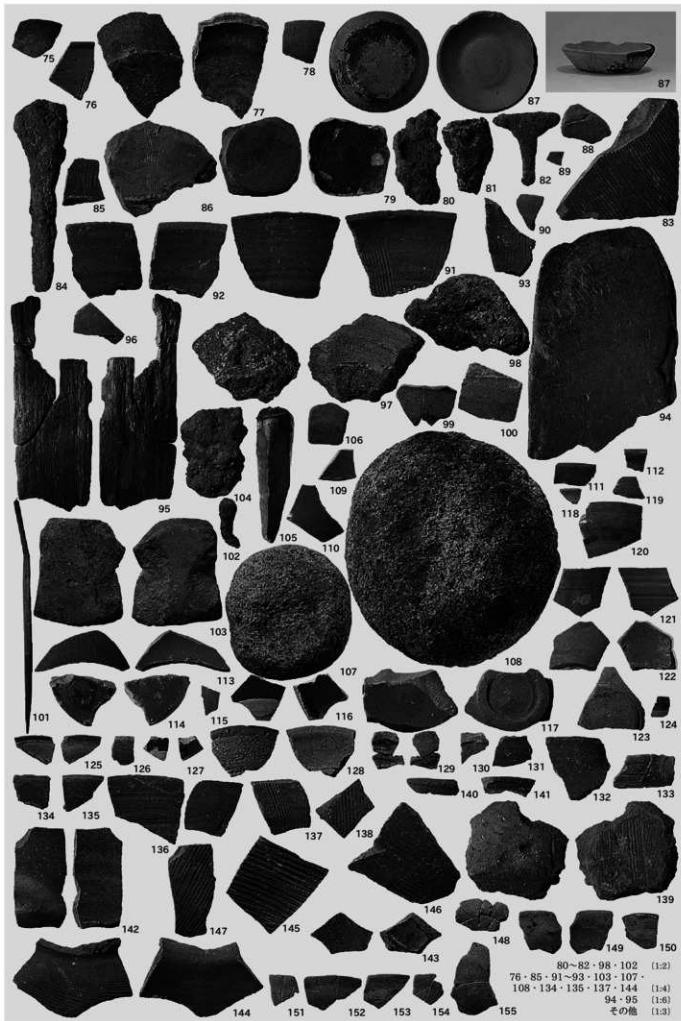
作業風景

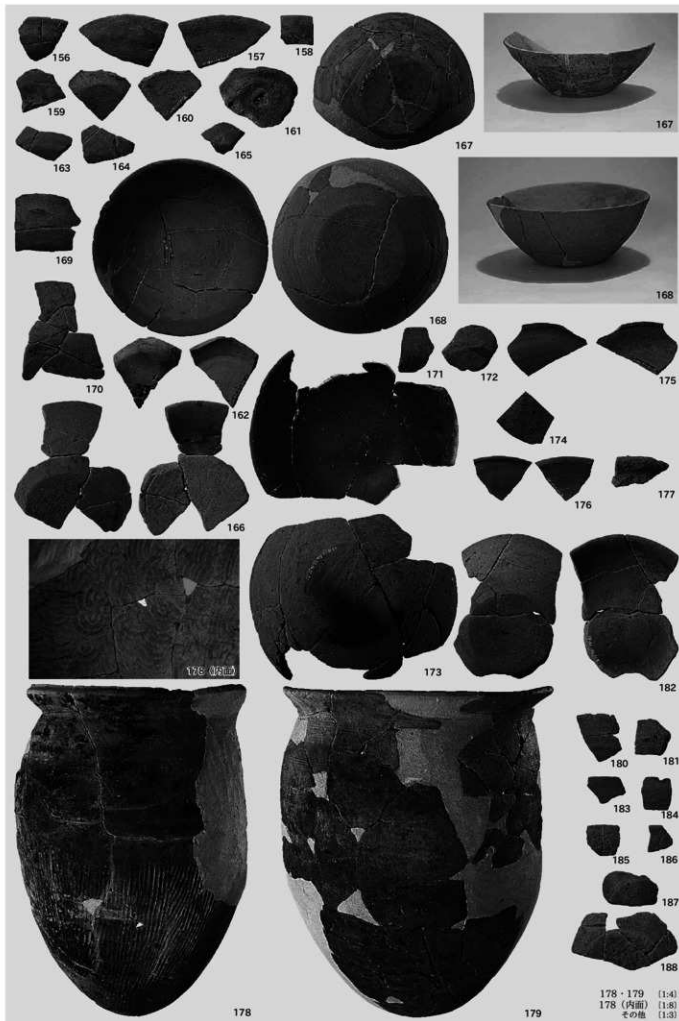


作業風景

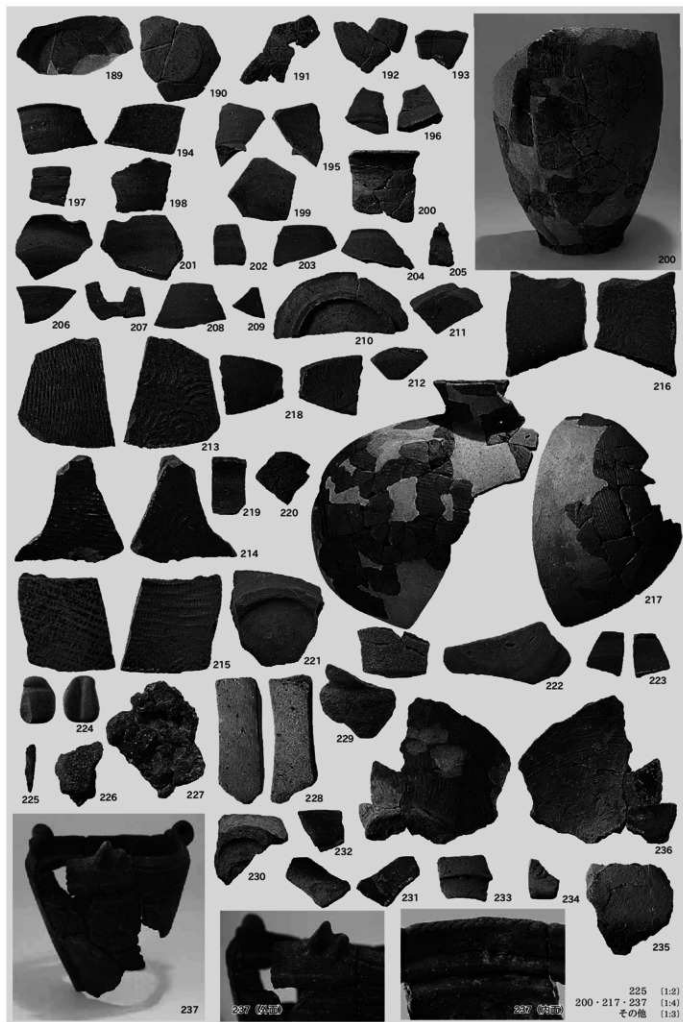


45~48 (1:2)  
 54・71~73 (1:4)  
 62 (1:6)  
 74 その他 (1:3)









## 報告書抄録



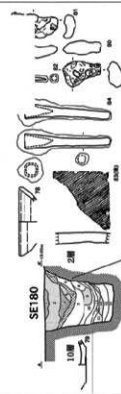
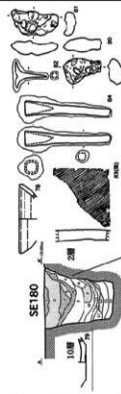
ふりがな	ようごんじいせき いち							
書名	用言寺遺跡 I							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅴ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第159集							
編著者名	加藤 学・杉田和宏・近藤慎子(埋文事業団)、相羽重徳・松永篤知(株式会社 古田組)、株式会社 古墳地研究所							
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2006(平成18)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新潟県上越市大 字今泉 字用言寺 586ほか		222	265	37度 04分 41秒 (新座標)	138度 15分 06秒 (新座標)	20050425～ 20050826	8,890 m <sup>2</sup>	北陸新幹線建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
用言寺遺跡	集落跡	鎌倉～ 室町時代	掘立柱建物 8棟	白磁、青磁、瀬戸 美濃焼、珠洲焼、土師器、鉄 製品	中世前期～後期に至る集落跡が検出された。居住域と生産域が一体的に検出されており、集落構成を考える上で貴重な資料になるものと考えられる。また、井戸から出土した12世紀代の白磁・土師器の一括資料は、質量ともに充実している。			
			井戸 18基					
	土坑 10基							
散布地	平安時代	溝 37条	土師器	溝は、洪水によって埋没したことが明らかになった。また、埋没後には土器祭祀が行われた可能性がある。				
		焼土遺構 1基						
	古墳時代	溝 2条	土師器、磨製石斧					

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集	
北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅴ	
用言寺遺跡 I	
平成18年3月31日印刷 平成18年3月31日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025(285)5511 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市金津93番地1 電話 0250(25)3981 FAX 0250(25)3986
印刷・製本	株式会社 第一印刷所 〒950-8724 新潟市和合町2丁目4番18号 電話 025(285)7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集『用言寺遺跡Ⅰ』正部表追加

頁	位置	畝	正
抄録	北端	37度04分41秒	37度04分50秒
抄録	東端	138度15分06秒	138度14分57秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第159集 用言寺遺跡Ⅰ 正部表

ページ	行数	畝	正
6	下から15行目	須賀遺跡	須賀遺跡
16	第7図		
18	上から9行目	「まばら」、(中略)「隔めてまばら」	「わずか」、(中略)「ごくわずか」
24	第12図		
図版42		SE159 A-A'セクシヨン	SE159 セクシヨン
図版42		SE159 B-B'セクシヨン	SE159 13-13'セクシヨン
図版48		SD19 A-A'セクシヨン	SD19 10-10'セクシヨン
図版48		SD19 B-B'セクシヨン	SD19 11-11'セクシヨン
図版48		SD101 B-B'セクシヨン	SD101 19-19'セクシヨン
図版49		SD101 C-C'セクシヨン	SD101 20-20'セクシヨン
図版49		SD133 A-A'セクシヨン	SD133 21-21'セクシヨン
図版49		SD133 B-B'セクシヨン	SD133 22-22'セクシヨン
図版51		SD209 A-A'セクシヨン	SD209 16-16'セクシヨン